

はじめに

第40回少年の主張全国大会が、平成30年11月11日（日）、秋篠宮佳子内親王殿下の御臨席のもと、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて開催されました。

本大会は、中学生が日頃の生活の中で感じた家族や友人、地域の人々に対する思いや感謝、あるいは感動したり感銘を受けた経験、更には将来への決意などを自分の言葉で表現し、同世代のみならず社会に向けて発表する場として、昭和54（1979）年の「国際児童年」を記念してスタートしました。爾来、この大会を通して、多くの中学生の共感を呼び、また大人の方々に現代の中学生に対する理解と関心を深めていただきたいとの思いも込め、毎年実施されています。

今年は、全国4,298校の中学校から、約52万人の中学生が応募してくれました。

そして、全国大会では、各都道府県の大会で選抜された代表47名の中から、漫画家の松本零士審査委員長をはじめ12名の審査委員で構成される審査委員会により選ばれた12名の中学生が、それぞれの思いや決意を発表しました。

内閣総理大臣賞を受賞した山形県代表の岩淵 礼姫さんは、「人生を駆け抜ける」と題し、周りの人々の支えにより、卑劣ないじめから、一歩踏み出した経験をもとに、命を大切に、自分らしく幸せになるために人生を駆け抜けること主張しました。

文部科学大臣賞を受賞した島根県代表の高梨 はなさんは、両親の国籍が違うからこそ、それぞれの国の良さを伝えていくために『ハーフ』ではなく『ダブル』の生き方を目指していきたいと主張し、国立青少年教育振興機構理事長賞を受賞した熊本県代表の坂本 優さんは、熊本地震をきっかけに始めた避難所でのボランティア演奏を通して、誰かの役に立つことで感じる喜びや達成感、人として生きる幸せの追及であると語ってくれました。このほか、思春期の自分と母親との葛藤を題材とした主張を始め、笑いの大切さや社会貢献など、今大会も多種多様な発表が見られました。

この報告書では、全国大会で発表された12作品をはじめ、各都道府県の代表となられた47作品全てを掲載しています。いずれも中学生らしい澆刺とした感性豊かな文章で綴られています。一人でも多くの方々に彼らの主張をお届けできれば幸いです。

最後に、本大会の開催に当たり、応募して下さった全国の中学生、地方大会の開催に多大なご協力をいただきました各都道府県並びに青少年育成会議、ご後援、ご協力を賜りました内閣府、宮内庁、文部科学省をはじめとする関係機関、団体等の皆様に心から感謝を申し上げます。

平成31年 3月
国立青少年教育振興機構
理事長 鈴木 みゆき



もくじ

少年の主張全国大会風景	1
少年の主張都道府県大会風景	5
少年の主張全国大会出場者の発表作品	6
＜内閣総理大臣賞 山形県代表 岩淵 礼姫さん＞	7
＜文部科学大臣賞 島根県代表 高梨 はなさん＞	8
＜国立青少年教育振興機構理事長賞 熊本県代表 坂本 優さん＞	9
＜審査委員会委員長賞 静岡県代表 内山 ほの葉さん＞	10
＜審査委員会委員長賞 愛知県代表 富田 真亜玖さん＞	11
＜国立青少年教育振興機構奨励賞＞	12
努力賞授与式／努力賞受賞者のプログラム	19
少年の主張全国大会努力賞受賞作品	20
実施概要	56
審査委員の感想	58
視聴者アンケート・コメント抜粋	64
少年の主張全国大会を振り返って＜参考資料＞	66
第41回少年の主張全国大会 開催のお知らせ	75



受付の様子



努力賞受賞者の作文展示の様子

少年の主張全国大会風景

平成 30 年 11 月 11 日（日）に国立オリンピック記念青少年総合センターにて「少年の主張全国大会」を開催しました。



こちらが「少年の主張全国大会」の会場です。



会場内の様子



佳子内親王殿下の御臨席を賜りました。



会場のみなさんから発表者 12 名に激励の拍手が送られました。この後、いよいよ発表です！



静岡県代表 内山 ほの葉さん



長野県代表 畠山 紬来さん



埼玉県代表 本間 柊平さん



奈良県代表 阿部 空也さん



石川県代表 杉原 史緒梨さん



愛知県代表 富田 真亜玖さん



山口県代表 未永 夏穂さん



島根県代表 高梨 はなさん



熊本県代表 坂本 優さん



大分県代表 佐藤 吟次さん



山形県代表 岩淵 礼姫さん



岩手県代表 小野寺 千里さん

審査発表・表彰式



＜内閣総理大臣賞＞

山形県代表 岩淵 礼姫さん



＜文部科学大臣賞＞

島根県代表 高梨 はなさん



＜国立青少年教育振興機構理事長賞＞

熊本県代表 坂本 優さん



＜審査委員会委員長賞＞

静岡県代表 内山 ほの葉さん



＜審査委員会委員長賞＞

愛知県代表 富田 真亜玖さん



内閣大臣官房審議官
福田 正信様からのお祝いの言葉



文部科学省総合教育政策局長
清水 明様からのお祝いの言葉



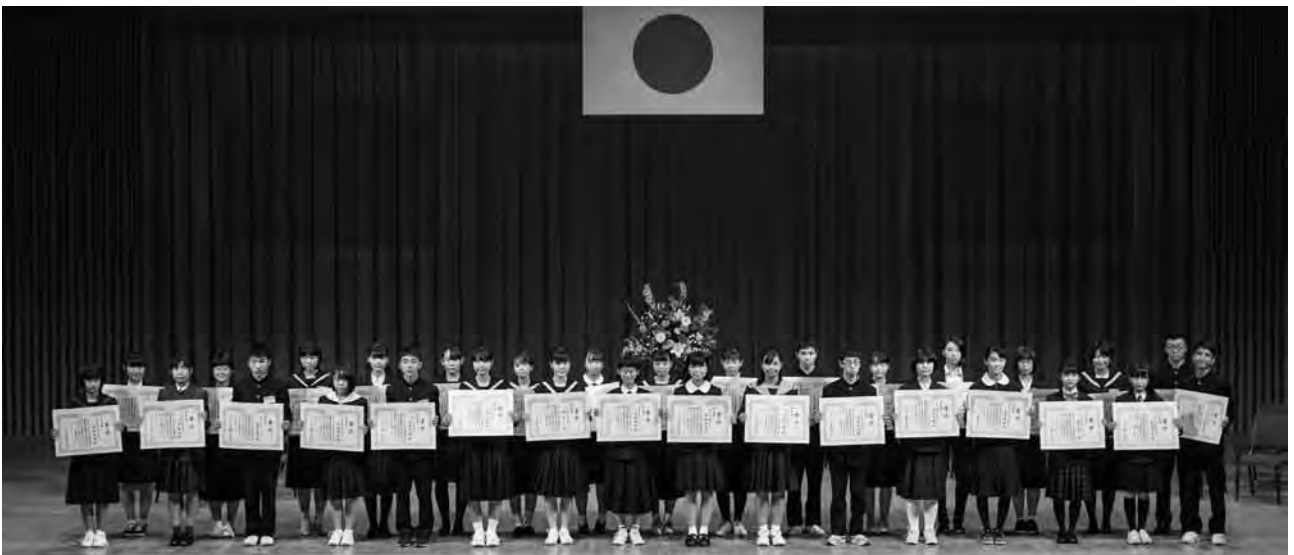
西川審査委員長代理の講評



松本零士審査委員長の挨拶



第 40 回少年の主張全国大会 発表者・審査員・来賓のみなさん



国立青少年教育振興機構努力賞受賞者のうち来場した 31 名のみなさん

少年の主張都道府県大会風景

福島大会



福島県代表 鈴木 渚さん



福島県大会 記念撮影の様子

群馬県大会



群馬県代表 須田 くるみさん



群馬県大会 記念撮影の様子

京都府大会



京都府代表 植月 理心さん



京都府大会 記念撮影の様子

広島県大会



広島県代表 大森 葉和さん



広島県大会 記念撮影の様子

福岡県大会



福岡県代表 大村 朋生さん



福岡県大会 記念撮影の様子

少年の主張全国大会出場者の発表作品

- 誤字・脱字以外は原文のまま掲載しました。
- 全国大会出場者全員に、国立青少年教育振興機構奨励賞が授与されました。

内閣総理大臣賞

【北海道・東北ブロック】

山形県 天童市立第三中学校 3年
岩淵 礼姫 『人生を駆け抜ける』

文部科学大臣賞

【中国・四国ブロック】

島根県 隠岐の島町立西郷中学校 1年
高梨 はな 『ダブル』

国立青少年教育振興機構理事長賞

【九州ブロック】

熊本県 御船町立御船中学校 3年
坂本 優 『響け！幸せのメロディー』

審査委員会委員長賞

【関東・甲信越静ブロック】

静岡県 浜松市立佐久間中学校 3年
内山 ほの葉 『自分を好きになる』

【中部・近畿ブロック】

愛知県 豊田市立井郷中学校 3年
富田 真亜玖 『思いやりは言葉を超える』

国立青少年教育振興機構奨励賞

【北海道・東北ブロック】

岩手県 岩手県立一関第一高等学校附属中学校 3年
小野寺 千里 『挑戦し続ける勇気』

【関東・甲信越静ブロック】

埼玉県 東松山市立北中学校 3年
本間 柊平 『それぞれが尊重される社会へ』

【関東・甲信越静ブロック】

長野県 長野市立東部中学校 3年
畠山 紬来 『先生は三歳』

【中部・近畿ブロック】

石川県 国立金沢大学附属中学校 3年
杉原 史緒梨 『Do anything as you can !』

【中部・近畿ブロック】

奈良県 奈良県立青翔中学校 3年
阿部 空也 『笑いの輪』

【中国・四国ブロック】

山口県 萩光塩学院中学校 3年
未永 夏穂 『私が今できること』

【九州ブロック】

大分県 佐伯市立蒲江翔南中学校 3年
佐藤 吟次 『僕を変えたきっかけ～福岡から蒲江へ』



内閣総理大臣賞受賞

人生を駆け抜ける

山形県 天童市立第三中学校 3年

岩淵 礼姫

「死にたい」、私はつぶやいた。期待に胸をふくらませていた中学校生活。しかし、そこにまっていたのは卑劣ないじめだった。指をさされ笑われた。トイレのドアをたたかれ罵声をあびせられた。すれ違うたびに馬鹿にされた。毎日苦しかった。悔しかった。もう死ぬしか逃げ場所がなかった。

そんな限界まで追い込まれた私は、ある日の朝爆発した。声が枯れるくらい泣きじゃくり、母に全てを打ち明けた。母は私の話を受け入れ、強く抱きしめてくれた。久しぶりに触れた人のぬくもりに、涙が止まらなかった。

その後、私はたくさんの人に助けられた。いじめをした人に直接注意してくれたクラスメイト、私のことを一番に考え、守ってくれた両親、陰ながら支えてくださった保護者の方々、相談に乗っていただいたり見守ってくれたりした先生方。その人たちのおかげで、「私は独りじゃない、心を閉ざさず自分を表現していいんだ。」ということに気づかされた。そして、私は一歩前に踏み出すことができた。本当に感謝してもしきれない。

いじめを受けていた頃は、人に心を開けず、友達なんか一人もいなかった。でも、3年生になった今では、心を開けるようになり、親友と呼べるまでの大切な友達もできた。自分の存在が疎ましく、毎日通るのが苦痛だった学校も、今では、安心できる居場所となった。学校が楽しくて仕方がない。私は今、とても幸せだ。

いじめの経験は私を成長させてくれた。自分が変わるためには誰かからの助けを待つだけではなく、自ら一歩を踏み出さなければならないこと、自分を偽らず正直に表現すること、そして、一番大切なことは私自身が周りの人を思いやること。私はいじめの経験から大切なことを学ぶことができた。

いじめをする理由は様々あると思う。「社交的じゃない」「容姿がみんなと違う」「一部分がみんなより劣っている」。でも、それは当たり前なことではないのだろうか。

金子みすゞさんの詩に、「みんな違ってみんないい」という言葉がある。それぞれが別々で、でもそれに優劣はなく、すばらしいのだ、という意味である。みんなが同じ顔、同じ容姿、同じ性格では社会は成り立たない。だからこそ、互いを認め合いながら生きていかなければならない。それぞれに個性があるから社会が成り立っているのだ。

私は、いじめを見ている人、いじめをしている人、いじめをされている人、それぞれに伝えたいことがある。まず、いじめを見ている人。今、少しでも助けたいという気持ちがあるなら、勇気を出して、いじめられている人に声をかけてあげてほしい。いじめられている人は「私の味方は誰もいない」という孤独感でいっぱいだと思う。声をかけてあげただけでも心が楽になるはずだから。そして、決していじめる側の人間にならないでほしい。

次に、いじめをしている人。いじめは立派な犯罪だ。それでも、まだ、あなたは人を傷つけますか。自分のやっていることが人として本当に正しいかどうか、考え直してほしい。あなたのその一言が、あなたのその行動が、相手の命を奪うかもしれないということに気づいてほしい。

最後にいじめをされている人。今苦しくて悔しくて、もうこんな人生捨ててしまいたい、そう思っているかもしれない。私もそうだった。でも、死んで何になる。あなたが死んでしまったら、どれだけたくさんの人が悲しむか考えてほしい。あなたのたった一つの尊い命を捨てないでほしい。

「生きていて良かった」そう思える日が必ずくるから、全力で生きて。逃げていいんだよ。人生は自分の努力次第でどうにでもなるから、今は自分の命を大切にしてほしい。

私も、この経験から学んだことを活かし、たくさんの人に支えられ、助けられた自分のたった一つの命を大切に、自分は自分らしく幸せになるために、しっかりと私の人生を駆け抜けていきます。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私が中学校に入学をしてすぐに受けた「いじめ」の体験から、学んだことやそれを通して成長できたことを、この社会に生きている人、全ての人に伝えたいと思いこの弁論を書きました。

特に今、「いじめ」で苦しんでいる人、周りの「いじめ」を見て見ぬふりをしている人、そして、心ない言動で周りの人を傷つけている人には、私の思いを強く伝えたいです。



文部科学大臣賞受賞

ダブル

島根県 隠岐の島町立西郷中学校 1年

高梨 はな

夏休みを数日後に控えた7月16日、全校一斉での竹島学習がありました。先生の話の聞いたり、動画を見ていたりしたとき、こんな声が聞こえてきました。

「ねえ、これって韓国が間違ってるよね。」

日本の伝えている竹島の歴史が正しいと思う気持ちと、それでも韓国のことを悪く思われたくない気持ち。私の心の中には、日本と韓国どちらとも信じたいという気持ちがあって複雑です。なぜなら、私の父は韓国人。私は日韓のハーフだからです。

日本と韓国は歴史上微妙な問題を抱えていて、常に好感と嫌悪とを繰り返しています。今は「TWICE」や「BTS」などのKポップ人気で韓国に興味をもってくれる人がたくさんいます。「韓国語が話せてうらやましい。」と友達にもよく言われます。でも、このブームはいつまで続くのでしょうか。

私は小学生の頃クラスメートに「お前韓国人だろ。竹島返せよ。」と言われたことがあります。そのときは、やっぱり悲しくて悔しかった。でも友達とは家族の国籍が違うだけで、同じことで泣いたり笑ったりする毎日は変わらない。そう信じられたから、勇気を出して言いました。

「私が韓国人なのが悪いんじゃない。悪いのは認め合えない世の中だと思う。」と。

私が韓国人でもあり日本人でもあることは、生まれたときから決まっていたことです。そして、父の国韓国を大切に思うことは、母の国日本を大切に思うことと同じです。どうしてくらべることが出来るのでしょうか。この気持ちをみんなにもわかってほしかった。あのとき自分の言葉できちんと伝えることができ本当に良かったと思っています。

私は私の経験から、国と国との関係や人の心のつながりをブームにしてはいけなくと強く感じています。どんな人でも、どんなことがあっても、わかり合う努力をしたい。それは決して難しいことではないと思います。

例えば、私の家では、家族で話をするとき韓国語と日本語が自然に混じります。

(はな)「今日部活でたたくところ間違えちゃった。」

(母)「えー、そこちゃんと 연습(練習)しないと。」

(父)「대회까지 조금 밖에 안 남았으니깐 열심히 해야지. (コンクールまであと少しだから、よく練習して頑張らないとな。)」

(はな)「알았어. (はい。)」

といった具合です。また、食卓には韓国のりと日本のりが一緒に並んでいます。

こんなふうにそれぞれの違いをそのまま受け止めて、それでも「すべての人が同じ人間である」と理解することから、わかり合う努力は始まるのではないのでしょうか。外国人だからという理由でしたいことが出来ない。また日本人と同じように見てもらえないと悩む人がいなくなり、誰もが安心してこの国の中で暮らしていける。大好きな日本は、そんな国であってほしいです。

私の心の中は、日本が半分、韓国が半分なのではありません。日本も、韓国もなのです。それぞれの国の良さを、胸を張って伝えたい。私は、「ハーフ」ではなく「ダブル」の生き方を目指したいです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私は父が韓国人であることで、考えさせられたことがたくさんあります。うれしかったことも悲しかったこともありましたが、一番強く思うのは、「自分と違う」ことを認めて受け止めるのは、そんなに難しいことなのだろうかということです。私はこのことをこれからも考え続けていきたいと思っていますし、私のように親や自分の国籍が違うことで悩む人や生活に不便を感じている人がいるのなら「世界の人々はみんな同じである」という私の考え(私の声)を届けたいです。日本中、世界中の人がわかり合える日が来るといいなと思っています。



国立青少年教育振興機構理事長賞受賞

響け！幸せのメロディー

熊本県 御船町立御船中学校 3年

坂本 優

ふとしたきっかけでボランティア活動に目覚めた私の話を聞いてください。「あーよかったあ。あなたたちの演奏に何度、助けられたことか……。今日の演奏も元気が出たよ。ありがとう。」

平成二十八年四月、熊本を未曾有の大地震が襲い、私のふるさと御船町も大きな被害を受けました。これまで、当たり前だった生活は一変し、「なんでこんなことが起きると？ どうして？」と心の中でずっと思うばかりの毎日でした。学校は臨時休校になり、入学したての私は、「なんかせんといかん。でも、なんぼしたらいいの？」と悩み、途方にくれる日々が続きました。

そんな時、中学校の吹奏楽部が、体育館に避難されている方々を元気づけようと、ボランティア演奏を行ったという話を耳にしました。「自分たちも被害にあっているのに、他の人のために演奏をするなんてすごい。」と思い、本当に驚きました。これまでボランティアなんてやったこともないし、やろうと思ったこともない私が、「やりたい、やってみたい。」そのとき、ふっと、そう思ったのです。

二回目のボランティア演奏の日、私は、中学校の体育館の中にいました。まばたき一つしなかったような気がします。そして、私自身、胸が高鳴り、興奮しているのを感じました。「よし、学校が始まったら絶対に絶対に吹奏楽部に入ろう。」とまさにそのとき決意したのです。

五月、待ちに待った中学校生活が再開しました。「おねがいします。」私は、すぐに入部届を出し、それから毎日厳しい練習に打ち込みました。月に何度も演奏会に出かけ、入部したての私も、一生懸命演奏しました。会場のお客さんみんなが笑顔になりました。中には、涙を流しながらお礼を言ってくださる方もいて、私も泣きそうになることが何度もありました。

人に喜んでもらえること、人の役に立つということが、こんなにも、心がふるえるほどうれしいことだと思ったことはありませんでした。

これまでの自分自身を振り返ると、自分のことばかり考えていたような気がします。「テストでいい点をとって親からほめられたい。」「勝ちたい、負けたくないから部活動を頑張る。」「目立ちたいからリーダーをする。」など、自分のために、と思ってやってきたことがほとんどでした。

しかし、私は気づいたのです。自分だけの幸せの追求ではなく、誰かに寄り添い、誰かの役に立つことで感じる喜びや達成感は、何にも代え難い人として生きる幸せの追求であるということ。

今私は、吹奏楽部の部長として、地震からの復興のお祭りのステージに立っています。

演奏が始まり、先生のタクトが力強くリズムを刻みます。

響け！幸せのメロディー。私たちは負けない。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を「今誰かのために活動したい」と思っている人に届けたいです。今、日本では災害が多く、助けを必要としている人、元気をもらいたい人など、誰かの力を求めている人がいます。それに気づき、どうすればよいかを考え、私たちが行動することで、たくさんの笑顔が生まれます。一歩踏み出す勇気をもてば、自分の中で、何かが変わるはず。この主張が、そんな人の背中を押せばと思います。



審査委員会委員長賞受賞

自分を好きになる

静岡県 浜松市立佐久間中学校 3年

内山 ほの葉

「もしこの足でなかったのなら……」今まで何度も何度も、そう思ってきた。そして、その度にとても悔しくなった。自分の意志とは無関係に重い荷物を背負ったようで辛かった。私は、多くの人とは少し違う、曲がった足をもって産まれた。何でよりによって私なんだろう。足さえ悪くなければ、いつもどこかでそんな思いが渦まいていた。体育でどんなでできる技を増やしていくみんな。マラソン大会で競い合えるみんな。遠ざかっていく背中が羨ましかった。修学旅行などでは、先生方に助けてもらうことも多くあった。感謝する反面、心苦しく感じることもあった。誰かの助けなしでは、皆と同じことができないからだ。また、かわいい靴が履けない。何気ない日常生活の中でさえ、羨ましさを種は、あった。だから、自分の足と運命を恨まずにはいられなかった。毎日の小さな我慢や羨ましが積み重なって自分は周りの人より劣っていると知った。だから、やりたいという気持ちの前に周りの人のことを考えて、遠慮することもあった。

特に印象に残っているのが中学一年生のときの長縄跳びだ。私たちの学校には、体育大会で学年対抗長縄跳びという種目がある。私は、跳ばないことを選択した。跳びたい気持ちはあった。でも、自分が入ることで皆に迷惑をかけることになるのではないかと、自分のせいで記録が伸びなかったら……。そういう申し訳なさが勝ってしまった。実際に練習が始まった。

「せーの。」

というかけ声と共に縄が回り、皆が跳ぶ。最初は数回。そしてどんどん跳べるようになっていった。連続回数が伸びて歓声上がる。その輪の中に自分がいないこと、皆で跳ぶ長縄がどれ程楽しいのかも分からないことが辛かった。なぜあの時、「やってみよう」と言えなかったのだろう……。思いを伝えることは、できたはずなのに。遠慮した原因は足にあって、言わなかったのは自分自身の気持ちの原因だ。にも関わらず、私は伝えられなかった気持ちを全て足のせいにしてしまった。そして、もっと足が嫌いになった。一生付き合っていく足なのに、どんどん嫌いになっていくことが、苦しかった。

それ以来、自分の足について考えることが増えた。良いことは一つもなかったのだろうか、ふと思った。そして足が悪かったからこそ、見えたものがあると気づいた。それは、できない人の気持ちだ。できないことがどれほど悔しくて、できない時にどれほどできるようになりたいと願っているのかということが分かるようになった。また、できるようになる難しさを知っているからこそ、目標に向かってひたむきに努力する人を心から応援できるようになったとも思う。さらに簡単にはめげない強い心をもつことができた。私にはできないことがたくさんある。上達も周りの人より遅い。でも、できるようになると目指していく中で、諦めないことを大切にするようになった。目標を達成するために、努力できるようになった。それは、この足だから得られた心の強さだと思う。

自分の生まれもった運命は変えられない。小さい頃は、寝て起きて、足が良くなっていたらどんなに良いだろうと思っていた。でもそれは不可能だ。だから少しずつ自分の運命を受け入れていかなければいけない。私はこの足と共に一生生きていく。自分の足を、前向きにとらえていきたいと思う。足はずっと自分にとってマイナスの影響しか与えていないと思ってきた。でも、自分の足を様々な面から見つめたことによって、プラスの面もあるのだと知った。生まれもったものには必ず意味がある。本当の意味を見つけだせるかどうかかなのだ。それは私に限ったことではないと思う。皆さんにも「もっとこうだったら」と思うってしまう部分があるかもしれない。でもそれを含めて「自分」なのだ。私は自分を好きでいるために、足も好きでありたい。そして、良い面、悪い面どちらも受け入れた上で好きと言えるようになりたい。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私はこの主張を通して、自分を見つめなおすことができました。また、思いを伝えることの大切さを知り、多くの人に会うこともできました。これからも、私の感じる悔しさや苦しさが尽きることはないでしょう。でも、多くのことに挑戦し、たくさんの人との出会いや経験を重ねる中で、この足と共に生きていく意味を見つけていきたいです。そして、同じような境遇を持つ人たちに勇気を与えられるような人生を送りたいと思います。



審査委員会委員長賞受賞

思いやりは言葉を超える

愛知県 豊田市立井郷中学校 3年

富田 真亜玖

「私、ストレスになってるダヨ。」

母は、片言の日本語でぶつくさ言う。

僕は、日本人の父と、フィリピン人の母の間に生まれました。母は、日本語があまりうまく話せません。使いこなせる言葉は、タガログ語と英語です。父は、日本に住む以上、僕が言葉で困らないように、家では日本語で接するようにしていました。母も忙しい中、勉強をしてはいますが、そう簡単に身につくものではありません。そのせいで、幼い頃の僕は、片言の日本語しか話せず、幼稚園では、トラブルがよく起こりました。

それを心配した母は、息子に十分な日本語を与えてやれない分、代わりに英語を教えようとしてくれました。でも、小学校で片言から自然と卒業していった僕は、生活の中で英語の必要性を感じることはなく、母の英語のレッスンを怠けるようになりました。母との会話も日本語で行い、不自由はないと僕の中では思っていたのです。

ところが、中学校に入ってから、母との衝突が増えました。母が片言の日本語で話をしてくると、イライラして、咄嗟に「はあ？」と言ってしまふようになったのです。母が心配そうに聞いてきても、相談したところで、すっきりした言葉は返ってこないだろうと、

「もう、関係ないでしょ。ほっといてくれ。」

ときつい口調になります。そんな時に限って、

「なんで怒ってるノ？」

と、母も食いついてくるのです。おそらくどの家庭でも起こる反抗期ならではの親子喧嘩です。でも、我が家は違います。言葉の行き違いで、大きな揉め事に発展してしまうのです。おかしなボケに対してつっこむだけでも、母は馬鹿にされたと受け取ってしまうし、父や僕が母にアドバイスをしたつもりでも、母は怒られたと感じてしまいます。母の片言の日本語に、僕はうんざりしてしまい、しだいに言葉遣いが悪くなり、母に理解できない言葉で怒鳴ることもありました。いつしか心はずれ違い、埋められない言葉の壁、心の壁が、僕と母の間に立ちふさがりました。そして、「私、日本人じゃないダヨ」という言葉が、母の口癖になったのです。

中学二年生の自然教室で、母から手紙をもらいました。僕はそこで初めて、母の思いを知りました。同じ家に住む家族なのに、言葉が通じないという現実。母親としての葛藤、苦悩。僕がフィリピンで会話に苦労するのと同じように、母は毎日それに苦しめられていたのです。フィリピンの家族は、僕のことを温かく受け入れてくれました。なのに、母にとって一番そばにいて、一番分かっていた相手である僕は、母を拒否していたのです。そのことに気づいた時、申し訳なさに涙がこみ上げました。そして、がむしゃらに母への思いを手紙に綴りました。英語やタガログ語も混ぜながら、漢字にはふりがなをつけて…。母を思いやる気持ちと、今までの感謝の気持ちを、僕にできる精一杯の形で表したかったのです。

手紙を読んだ母は、強くハグをしてくれました。今では、母と僕で、英語と日本語の交換をし、互いに得をしています。

言葉は、ただ単に通じればよいのではなく、思いを伝えよう、思いを汲もうとする気持ちがなければ、同じ言語を話せたとしても分かり合えません。現に母は、日本語が堪能ではないにも関わらず、たくさんの友達に囲まれ、明るく生活しています。それは、日本人、外国人などの区別なく、心優しく受け入れてくれる人たちがいるからでしょう。

僕は将来、人と人をつなぐために、言葉の壁を壊せる人になりたいです。国際化社会が進み、僕のように、母国語の習得に悩む子どもも増えてくるでしょう。それに、違う文化をもつ人が生活することは、苦労も多いはずですが、そういった人たちを支える活動や仕事ができるように、少しでも語学力をつけ、いろいろな人と接し、自分を磨いていきたいです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

この主張を、人との関わりの中で葛藤を抱えている人に届けたいです。現代社会では、異なる文化が混在する環境にある人だけでなく、他人に気を遣いすぎ疲れてしまっている人がたくさんいます。でも僕は、人との関わりを諦めてほしくありません。人との関わりの中で、人は成長し、喜びを味わうことができると思うからです。この主張を通して、相手に変わってほしいと願うのではなく自分から変わることを、人を思いやる気持ちの大切さを伝えたいです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

挑戦し続ける勇気

岩手県 岩手県立一関第一高等学校附属中学校 3年

小野寺 千里

「えっ、何これ。ひどい。」いくつかの言葉をスマホに入力すると、私に関する書き込みがあふれ、中傷の嵐が私に襲いかかりました。

去年、私の街にのど自慢が来ました。ずっと出るのが夢だったその舞台上私は赤い浴衣を着て、美空ひばりのお祭りマンボを熱唱しました。客席からの声援、手拍子、合いの手。このときの夢のような時間が、ネットによる心無い誹謗中傷に晒されるなんて想像もしていませんでした。その時、会場を笑顔にしたい、という私の思いは、テレビの向こうには伝わっていなかったのだと感じました。

この2週間後、私は童謡コンクールの全国大会で再びテレビに出演しました。1位だったのは片足の90歳のおじいさんでした。おじいさんは結果発表の前、舞台裏で「歌が大好きだ。歌い続けてきて良かった。」と何度も言って号泣しました。おじいさんは辛いことも歌で救われてきたのだらうと感じました。そこにいた多くの人が涙を流しました。出場者はこの舞台に立てたこと、出会うはずのない自分達がこうして出会えたことを喜び合いました。おじいさんの心からの歌声は会場の観客をも涙させました。しかし、この感動や私達の心が一つになったこともテレビには映されず、ネットには「なんでこのおじいさんが」という書き込みもありました。

のど自慢、童謡コンクール。この2つの経験からとても大切なことを学びました。それは、その時自分自身が感じたこと、目の前の笑顔や涙など、自分の目で見たことこそが重要だということです。世の中には勝手にランク付けをしたり、あら探しをして楽しむ風潮があります。ネットの世界はなおさらです。

しかし、そういう今の時代だからこそ、自分の目の前にいる人に思いを伝えるために歌う、という本来の目標を見失わないことが大切だと改めて気付きました。

このように、私にとって、大切なことを教えてくれたのは歌うことでしたが、みなさんにも夢中になっていることがあると思います。そのことへの強い思いを持ち続けて下さい。とは言え、周りを気にしないで自信を持ち続けることは簡単ではありません。私自身もそうでした。のど自慢、童謡コンクール、そのほかの様々な挑戦、何かに挑むたびに、友達から「よくやるよね。私にはまねできない。」と言われます。私だって、最初から心が強かった訳ではありません。他の人と違うことをすれば何かしらバッシングを受けるものです。以前の私は、そのたびに落ち込んだり、周りを恨んだりしてきました。でも、そうやって自分を萎縮させることに、どれだけの意味があるでしょう。

チャンスは自分からは来てくれません。弱い心や不安に打ち勝って、自分で掴みに行ってこそ、手に入れることができるのです。

今年の夏、私は、のど自慢で出会った人達と、老人ホームを慰問し、歌のプレゼントをしました。50名を超えるお年寄りが、満面の笑顔で、手拍子をしたり、一緒に口ずさんだりしてくれました。その時のみなさんの笑顔が忘れられません。結果ではなく、それまでの過程や目の前の笑顔を大切にできる人間になりたい。そんな自分になるために、たくさんの笑顔に支えられながら、私の挑戦はまだまだ続きます。挑戦している今、この瞬間の積み重ねこそが自分を成長させると思っています。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

私は、のど自慢と童謡コンクール、この2つの挑戦を通して、自分の目で見たことや体験したことの中に、自分の成長につながる大切なことがあることを学びました。ネットの中傷や、他人の目を気にして自分が萎縮してしまいそうになったとき、私を救ってくれた多くの人の笑顔に感謝しています。他人の評価に惑わされてはいけない。信じるべきは自分の目の前にあるものだという事を伝えたいと思い、今回の弁論に臨みました。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

それぞれが尊重される社会へ

埼玉県 東松山市立北中学校 3年

本間 柁平

みなさんは「感動ポルノ」という言葉を知っていますか。中学生がいきなり何を言い出すんだと思われるかもしれませんが、これはオーストラリアのジャーナリスト、ステラ・ヤングが作った言葉で、障害者が、本人の意思とは関係なしに、感動の対象として、テレビのドキュメンタリー番組などに取り上げられる演出のことです。

たとえば、テレビ番組で、車イス利用者の日常生活を取り上げるとします。外出先や生活していく上での不便な所が集中的に映し出されます。そんな中、文句も言わずに生活する障害者。健常者は、自分よりも苦しい環境の中、けなげに頑張る障害者に感動します。

確かに様々な実態が取り上げられ、障害をもつ人のことが世界に伝わりやすくなったことは、こういったテレビの恩恵だと思います。

しかし私は「感動ポルノ」が嫌いです。

私は外出先ではほとんど車イスを利用しています。最初に述べたステラ・ヤングも身体障害をもっていて、ジャーナリストである以上、メディアに使われることも多いそうです。

先日私は、あるテレビ番組で、肺高血圧症の女の子について取り上げたのを見ました。

彼女の夢は世界旅行。しかし病気のせいで飛行機に乗れません。そこで、彼女に似せた「人形」を世界各地で撮影し、その写真を彼女に見せ、あたかも自分が世界旅行をしたかのように感じさせるという企画でした。そこに善意や優しさがあふれていることは私も否定しません。けれどどうしても彼女の夢をかなえるチャンスを、テレビの自己満足で終わらせているような気がするのです。私もフェリーで北海道へ行ったことがあります。同じ酸素ボンベの利用者として、彼女も工夫すれば、実際に海外に行けたのではないかと思うのです。

私は自分が体が不自由な分、コミュニケーションで自分を伝えられるように努力しています。ただ少し感情的なところがあり、時には友だちにきついことを言ってしまうことがあります。それは私の改善すべき点なのですが、以前ある友達から

「柁ちゃんて、もっとおとなしいタイプだと思ってた。」

と言われ、自分を分かってもらえない、と何か否定されたように感じました。自分のどこに「おとなしい」イメージがあるかを考えた時、テレビのドキュメンタリーなどで取り上げられる障害者像と私の車イスが結びつき、自分の性格とは異なった印象で決めつけられたのだと思いあたりました。

私自身も障害のある人が頑張っていれば、「すごいな」というイメージをもちます。けれどもそれはあくまで、その人自身の性格の一部だととらえています。障害を持っていてもいなくても、弱音もはけば、批判的な事も言います。感情的になることもあるし、目標に向かって懸命に努力もします。そこに一人の人間がいる、それだけのことではないでしょうか。

私は「感動ポルノ」は嫌いです。

しかし多くの人は、そこに悪意などみじんももっていないでしょう。弱い立場の人を手助けしたい、そしてそれを広く知らせることで感動を共有したい。それだけだと思います。

私はその考えを全否定するわけではありません。ただ、その演出は、私たちの考え方や取組方で、いくらでももっと良い方向に変えていけると思うのです。

けなげに頑張る障害者も、けなげに頑張る健常者も、みな社会の一員として認め、ステラ・ヤングのような主張できる人々の考えをテレビを通して発信し、本当の優しさにあふれた社会をつくっていけたらと思います。

そしていずれ「感動ポルノ」「障害者」「健常者」という言葉そのものが、この社会からなくなるようにと願っています。

この主張をどんな人に届けたいですか？

テレビというメディアを作る立場の人々とそのテレビを観る視聴者の立場の人々へ少しでも「障害」の取り上げ方を見直してもらえるようにしてほしいです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

先生は三歳

長野県 長野市立東部中学校 3年

畠山 紬来

「お母さんと離れるの、イヤだ」そんな気持ちから毎朝保育園の入口で大泣きしては周囲の人を困らせていた子。お昼になれば家から持ってきたお弁当箱を見ては母を思い出してまた泣きわめいた子。それは十年以上前の、この私です。

私は栃木県の山間地に生まれました。常に母と一緒に生活だったため、ほとんど家族以外の人と関わることをしてきませんでした。三歳のとき、父の転勤で長野市へ引っ越しました。初めて保育園に入ることになりましたが、不安な気持ちと人見知りで、私はそのことが全く受け入れられませんでした。

毎日、きまって大騒ぎを起こす私に、「大丈夫だよ」「すぐお母さん帰ってくるよ」「一緒に遊ぼうね」と根気よく声をかけ、優しくだっこしてくれたのは当時の私の担任だった柳澤先生でした。先生は私を安心させるため、他に面倒をみる園児が何人もいるのに、ずっとそばにいてくれました。そんな柳澤先生に憧れるようになり、家では先生のマネをしたりして、将来は保育士になりたいと卒園アルバムにも書き残し、それからそんな夢を抱き続けてきました。

ところで、中学三年になった今年。部活の吹奏楽部で三年間お世話になってきた村上先生と話している時、先生がこんなことをおっしゃいました。「先生をやっていると、生徒から教えられるってことがよくあります。たとえば、部活でも授業でも、学級担任をしていても、必ず予想外の反応をしたり、私のまるで考えていなかったアイデアや、解決法を教えてくださいする生徒がいます。先生という仕事は、生徒から学ぶことの連続です」と。これを聞いたとき、私は先生も生徒から教わることってあるんだ、と軽い驚きを覚えました。同時に、保育園でお世話になったあの柳澤先生はどうなんだろうという疑問がわきました。将来は保育士になりたいという気持ちもあって、どうしても聞きたかった私は、久しぶりに先生のもとを訪ねました。

私の問いに柳澤先生は、当時と同じ笑顔でにっこり笑って「確かにあなたは、手のかかる子でしたね。よく覚えていますよ」と。でも次の言葉は、私に大きな驚きを与えました。「あのころは、保育士になって三年くらいで、まだ経験が浅かったけれど、あなたの保育をすることで、ずいぶん私の勉強になったんです。園児の姿には、私たちの保育の結果がはっきりと出るの。だから園児たちの姿を見て、自分の保育を常に反省します。保育園の子どもは、私には『三歳の先生』なのよ。もちろん、少しずつ親離れができていったあなたもそうでした」と。

私にとって、お世話になった二人の先生から聞いた言葉。やがて私は確信しました。

子どもを導くということは、実は、その子から導かれること。

そして教えるということは、実は、その相手から教わること。

今、十五歳の私は、保育園児だった頃よりも、当時の柳澤先生に近い年齢になり、これからの進路を考えていくときになりました。二人の先生から聞いたことは、私の人生の大きな道しるべです。

保育士を目指すために私がすること。それは、誰もが私にとっての先生だと思える謙虚な心をもつこと。誰からでも学べる丸く柔らかい心をもった自分になること、だと考えます。

何年かしたら、私は柳澤先生にこう伝えたいと思います。「私、保育士になりました。当時の私より、もっともっと困らせる子どももいるけれど、その子は私を導いてくれる先生です。私は、三歳の園児と一緒に成長しています！」と。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

この作品は、私が3歳だったとき、中学校で3年間お世話になった、職業がちがう2人の先生から聞いたお話です。2人の先生から聞いたことは「保育士」を目指している私にとって、とても考えさせられることでした。作品中にもあるように、1つ目「誰もが自分にとっての先生だと思える謙虚な心をもつこと」、2つ目「誰からでも学べる丸く柔らかい心をもった自分になること」この2つを常に心にとめ、保育士になるという夢を実現させます。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

Do anything as you can !

石川県 国立金沢大学附属中学校 3年

杉原 史緒梨

“Do anything as you can !” 私にこの言葉をくれたのは、アメリカに住む親友です。彼女との出会いは、一昨年の夏、アメリカヘーケ月ホームステイに行ったときでした。私の母は自宅で英会話を教えており、物心ついたころから英語での会話は常に身近にありました。そのため、ホームステイにも不安は全くなく、アメリカに向かう飛行機の中ではこれから始まる生活への期待に胸を膨らませていました。

しかし、ホストファミリーの家に到着し、いざ会話しようとする、日本であぐさ自然に話せていた英語が全く出てきません。最初は笑顔で話しかけてくれていたホストファミリーたちも、一言も話さない私に困った様子で「今日は疲れているだろうから早く休みなさい。」と言ってそれ以上は話しかけませんでした。

やがて夜になり、私はいったい何のためにここにいるんだろうと思いました。悲しくて、自分が情けなくて涙があふれました。そんなとき、その家の娘さんで私と同年のブレアリンがやってきて、

“Do anything as you can !”

「あなたができることをすればいいよ」と声をかけてくれたのです。その言葉に勇気づけられた私は、お土産に持ってきた浴衣をトランクから取り出して彼女に渡しました。

“Are you interested in yukata?”

“Yes! Wow, it's very beautiful!”

こんな簡単なやりとりが、私とブレアリンの初めての会話です。この会話を機に、翌日からは誰とでも積極的に話せるようになりました。表現に迷ったときも、とにかく知っている表現を使い、身振り手振りを交え、特にブレアリンとは何でも話せる親友になりました。

この夏の経験は、私を大きく変えました。心で思っているだけではいけない、行動を起こさなければ。それまでの私は、大好きな英語を活かして世界の人々の役に立ちたいと考えながらも、実際に行動を起こすことはありませんでした。

“Do anything as I can !”

今の私にもできることが必ずあるはず。そうして探してみると、金沢市では災害時語学サポーターを募集していることが分かりました。災害時に避難所で、日本語の分からない外国人に声をかけ、必要な情報や物資を提供する役割です。私はいま、そのサポーターとして登録し、仲間たちとともに、万に備えた訓練に参加しています。そして、外国の方にも分かりやすい掲示物の表記方法や、習慣の違いで起きるかもしれないトラブルを未然に防ぐ方法などを常に話し合っています。その訓練のおかげか、町中で困っている外国人観光客に対してもより適切なフォローができるようになりました。

ですが、これで十分などとは考えていません。世界に目を向ければ、私にできることはまだまだあるはず。世界には、貧困に苦しむ人々や、戦争により国を追われ難民となった人々など、助けを必要としている人はたくさんいます。問題があまりに大きく、そして遠い国での出来事のため、自分に出来ることなどないのではないかと、ついそう思ってしまうこともあります。でも、そんなとき、ブレアリンのあの言葉が聞こえます。

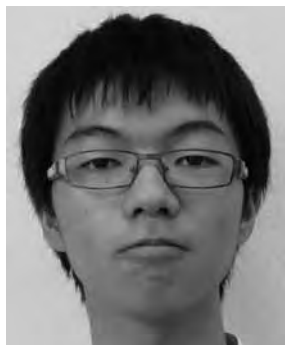
“Do anything as we can !”

ニュースを見て心を痛めているだけでは何も変わりません。どんなに小さくとも、自分にできる何かを行動にうつすこと。あの日、浴衣を差し出したことで、私とブレアリンの間には国境を越えた強い絆が生まれました。なんでもいい、まず一歩を踏み出しましょう。そうすれば、いつか必ず言葉も宗教も国境もすべてを越えることができます。大丈夫、私たちはきっと世界を変えられます。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私と同年代の学生から大人の方々まで、全ての人に届けたいです。

私はこの主張を通して「まず行動すること」の大切さを訴えました。行動を起こすことに遅すぎる、早すぎるということはありません。私たち一人一人が目の前にある問題に気づき、「何か」をしなければならなかったときに行動することで、私たちの手でこの世界をよりよいものにすることがきっとできるはず。必ずです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

笑いの輪

奈良県 奈良県立青翔中学校 3年

阿部 空也

「笑う門には福来たる」「笑いは百薬の長」という古くからのことわざにもあるとおり、笑うことは心や体に大変良いことです。しかし、現代人は、ストレスの多い社会に押し潰され、笑うことを忘れていないのでしょうか。

僕は、小学1年生の頃から落語を習っています。毎年30回程の出番を踏む機会があり、子ども落語全国大会にも出場し、中学1年生のときに優勝することができました。

そんな僕が、笑いのもつ大きな力を感じたときがありました。それは僕が、小学5年生の頃にボランティアとして、ある高齢者の施設に落語を演じに行ったときのことです。その施設は、認知症の方々が入所しているところで、会場の雰囲気は少し固い感じがしました。僕が落語を演じて、最初は大声で笑う方はいませんでした。しかし、話が進むにつれて、うんうんという仕草とともに表情がほぐれて、笑ってくれたのです。そして、その後にあった交流会では、会場の空気は大変明るくなりました。また、何人かの高齢者の方から、「良かったよ。」と笑顔で声をかけられました。僕はその変化に大変驚き、それと同時にとても幸せな気分になりました。高齢者の方々と一緒に笑うことで、幸せを分かち合えたように思いました。僕は、笑いは人に強い力を発揮させるものではないかと思いました。僕は、笑うことは自らを、そして他人をも幸せにできる万能薬のようなものに思いました。

今日、笑うことは様々な面で心や体に良い影響があるということが、科学的にも証明されつつあります。例えば、笑うことにより免疫力が上昇することや、鎮痛作用、血行促進効果など健康面で様々な良いことがあります。また、笑うことにより、エンドロフィンというホルモンが分泌され、幸福感がもたらされるといった精神面への効果があることも証明されています。笑うことが、人の心や体を健康にするのは確かなようです。

ところで、僕たちは悲しいことや辛いことに直面することが、図らずもあります。そのようなときに人はいつも笑えるとは限りません。例えば、災害や人の死に直面したときなど、本当に辛く悲しいことがあると、笑うことはできません。

2016年の熊本地震のときに、こんな報道を見ました。ある高齢女性が、震災で夫を失い、その悲しみで何ヶ月も泣いて暮らしていたそうです。そんなとき、ある落語家が被災地を訪れ、落語を披露しました。その落語を聴いた夫を亡くした女性は、はじめこそ笑うことはできませんでしたが、次第に思わず声を出して笑うことができるようになったそうです。そしてこのようにおっしゃいました。「心の洗濯ができました。久しぶりに笑いました。落語を見て元気が出ました。」と。また落語家も「笑いというのは素晴らしい。笑いというのは何かすごい力を秘めている。」と、感想を述べています。

僕も、笑いの力を感じた経験があるので、改めて、笑いは人を奮い立たせる起爆剤のような役割をするものであり、人の原動力となり、人生には必要不可欠なものであると確信しました。

ストレスの多いこの社会には、嫌なことや辛いことがたくさんあります。しかし、笑いは僕たちに活力を与えてくれます。さらに、僕たちの心や体にも良い影響を与えてくれます。ですから、僕は、笑いを生み出す者として、人が笑える場面を注意深く探し、笑いの輪を広げていき、笑いがあふれる社会を作っていける存在になりたいと思います。僕は、落語に関わった7年間を、ありがたく、誇りに思っています。人を笑顔にし、元気にすることによって、実は僕自身も元気や活力をもらっています。自分も人も共に健やかになる笑いを、どんなふうにも生み出し、表現したら良いかを考え続けていきたいと思っています。そして「泣いて暮らすも一生、笑って暮らすも一生」ということわざがありますが、笑いの多い一生となるよう、笑いの輪を広げていきたいです。

では、ここで小噺を一つ。ある家でねずみが父親と子供の前をタタタッと走っていった。それを見た二人

「お父っつあん、今のねずみ大きかったな。」

「いや、小さかった。」

「いや、犬みたいに大きかった。」

「いや、ものすごく小さかった。」

「大きかった。」

「小さかった。」

「大きかった。」

「小さかった。」

それを見ていたねずみが一言、

「チュー。」

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

この作文でも述べたように、自分でも人も共に笑いのあふれる人生をつくって行きたいと思っています。そのために、常日頃から自分の身近なところから生まれる、さりげない「面白い」を見つけ出して、それを笑いにつなげて行きたいです。そして、出前落語という活動を今後も続けることにより、人にも笑顔になっていただきたいと思っています。そんな人生をつくるためにも、より一層日々の稽古にも力を入れて、努力して行きたいです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

私が今できること

山口県 萩光塩学院中学校 3年

末永 夏穂

みなさんは、ヘアドネーションという言葉を目にしたことはありますか。ヘアドネーションとは、生まれつき毛根が存在しない人、不慮の事故や病気で髪の毛を失った人に、自分の髪を無償で提供しウィッグにすることです。私は、この活動を新聞記事で知りました。

私の将来の夢は美容師になることです。ただ漠然とカッコいい仕事と思っていた私に、ヘアドネーションの取り組みは胸につき刺さりました。この活動に私も参加したいと思い、具体的に活動するにはどうしたらよいかを調べ、実際に活動に参加した人の話を聞いてみました。

寄付するためには、三十一センチ以上必要で、一人分のウィッグを作るには三十人分の髪の毛が必要だということです。また、このウィッグを待っている人は百人以上いるという事を知りました。実際にこの活動に参加した友人は、「髪の毛を中途半端にして切って捨ててしまうより、髪の毛を失った人がヘアドネーションのウィッグで喜んでもらえる嬉しい」と言っていました。

私も伸ばしかけだった髪の毛の長さを計り、参加することを決めました。伸ばしている途中、暑くてうっとうしいと思ったり、この長さの洗髪は時間がかかりめんどろと感じた事もありました。髪の毛が寄付できる長さになり、美容院でくつかの束にして切ってもらいました。束になった髪の毛を空気が入らないように袋に入れ、大阪にあるジャパンヘアドネーション&チャリティ、通称ジャーダックという団体に送りました。送ってから二カ月ぐらいが過ぎ、短い髪型にも慣れてきた頃、私あてに葉書が届きました。それには、「あなたの髪の毛は、髪の毛が無くて困っている人のために大切に使われます。」と書いてありました。本当に自分の髪の毛が人の役に立ち、私の知らない誰かが、自分の髪の毛で明るい気持ちになってくれるかもしれないと思うと胸が温かくなりました。

中学生の私は、誰かの役に立つことができることなどないと以前は考えていました。しかし、この経験を通して、誰でも何かしたいという気持ちがあればできるということを実感しました。切ったばかりの頃、何人かの人に「あんな長い髪の毛を切ったの？」と言われました。

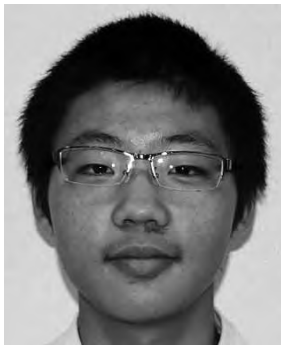
その時私は、ヘアドネーションの事を話しました。寄付するだけではなく、一人でも多くの人にこの活動を知ってもらうことも大切だと思ったからです。そんな時、校内での作文発表の場で、私に全校生徒の前でこのことを発表する機会が与えられたのです。

私は、人の前に出て話をするのが苦手です。しかし、この活動を多くの人に知ってもらうため、勇気をもって発表しました。私の学校は女子生徒も多く、女性の先生もたくさんいらっしゃいます。きれいな髪を長く伸ばしている人がいます。私が作文を読み終えた後、このことを知った生徒や先生が「私も伸ばしてみるよ。」「知らなかった。こんな活動があるなんて。」伝わった、広がったと感じました。いつも自分の事ばかり考えてしまう私は、周りの事もよく見られる人になりたいです。この活動をきっかけに、誰かのためになること、自分にできることが少し分かりました。

あこがれの美容師になったとき、この活動をまた多くの人に伝え、私の手で長く伸ばした髪をカットすることでしょう。その髪を大切に大切に、必要としている人へ届けるのです。そして今私はまた、髪を伸ばしています。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私がこの作品に気持ちを込めたように、ヘアドネーションのことをもっと多くの人に知ってもらいたいです。そして美容師になる夢が実現した時、私の手でこの活動を理解してくださる方の髪をカットして協力したいです。また、病気の方など髪の毛の事で悩みをもっている人がいた時に相談を聞いてあげられるようになりたいと思っています。伝えること、広げていくことは自分の勇気があればできるということをお忘れず成長していきたいです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

「僕を変えたきっかけ ～福岡から蒲江へ」

大分県 佐伯市立蒲江翔南中学校 3年

佐藤 吟次

「来年引っ越すぞ。」

二年前の大晦日、父のこの言葉が全ての始まりでした。福岡県に生まれ育ち、地元の中学校に通っていた僕は、このまま福岡で暮らしていくことに何の疑いもなかったもので、しばらく父の言葉が信じられませんでした。

引っ越し理由は「海が近いところに住みたい。田舎に住みたい。」という両親の強い願いからでした。

僕はそのころ福岡の中学校で悪さばかりしていました。自分でも悪いとは思っていたけれど友達に流されてしまい、ついやってしまうということを繰り返していたのです。そんな自分が本当に嫌でした。だから引っ越しは、自分が変わるチャンスかもしれないと感じていました。

そして昨年、福岡から大分県の佐伯市に移り住むことになりました。引っ越し先は蒲江の畑野浦という地区です。畑野浦は佐伯市街から少し離れた海辺の小さな集落です。屏風のように連なる高い山を越えると峠道から眼下に青い海が広がります。福岡では見たことのないような雄大な風景に僕は心が洗われるような気がしました。また、これから始まる新しい生活を思い、心がワクワクしたことを覚えています。

新学期が始まり、僕は佐伯市立蒲江翔南中学校に通うことになりました。

転校をきっかけに自分を変えようと考えていた僕ですが、二三日もたつと、もとの悪い癖が出始めました。自分のしなければならぬことをさぼる癖です。福岡にいた時は自分と似た友達が多かったのですが、蒲江翔南中学校の仲間は学校生活に対してすごく真面目で、やる気がありました。

仲間を通じて自分を見つめ直すことができ、やはり自分の悪い点は絶対に直さなくてはいけないと感じました。

部活動は前の学校でも所属していた野球部に入りました。僕は中学校から野球を始めたので、なかなか上手くプレーできません。また、運動が苦手なところもありました。それでも僕が野球部に入ったのは人を支えることができる人間になりたかったからです。だから、試合に出ることが出来なくても、スコアブックを書くなどして試合の補助を頑張りました。

最上級生になり、試合にも度々出場できるようになった僕は、最後の大会にレギュラーで出たいと思いました。それを父に話すと

「そりゃあ野球部なんやけん一試合だけでも出てほしいと思う。」と言われました。

かつて野球部だった父に自分の活躍する姿を見せたいと思い、僕はレギュラーを目指しました。しかし、最後の大会はベンチでした。悔しい気持ちで一杯でしたが、ランナーコーチなどをしながら最後までチーム皆で戦いました。

二対一というわずかな差で敗れた試合のあと、僕は福岡にいた頃の自分と今の自分について考えていました。すると自分がいくつかの点で変わっていることに気づきました。

その変化の一つが宿題をちゃんとするようになっていたことです。宿題をしなければ放課後に居残りになり、部活に参加できません。練習に遅れたくないという思いで、僕は宿題を毎日するようになっていました。

さらに家庭学習の習慣がついたことで、授業に集中できるようになり、テストでも問題を解けるようになりました。それにつれて学習成績も見違えるように良くなりました。以前は両親に見せるのが怖かった成績表も、今では堂々と見せることが出来ます。

でも自分の中で一番変わったのは心だと思います。楽な方に流されて自分を見失いがちだったあのときの僕はもういません。

今、僕はクラスの学級委員長をしています。信頼されるリーダーにはほど遠いと思いますが、気のいい蒲江の仲間達と毎日笑い声の絶えない楽しい中学校生活を送れています。僕たちの目標は「全員の実現」です。僕は高校に進学し、大学も目指しています。同じような夢を持った仲間と休みの日も声をかけ合い、集まって勉強をすることもあります。福岡で遊び回っていた頃とは全く違う充実が僕の心を包んでいます。

「何が僕を変えたのか。」そのきっかけを考えたとき、蒲江の豊かな自然と気のいい仲間達が、僕を自分自身と向き合わせてくれたことに気づかされます。

福岡から佐伯市に引っ越すことで、人は何かをきっかけに変われるということを僕は学びました。また、この引っ越しによって僕の人生が変わったといっても過言ではありません。それほど大きな変化だったのです。

以前の僕のように、自分を変えたくても変えられず、悩んでいる人は多いと思います。そういう人たちに、目指す自分を見失わないこと。けしてあきらめないこと。そして時折立ち止まって自分を振り返ってみること。それが自分を良い方向に変える方法だということをお伝えたいです。

僕は佐伯市に引っ越したことで、ここまで変わることができました。これからもどんどん良い方向に変わっていきたいです。そして僕が変わる最高の環境になった蒲江の人と町に心から感謝したいと思います。

蒲江は僕の、もう一つのふるさとです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

この主張を届けたい人は、地方への移住に興味を持っている人です。都会は便利で華やかですが、他者とのかわりが希薄になり、自分自身のあり方も見失いがちです。これに対し地方には豊かな自然があり、また、人とひとのあたたかいつながりがあります。僕自身が福岡から佐伯市蒲江に移り住むことで自分自身を見つめ直せたことや、新たな人生の出発点を踏み出すことができた経験を、地方に住むことの魅力として多くの人に伝えられればと思います。

努力賞授与式

全国大会へ推薦された47都道府県の代表者の内、惜しくも全国大会発表者に選考されなかった35名（以下、努力賞受賞者）へ、全国大会の中で努力賞の賞状が授与されました。また、全国大会当日は努力賞受賞者の作文をホール前に掲示し、ご来場いただいた多くの皆様に観覧いただきました。



努力賞授与式



努力賞受賞者

努力賞受賞者のプログラム

努力賞受賞者が互いの考えや思いを語り、新たな視点や考え方を身に付けていただくことをねらいとして、全国大会前日から国立オリンピック記念青少年総合センターへ宿泊し、交流プログラムを実施しました。

1日目はレクリエーションを行った後、事前に用意していたグループメンバーの発表作文に対する自分自身の考えや質問等をグループ内で共有し、意見交換を行いました。

2日目は、グループでの意見交換を踏まえ、各自の作文に記載されている個人目標や目指すべき社会を実現するため、今日から取り組む具体的な行動目標を考え、メンバーの前で宣言しました。努力賞を受賞された皆さんの、各地域、学校での活躍を期待しています。



少年の主張全国大会努力賞受賞作品

【北海道・東北ブロック】

北海道 洞爺湖町立洞爺中学校 3年
毛利 郁也 『命の給食』

青森県 六戸町立七百中学校 3年
長根 優依 『ありがとう』

宮城県 石巻市立山下中学校 3年
日野 碧 『目に見えないフィルター』

秋田県 にかほ市立仁賀保中学校 2年
齋藤 美穂 『本当の平和とは』

福島県 白河市立表郷中学校 3年
鈴木 渚 『一人の人間として生きる』

【関東・甲信越静ブロック】

茨城県 ばら野学園 那珂市立第一中学校 3年
青木 大翔 『大人になるということ』

栃木県 矢板市立泉中学校 3年
神立 千星 『「ごめんね」と言わない社会へ』

群馬県 藤岡市立鬼石中学校 3年
須田 くるみ 『かけがえのない故里で』

千葉県 いすみ市立岬中学校 3年
梶山 亜莉沙 『“Welcome to Tsurigasaki beach!”
～真のおもてなしを求めて～』

東京都 筑波大学附属中学校 2年
國井 結月花 『「教育」を手に切り拓け』

神奈川県 川崎市立宮崎中学校 3年
山津 亜祐 『どんな思いで声をかけようか』

新潟県 長岡市立東北中学校 3年
齋藤 こはる 『言葉の先にあるもの』

山梨県 山梨市立山梨南中学校 3年
窪川 葵 『心はそこにありますか』

【中部・近畿ブロック】

富山県 滑川市立滑川中学校 3年
水島 詢子 『よりよく生きること』

福井県 敦賀市立気比中学校 2年
中村 穂里 『命の訴え』

三重県 津市立橋北中学校 3年
西井 萌々花 『明るい未来をめざして』

岐阜県 高山市立丹生川中学校 3年
平川 茶海衣 『「特別に」ではなく「誰にでも」』

滋賀県 大津市立瀬田北中学校 2年
佐藤 瑠乃 『私があなたに伝えたいこと』

京都府 京都府立南陽高等学校附属中学校 1年
植月 理心 『頑張っている』

大阪府 泉大津市立東陽中学校 3年
島末 結加 『タイムマシンなんていない』

兵庫県 明石市立江井島中学校 3年
山本 千晴 『私達にできること』

和歌山県 湯浅町立湯浅中学校 2年
宮本 崇行 『今、社会に必要なもの』

【中国・四国ブロック】

鳥取県 米子市立福米中学校 3年
川邊 幸 『部活動と私の成長』

岡山県 岡山市立吉備中学校 3年
稲田 知陽 『水害から学んだこと』

広島県 東広島市立八本松中学校 3年
大森 葉和 『手話は言葉』

徳島県 吉野川市立山川中学校 2年
山内 悠希 『私らしく、希望を持って』

香川県 三豊市立高瀬中学校 3年
林 さくら 『対話から生まれること』

愛媛県 今治市立西中学校 2年
福島 花菜 『あの日を忘れない』

高知県 佐川町立佐川中学校 2年
郷田 聖奈 『より良い未来へ』

【九州ブロック】

福岡県 柳川市立柳南中学校 3年
大村 朋生 『かけがえのない生命』

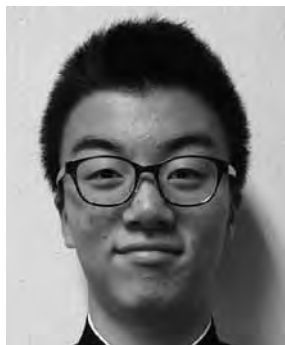
佐賀県 唐津市立海青中学校 3年
中村 夢芽 『私、変わるから』

長崎県 佐世保市立小佐々中学校 3年
久保田 康介 『つながる』

宮崎県 宮崎学園中学校 3年
小川 磨美 『ポジティブに生きて』

鹿児島県 霧島市立横川中学校 3年
篠原 真夏 『兄の遺したもの』

沖縄県 石垣市立石垣第二中学校 3年
知念 粹加 『違いを乗り越えて』



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

命の給食

北海道 洞爺湖町立洞爺中学校 3年

毛利 郁也

「浩生の家のトマト美味しい！」

「郁也の家のブロッコリーも美味しいよ！」

僕の学校の給食では、地元で採れた野菜が使われる。僕の家も農家なので、自分の家で採れた野菜が給食で出される。それを学校のみんなが「美味しい」と言って食べてくれる。とても誇らしい気持ちになる。

僕の学校は食に対する意識が高い。ただ、栄養やバランスを考えているだけではない。食事のときのマナー、コミュニケーション、季節の行事、様々な「食に関する知識」を学ぶことができるのだ。

まず、給食は、先生方も生徒もみんな食堂に集まって食べる。学校にいる全員が集まる食堂、会話をしながら食べるので、より美味しく楽しく食べることができる。

また、年に二回、「花見弁当」と「もみじ弁当」と言って、重箱になったお弁当が全員に配られ、外で桜やもみじを見ながら食べる行事がある。

自分にあった分量を選ぶカフェテリア給食。自分で栄養バランスを考えて食材を選ぶバイキング給食もある。

また、月に数回、栄養教諭の方が来て、栄養や季節の野菜、マナーなど、食の大切さについて話をしてくれる。このようなことは、どこの学校を回ってもなかなかないことだろう。

栄養教諭の方が話してくださった中で、特に印象に残っている言葉がある。

「私が最終的に伝えたいのは、給食からみなさんの家庭のご飯に良い影響を与えることです。地元で採れた新鮮で美味しい野菜を食べ、自分で食材を選んだり栄養やマナーについて学んだことが、大きくなって自分で作るようになったときに、活かされてくる。今の栄養バランスや健康も大切だけれど、自分でそれができるようになることが伝えられたらいいなと思っています。そして、その時にこの洞爺の給食を思い出して作ってくれたら嬉しいです。」

僕自身、洞爺の給食を食べるようになって変わった。自分や友達の家で作っている作物が給食で使われているのを見ると給食を残さず全部食べるようになった。

僕も、土日や夏休みは、朝早くから夜遅くまで畑の手伝いをする。真夏に一つ一つブロッコリーの苗を植えていくのは、大変な作業だ。キツイし嫌だと思うこともあるけれど、一つの作物を自分の手で育てた喜びはとても大きなものだ。そして、自分が農業に貢献しているということが何より嬉しいのだ。父や母がまるで人を育てるかのよう愛情を込めて大切に命を育てているのも見てきた。このように生産者の気持ちがわかるにつれて嫌いなものでも食べられるようになっていった。

今、日本でも「食品廃棄」が大きな問題となっている。年間千九百万トンもの食料が廃棄されている現状がある。こんなに愛情をこめて生産者が作ったものが捨てられているかと思うと、いたたまれない気持ちになる。

また、食に関する「生活習慣病」「孤食」なども問題になっている。それは、僕たちの体の問題だけにとどまらず、精神にも影響を与えているという見方もある。その背景に、「食」に対する文化や知識が不足していることが考えられるのではないだろうか。

食事はただ食べるためのものではない。食事は命を学ぶことだ。食事そのものが、動物や植物の命をいただくことにより成立している。そして、そこには命を育む人たちの愛情や、食を作る人たちの使命がある。季節があり、文化を味わうことができる。食べることは食べる側の知識と感謝の気持ちがあって初めて成り立つものということをお忘れはいけない。

洞爺の「命の給食」、その素晴らしさや、知識を受け継ぎ、多くの人たちに地域を越え、世代を越えて伝えていくことが僕たちの使命だと僕は思う。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

素晴らしい洞爺の給食を通して食事の大切さ、季節の味わい、コミュニケーションや食文化の大切さを多くの人に伝えたいと思ったからです。そして、自分の家が農家で命に触れることが多くあったからです。僕たちの命が、植物や動物の命があるから成り立っていて、作る側と食べる側の温かい心があって、命が生まれているということについて、あらためて考えてほしいと願い書きました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

ありがとう

青森県 六戸町立七百中学校 3年

長根 優依

思い浮かぶのは、母の優しい、大きな手。安心できる背中。そして、何も言わずに黙った母の、悲しい悲しい顔。私は母のことが大好きでした。一緒に笑ったり喜んだりする日常が当たり前だと思っていました。でも、小学四年生の夏休み、それは当たり前でなくなりました。

「優依。しっかり聞いてね。お母さん、がんなんだって。治らないんだって。今年中に死ぬかもしれない。」夏だというのに寒気がしました。姉の暗い顔、しっかりとした声。体は言うことを聞かず、動いてくれません。どうして。いつから。本当に。なんでお母さんなの。お母さんはこの世からいなくなるの。無数の疑問のすべてを口に出していました。姉は、全てに丁寧に答えてくれました。真剣な顔で、じっと涙をこらえて。嘘じゃないんだ。信じたくないけど、それは必ずやってくる現実なのだと、思い知らされました。

許可をもらって、病室で寝泊まりしながら、母の看病をしました。体につけられている管の数はどんどん多くなり、髪は抜け落ちていきました。日に日に痩せていく母の姿に、胸が苦しくなりました。

よくしゃべり、よく笑う母が、イライラとした気持ちを表に出すようになり、だんだん怒りっぽくなりました。今思えば、母は残された時間で、私に、多くのことを伝えたかったんだということ、そして、それを伝えられない悔しさでいっぱいだったのだということがわかります。でも、その時の私はそんな母の気持ちも分からずに、言ってはいけない言葉を、伝えてしまったのです。

「もう、お母さんなんて死んじゃえばいいんだ！」何も言わず、怒ることもなく、ただただ驚き、悲しむ、母の顔。本当はそんなこと思っていないのに。

次の日、いつものように母を起こそうとしました。でも、母は呼びかけに応じてくれませんでした。怒っているのかな。話したくないのかな、そう思いましたが、姉が呼びかけても、結果は同じでした。

母は、神様のところへ行きました。「まだ連れて行かないで。」「お母さん、私を置いていかないで。」そんな願いが届くことはありませんでした。これが私の後悔です。

私はこの時決めました。人を傷つける言葉を使わないで生きていくことを。笑顔で生きていくことを。この後悔を抱えて生きていくことを。それが、母が生きていた証であり、母と生きていくことだと思います。

心に後悔を抱えて生きることが、必ずしも後ろ向きなことではありません。私は今、誰かを励ます言葉を言うことができます。明るい顔で、前向きな気持ちで生活することができます。それは、仲間や家族のおかげであり、母のおかげです。これからも私は、心の中の母と一緒に笑えるように生きていきます。

お母さん、ありがとう。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

今ある、当たり前の日常、家族、友達、私を支えてくれる人たちにたくさん感謝し、大切にしていきたいと思います。どんなにつらいことがあっても前を向き、この自分の手で未来を切り拓いていきます。お母さんが生きられなかった分も、私が精一杯生きて、一度きりしかない人生、いろんな体験をして、いっぱい努力をし、楽しみたいと思います。そして、自分だけじゃなく、ほかの人も幸せにできるような人となり、充実し、胸を張って「幸せです!!」といえるような人生を作り上げていきたい！と心から思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

目に見えないフィルター

宮城県 石巻市立山下中学校 3年

日野 碧

「女の子なのになんで髪短いの」

幼いころから、さんざん言われてきた言葉。

「女の子なのに」私はこの言葉が大嫌いだ。

私はよく「女の子らしさがない」と母に言われる。そこからお説教が始まり、最後はあきれ顔をされるのがいつもの流れだ。でも、私には怒られる意味が全く分からなかった。なぜ、女性らしくと言われるのか、そもそも女性らしさとは何なのか、怒られるたびに疑問が増えていった。「個性を大切に」という言葉があるように、私は自分の個性をしっかりと持っているのだから、むしろ褒められるべきではないだろうか、とすら思っていた。私は男女という性別だけで「こうあるべき」という型にはめられる世の中に納得がいかなかった。

今年の5月、そんな私の考えの甘さに気付かされた。東京都教育委員会が主催するオリンピック・パラリンピック教育の一環として、世田谷区立東深沢中学校の生徒と一緒にボッチャの体験を行ったのだ。ボッチャとは、直径8.6センチメートルほどのボールを投げたり転がしたりして、的となるボールのできるだけ近くに当てるというシンプルな競技だ。私は「こんな簡単だ。」と思っていたのだが、実際にやってみると力加減が難しく、コントロールもできない。なかなか思い通りにはいかなかった。それに加えて、対戦相手と交互にボールを投げる際に、相手のボールを投げにくくする作戦や駆け引きなども必要で、作戦を立てるところまでは頭が回らなかった。私は「簡単だ」と想像していたにも関わらず、とても苦戦してしまった。

そんな私の近くで車いすに乗りながらボッチャをしている生徒が居た。私は「障害者なのに、上手に出来てすごいな」と思った。その瞬間、私はがく然とした。「女の子なのに」と言われることを、あれだけ嫌っていた私が、今ごく自然に「障害者なのに」と「障害者は健常者よりも、上手く出来ないだろう」と決めつけていたのだ。その時、私の考えがいかにおろかで甘く、自分自身も偏見をもっている一員にすぎないのだと痛感した。ここで、少し振り返ってみてほしい。皆さんも、私と同じように、悪気なく偏見を持っていることはないだろうか。

「女なのに」「男なのに」「障害者なのに」こういった固定された考え方は、とても窮屈で苦しいものだと思う。そんな苦しい考えを「当たり前」にしてしまっていることに気付いてほしい。そして、女だとか障害者だとかに捕われず、誰もが「自分らしく」いられる社会を目指さなければならないと思うのだ。

ボッチャ体験の際に、講師の先生がこんなことを言っていた。「現在、ボッチャは障害者のスポーツ種目とされているが、今後は健常者が出場する大会も企画している。ゆくゆくは、障害者と健常者が分け隔てなく同じ大会で競い合うこともできるかもしれない。」こういった取り組みを広めていけば、きっと誰もが「一人の人間として輝ける社会」が成し遂げられると思う。そのためには、まずは私たちが目に見えないフィルターを取り除き、互いに認め合う姿勢をもたなければならない。

それが私の望む社会であり、本当に平等といえる社会ではないだろうか。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私たちは学校で「偏見を持つてはいけない」という教を当たり前のように学びます。ですが、私はそう教える立場の大人も偏見を持っているのではないかと感じます。

どれだけ技術が進歩しても終わることのない人種差別やいじめ、男女差別などの問題。

大勢の大人がこれらの問題に対して、見て見ぬふりをしているように思います。今の社会を少しでも変えられるよう、学生、大人など多くの方に聞いていただきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

本当の平和とは

秋田県 にかほ市立仁賀保中学校 2年

齋藤 美穂

「中国人」。この言葉を目にしたとき、聞いたとき、皆さんはどのような印象をもちますか。

以前、とあるニュースがテレビで流れていました。それは、日本を訪れる中国人観光客が増加したことによって、様々な問題が発生しているというものです。「中国人」が、理由もなく街中でつばを吐いたり、買った商品が気に入らなくなったからといって無理に返品を要求したりして、他の観光客やお店に多大な迷惑をかけている……。

確かにこのニュースを見ると、その中国人に対して悪い印象をもつのは当然のことだと思います。だからと言って、「中国人」全員がそういった行動をとるということは、絶対にありえません。しかし、最近ではあたかもすべての「中国人」がそうであるかのような報道が、いたるところでされています。そういったものを見るたびに、私は目の前が真っ暗になったような、辛く悲しい気持ちに襲われます。

私の両親は、中国人です。しかし、公共の場で他の人に迷惑をかけるようなことは、絶対にしません。親戚や母の知人たちも、当たり前のようにマナーを守っている人たちばかりです。

だからこそ、「中国人」とひとくくりになされて悪く言われてしまうことが、私は悔しくてたまりません。世界からどんな武力が排除されようとも、このような偏見が無くならない限り、本当の意味での平和は訪れないと強く思います。

偏見は、誰しも持っているものだと思います。私自身も、そして皆さんも、心の奥底には確実に偏見があります。

実際に、私は偏見によるいじめを受けたことがあります。「中国人は暴力的だ」「中国人は平気で汚い手を使う」などといった言葉を、上級生から浴びせられました。悪口の発端となったのは、テレビ番組で流れていた情報だったようです。私はそんな中国人を一人も見ることがなかったので、ごく一部の情報を鵜呑みにした言葉に、ひどく憤慨した記憶があります。

もちろん、中国人のすべてが素晴らしいとは思いません。私の知っている中国人のほとんどは、おせっかいで口が軽く、お金に細かいです。

逆に、中国人よりも日本人のほうが恐ろしい部分を持っていると感じることもあります。ある子どもが親を殺してしまったというニュースを見たとき、私の母は「中国人は親を何よりも大切にするから、親を殺すなんてことはありえない。」と話していました。

このように、良い部分や悪い部分は、どんなことにも存在しています。それにもかかわらず、そのものの一面だけを見て、すぐさま悪いものだ判断するのはとても危険なことです。しかし、知らず知らずのうちにそれを生み出してしまふのが、偏見なのだと思います。

偏見をなくす第一歩は、一面的な見方をやめることです。マイナスな面をプラスの方向に捉え直すことは、誰にだってできるはずで。先に挙げた中国人も、言い換えれば、面倒見がよくて誰に対しても友好的、かつ賢いお金の使い方ができる人たちだと言えます。

長い歴史の中で受け継がれてきた文化というものがある、どんな国にもあるはずで。文化に違いがあるのだから、そこで生まれてきた国民性に違いがあるのは当然のことではないでしょうか。その違いを一律に悪いものとして捉えるのではなく、互いに尊重し合うことが、世界が平和になるために本当に大切なことだと思います。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私自身、中国人の血が入っていることを嫌悪し、自分らしさを殺していた時期がありました。しかし、それが今では、とても幸運なことだと思えるようになりました。私と似たような境遇のもとに生まれ、悩んだり苦しんだりしている人が、世の中にはたくさんいるはずで。そんな人たちに私の主張をとどけたいです。そして、コンプレックスを克服するきっかけや、ありのままの姿を見せていこうとする勇気になってほしいと思っています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

一人の人間として生きる

福島県 白河市立表郷中学校 3年

鈴木 渚

一昨年の夏、日本列島を震撼させる事件が起こりました。それは、障がい者施設の入所者 19 人を元施設職員が殺害するという事件です。犯人は、殺害した理由を「障がい者は自分の意志を持っていない。意志を持たない人間に生きる価値がないから、この世のために殺した。」と言いました。

私は、この言葉を聞いた時、怒りで体が震えました。なぜなら生きる価値のない人間などこの世にはいない。ましてや障がいを持つ人は自分の意志を持っていないのではない。自分の思いを表すことができないだけだと思ったからです。それを一方的に意志がないと決めつけ、身勝手な理由で尊い命を奪った犯人を決して許すことはできません。

私には一つ下に妹がいます。妹は、生まれつき障がいを持っているため、会話をしたり運動をしたりすることができません。そのため、一人ではできないこともたくさんあります。でも、それを家族である私たちが支えてあげることが大切だと思っています。

妹は自分の考えを言葉にすることができないかわりに行動で示します。例えば私をキッチンへ連れて行き、冷蔵庫を指さし、自分ののどに手を当てます。これは、「喉が渴いたから飲み物が欲しい。」と伝えているのです。最初はその行動の意味が分かりませんでした。でも、妹が一生懸命に体を使って伝えようとするのを私も一生懸命に理解しようとしたら理解できるようになってきました。そういったコミュニケーションが一つ、また一つと増えていき、今では少しジェスチャーするだけで妹の伝えたいことが分かるようになりました。

障がいを持っている人は場合によって、うまく話すことができず相手に思いが伝わらないこともあると思います。そんな時、相手に寄り添い、何を伝えようとしているのか、考えてみてください。時間はかかるかもしれないけれど、きっと分かるはずですよ。今、必要なのは、障がいがない人が障がいがある人を理解しようとする気持ちなのではないでしょうか。

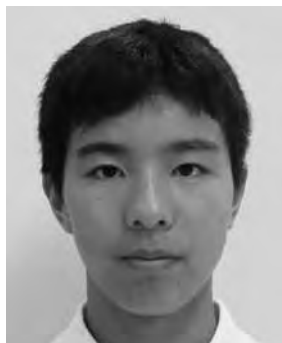
ノーマライゼーションという言葉を知っていますか。障がいを持っている人がそうでない人と一緒に助け合いながら生活をしていこうとする考え方です。ノーマライゼーションが確立された社会こそが、誰もが暮らしやすい社会なのだと思います。現在、障がいを持っている人たちが暮らしやすい社会を作るために私たちがしていることは何でしょうか。障がい者が生活するための施設を作ること、ユニバーサルデザインの開発。でも本当に大切なのは、障がいを持っている人とそうでない人の心の壁を取り除くことだと私は考えます。相手の気持ちを思い、自分たちができることを進んでしていくことで障がいを持っている人が今以上に暮らしやすい社会になっていくと思うのです。

私自身、こうして妹の話をお前さんの前ですることは勇気がいりました。でも妹を含め様々な障がいを持つ人にできることは何かを考え、小さなことから実践していくことが必要であると思い、この場に立っています。私の背中を押してくれたのは両親です。両親に聞いたことがあります。「妹の介護って大変だけど生まない方がよかったですって思ったことある？」母は迷わず「そんなこと一度もないよ。」と言いました。父は「あの子のおかげで自分自身、周りの人に対して優しくなれた。自慢の娘だよ。」と言いました。そんな両親に私は、自分の考えは間違っていないと勇気をもらっています。

障がいを持っている人もそうでない人も生きていく人、すべてが同じ人として互いに手を取り合い、互いに相手を思い合うことで、みんなが幸せな社会になっていくはずですよ。私は、障がいを持つ、持たないではなく、一人の人間としてこれからも家族とともに、誰もが平等で幸せな社会を作り上げていきたいです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

障がいを持っている人に対して、偏見を持っている人。そして「私には関係ない」と理解しようとしていない人に私の思いを届けたいです。ノーマライゼーションという素晴らしい考えを広め、障がいを持っている人、そうでない人の心の壁を取り除くことが大切だということに気づいて欲しいです。そのためにも自分ができることを見つけ、行動し、誰もが幸せな社会を作っていく、一人の人間として生きていきます。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

大人になるということ

茨城県 ばら野学園 那珂市立第一中学校 3年

青木 大翔

「大人」になるということがどのようなことなのか、考えたことはありますか。僕は、少し前まで、そのことがどういふことなのか考えようとすらしていませんでした。

今年六月、成人年齢を二十歳から十八歳に引き下げる改正民法が衆院本会議で可決され、成立しました。施行は二〇二二年四月一日。約一四〇年間続いた成人の定義が変わることになります。

十八歳は、ちょうど高校三年生です。高校生なのに「成人です」「大人です」と言われることは不思議な感じがします。成人年齢を引き下げることにより、金融関連の緩和や若年層の社会参画機会の増加などのメリットがあるそうです。

しかし、正直なところ、施行より一年前に十八歳を迎え、二〇二二年には十九歳になっている僕は、対象から僅かにずれるためか、それほど興味が湧いてきません。

本来ならば、もっと社会の変化に関心をもち、真剣に考えなければならぬのかもかもしれません。そこに思い至らない理由を考えたとき、「成人年齢の引き下げ」そのものではなく、「成人」という言葉に違和感を感じている自分いることに気付きました。

そもそも「成人」とは何なのでしょう。成人することが「大人」になることなのでしょう。

国語辞典で調べると、「大人」とは『自分の置かれている立場の自覚や自活能力をもつこと。思慮分別があり、社会的責任を負えること。』と載っていました。

一方で、「成人」とは『法律上の権利・義務などの観点から見て、社会の一員とされること。』と載っていました。

つまり、「成人」とは、法的に認められた社会的な立場であり、「大人」とは、その人の能力や内面のことを指しているのだと思います。そう考えると、僕たちが本当に考えなければならないことは、「何歳からが成人か」ということよりも、「どんな大人になるべきか」ということなのではないでしょうか。

僕は、学校を卒業して社会へ入っていくことが「大人」の入り口だと考えています。また、自分でお金を稼ぎ、将来のために貯蓄し、生活していけるようになることも大切だと思います。しかし、それだけでは何かが不足しているように思います。

僕は中学生になっても、毎日のように母から叱られています。謝るより先に言い訳をしては叱られ、物事を軽く考えて大口をたたいては叱られ、自分で考えずにすぐに人を頼っては叱られ・・・ということの繰り返しです。毎日同じことを言われているのに、なぜか直りません。きっと僕自身が甘えている証拠なのだと思います。

この甘さを捨て、誰かのせいにして、言い訳したりするのではなく、何か悪いことがあったときに自分の責任だと本気で思えるようになること。誰かが助けてくれる、何とかしてくれるという思考を切り離すこと。これらのことができるようになることが「大人」になることだと考えます。

僕は、関心をもてなかった「成人年齢を引き下げる改正民法」から、「大人」になることについて考えるきっかけをもらいました。そして、今の自分が、数年後の自分について、どれだけ無関心だったかということに気付くことができました。

僕は、四年後の十九歳になったときに「成人」を迎えます。あと四年で、自分がどのくらい成長できるのかは想像が付きません。

しかし、今の自分の延長上にあることは分かります。僕の近くにいる親や先生方からおられる言葉は、僕が大人になるための大切な糧になるのだと思います。そのことを受け止め、今の自分が何をすべきかを考えながら、自分の目指す「大人」に一歩ずつ近づくことができるように努力していきたいです。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

今年6月、2022年から成人年齢を20歳から18歳に引き下げる改正民法が成立したことを新聞記事で知りました。高校3年生で「成人」となることに違和感をおぼえました。そのことをきっかけに、自分が考えるべきは成人年齢についてではなく「どんな大人になるべきか」ということではないだろうか考えるようになりました。ちょうど同時期に主張文募集について担任の先生から声を掛けていただき、今の思いを書いてみようと思いました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

「ごめんね」と言わない社会へ

栃木県 矢板市立泉中学校 3年

神立 千星

その日、私はとても追いつめられていました。陸上の記録は伸びないし、夕ご飯の用意も手伝わなくちゃいけない。課題も終わさなきゃ……。だから帰宅して祖母が

「お帰り。頑張ったんだね。」

と声をかけてくれたときも、思わず

「ばあちゃんには分からないでしょ！？走れないんだから！」

と声を荒げて怒鳴ってしまったのです。

祖母の

「ごめんね、そうだよね……。」

という言葉で我に返りました。私はなんてことを言ってしまったのだろう。今もその時の祖母の顔が目に焼きついています。

祖母は筋ジストロフィーという病気を患っています。聞いたことはありますか？これは徐々に筋力が低下する病気です。幼い時に発症し、小学校高学年頃から車イスに乗る場合が多いそうですが、祖母の場合は進行が遅く六年前から車イスに乗るようになりました。

祖母は外出を好みません。共働きの両親が珍しく休みだったある日曜日、家族でドライブに行こうとした時も、頑として出かけようとはしませんでした。「出かけよう」と誘う私に祖母は「ごめんね、ちほ。」と笑顔で何度も謝っていました。祖母は自分が家族と外出することで、家族の行く場所が制限されたり、周りの人からジロジロ見られたりするのが申し訳ないと思ったのです。（なんでばあちゃんが謝らなくちゃいけないの！？）と誰にぶつけたらいいのかわからない怒りがこみあげてきました。

祖母の腕には火傷のあとがたくさんあります。帰りが遅い両親に代わって夕食を用意する時にできるのです。私が手伝えない時は一人で作ります。車イスの祖母にとって台所は少し高い位置にあるのです。

「火傷したの？大丈夫！？」

と聞くと祖母はいつも笑って

「なんでもないよ。ごめんね、遅くて……」

と言います。

祖母はこのところ、私に頼ることが多くなりました。ペットボトルのふたを開けるのが難しくなりました。トイレの手伝いも増えました。その度に祖母は「ごめんね、ちほ」と言います。いつか車イスでの生活もできなくなるのでは、と思うと私は不安で不安で胸が苦しくなります。

これから祖母はもっと周りに頼ることが多くなるでしょう。祖母は迷惑をかける、と恐縮するでしょうが、周りの人の手を借りることがそんなに悪いことでしょうか。助け合うことなんてお互いさまです。私が手を貸す以上に私は祖母に心の面でたくさん助けてもらっています。私が辛い時、話を聞いてほしい時、学校で嫌なことがあった時、いつも隣にいてくれたのは祖母でした。

私は将来「介護福祉士」になりたいと思っています。その夢が持てたのは祖母のおかげです。私が手を貸すことで誰かが少しでも楽になるのならいくらでも働きたい、そう思っています。体の不自由な人もそうでない人も同じように自由に、安心して生活できる社会になってほしい、それが私の願いです。祖母のように「ごめんね」なんて悲しい言葉を言わなくてもいい社会。体の不自由な人も使いやすい設備や建物、それが当たり前の社会であるのはもちろんですが、心もフラットで不自由を感じさせない社会。そういう社会を目指したいです。私一人の力はたかが知れています。でもそう願い、発信し続けていけば、願いは実現すると信じています。それが今まで私を助けてくれた祖母への恩返しにもなると思っています。そしていつか祖母に言いたいです。

「ばあちゃん、ごめんね。ううん、ありがとう。」

この作品を書いたきっかけはなんですか？

祖母が車イスで生活をしていて、日頃の生活の様子を近くで見えています。

歩くことや立ち上がることが不自由だと、外出しても、使えるところや行けるところが制限されてしまいます。

生活の中でどんな人でも外出や生活が気持ちよくできるよう、施設や人の心のバリアフリーが多くなってほしい。

高齢者が増える今、より多くの人安心して生活できる社会になってほしいと願い、この作品を書きました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

かけがえのない故里で

群馬県 藤岡市立鬼石中学校 3年

須田 くるみ

私の家は今年で百年を迎える老舗のおまんじゅう屋です。父が四代目で兄が五代目を継ぐことになっています。店は人里離れた山の中にあり、私はそこで家族とともに暮らしています。そんな不便な場所にあっても、おまんじゅうを買いにたくさんのお客さんが足を運んでくれます。お客さんが好んで買ってくれる我が家のおまんじゅうを、私は誇りに思います。

家の仕事は、土・日・祝日がとても忙しいので、家族で遊びに行った記憶があまりありません。夏休みの思い出を書いてくる宿題ができずに、悩んだこともありました。もっと町の方に住んでいたら、友達とすぐに遊べるし、買い物もすぐにできるのに、なんで山にいるのだろうと、小さい時はとても不満に思っていました。けれども、おまんじゅうを買いに来るお客さんの思い、おまんじゅうづくりに情熱を傾ける家族の思いを考えると、その不満とは別の思いが私の心に芽生えました。

不便な山の中にあってもお客さんが我が家のおまんじゅうを買いに来る理由を、私なりに考えてみました。すると、我が家には三つのサプライズがあることに気づきました。一つ目はこんな山奥でおいしいおまんじゅうにめぐり逢えること、二つ目は私の祖母から地元の話聞いてほっこりできること、三つ目は祖母の作った手料理とお茶が振る舞われること。この三つのサプライズを提供されたお客さんは、とても喜んでくれます。そして、リピーターとなって来てくれます。この三つはいつでもできるわけではありませんが、お客さんの心に残る我が家のおもてなしなのです。おまんじゅうを売って、その利益で私たち家族は確かに生活していますが、それ以上にお客さんのために何か役に立ちたいという思いが、この三つのサプライズの源だったのです。

また、我が家のおまんじゅうは、地元の方々が別の地域の方へのお土産にすることで、広まることができました。そんな地元の方々に恩返しをしたいと、父や私たち家族は大きな夢を描いています。

それは、仕事がしたくても子育て中でできない人、定年だけどまだまだ仕事をしたい人、仕事が見つからない人、そんな人たちのために大きな土地を耕し、花や野菜をつくり、それを売ったり、収穫した食材を使った食事を出したりするなど、その人たちの力で経営していくことができる、そんな施設を作っていくという夢です。様々な理由により鬼石地区を離れていった人たちも、生まれ育った故里への愛情はもっています。この場所で生活できるという自信さえあれば、人は離れていきません。父の夢であるそんな施設ができれば、鬼石地区に残る人が増えると私は思います。とてつもなく大きな夢ですが、その父の夢をいつか実現できるよう、私たち家族はサポートしたいと考えています。私自身も、将来どのような職業に就くかは、具体的に決まっていますが、父の夢の役に立てる人になりたいと考えています。

私の住む鬼石地区はだんだん人が少なくなり、新しい人がなかなか入ってきません。私が大人になったとき、鬼石地区はどんな風になっているのでしょうか。人口は減っているのか、人が仕事できる職場はあるのか、小学校や中学校は閉鎖されていないのか、その場所で私はどのように生活しているのか、少し不安になります。人口の減少、少子高齢化、それは鬼石地区に限ったことではなく、群馬県内、日本全国でも深刻な問題となっています。

だからこそ、せめて私たち子どもが地元で仕事をし、そこで家庭を築いて人を増やしていく、それも一つの地域への恩返し、地域への貢献なのだとは私は考えます。私は家族もいるこの自然豊かな故里、鬼石地区が大好きです。私はこれからも家族と協力して、三つのサプライズをお客さんに提供できるように、父の夢を手助けできるように、この故里にしっかり根を張って生活をしていきます。かけがえのない故里を守ることができるのは、私たちなのだから。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私の生まれ育った鬼石地区の魅力を多くの人達に知ってもらい、多くの人達が足を運んでくれるきっかけに私の少年の主張がなってくれたら良いなと思います。

私自身も未来をつくっていく子ども達の成長を見守りながら家族と一緒に鬼石地区の地域活性化に協力していきたいと思っています。そこで私は保育士という職業に就き、将来を持つ子どもを育成して、地域に貢献していきたいと思っています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

“Welcome to Tsurigasaki beach!” ～真のおもてなしを求めて～

千葉県 いすみ市立岬中学校 3年

梶山 亜莉沙

“Welcome to Tsurigasaki beach!”

私達の地元といえる釣ヶ崎海岸は、2020年東京オリンピックサーフィン会場となりました。初めて正式種目として認められたサーフィンが地元開催となり、2年後の実施に向け、町中が大変盛り上がっています。

地域の活性化やグローバル化の推進を目指し、参加アスリートのみならず多くの観光客のホストタウンの一つとして、自治体レベルで、住民の積極的な参加が求められています。

では、私達に一体何ができるのでしょうか？

最近「オリパラ」という言葉をよく耳にします。これはオリンピックとパラリンピックを合わせた総称です。一体どれほどの人がオリンピックと共にパラリンピックが開催されることを意識しているのでしょうか？

さて、日本が世界に向けて掲げている「おもてなし」は、この二年で十分な準備が進められてきたのでしょうか？そして、これからの二年で進めていけるのでしょうか？

「パコーン」「キキキッ」笑顔でラケットを振り、コーチのボールを打ち返す兄。兄が動く度に車椅子の音も響きます。私には6年前にこの世を去った大切な兄がいます。長い闘病生活の末、最後は車椅子生活を余儀なくされましたが、それでも大好きなテニスを続けました。しかし、残念なことに兄の笑顔はコートの中だけでした。そして、それは兄の闘病を支えた私達も同様でした。どうしても兄が入りたいと言ったレストラン。ところが、入り口の間口が狭く、車椅子で通ることができません。そのため母が兄を抱きかかえ入店しました。やっとの思いでテーブルに着いた私達を待っていたのは周囲の視線でした。「何もそこまでして来なくても…。」そんな非難めいた視線を感じた私は、「ジロジロ見ないで！」と怒りを感じ、周りを睨み返したことを鮮明に覚えています。

このように車椅子ユーザーを取り巻く環境一つ取ってみても、日本はまだまだ発展途上だったと思います。

現在ではスロープが至る所に設置されるなど、障害を抱える人々が暮らしやすい設備、環境が整ってきています。しかし、これで真のおもてなしの準備が整ったといえるのでしょうか？目に見えるハード面でのバリアフリーは勿論、「心のバリアフリー」を成熟させることこそが、今の日本に必要なことだと思います。私は真のおもてなしとは、人を思う心だと思います。

私達岬中学校では毎年地域の独居老人の方に絵手紙を届けています。大切なことは絵の巧拙ではなく、生徒全員が受け取るお年寄りの方を思いながら作成するという事です。

受け取ってくださる時の笑顔。そして、その笑顔に触れた瞬間、私達の胸に湧き上がる喜び。誰かを大切に思う思いは必ず届き、人を支え、笑顔を呼び、勇気を与えてくれます。

私は東京オリンピックの際、ボランティアとして協力したいと考えています。このボランティアに必要な資質は何でしょうか？語学力？特技？いいえ、相手を大切に思う思いではないのでしょうか？この思いがあれば、誰かの心を温かくする最高のおもてなしができると信じています。兄との思い出、絵手紙を通して地域の方と交わした思い。思いの大切さを実感している私は今、そう考えるようになりました。そして、私にしかできないボランティアがきっとあると、強く感じています。

誰にでも、その人にしか出来ないおもてなしがあるはずです。相手を大切に思う気持ちさえ忘れなければ。

2020年、1人1人の心のこもった真のおもてなしが、小さなかけらの1つ1つとして集まれば、東京五輪はきっと成功するはずです。そういう日本でありたい、そんな日本にしていきたいと願っています。そのために私に何ができるのか、見つけて実行していこうと思います。たくさん思いを込めて。

“Welcome to Tsurigasaki beach!”

この作品を書いたきっかけはなんですか？

- ・サーフィン競技の会場となる地元、釣ヶ崎海岸での2020年東京オリンピック、パラリンピックを、千葉県民の一人として、盛り上げていきたいと考えたから。
- ・亡くなった兄の車いす生活を通して経験したこと、感じたこと、また岬中学校の絵手紙配付を通して経験したこと、感じたことをいかした「おもてなし」で、海外選手や観光客の方々に、ボランティアとして貢献していきたいと考えたから。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

「教育」を手に切り拓け

東京都 筑波大学附属中学校 2年

國井 結月花

「そういうお友だちもいて、良い経験になるわね」

この言葉を聞いて、みなさんは私にどんな友だちがいると想像するだろうか。

私には、耳の聞こえない友だちがいる。彼とは幼稚園の頃に出会い、家族ぐるみで仲良くなった。私は彼との「会話」をするために手話を覚え、彼が通うろう学校の友だちともよく遊んだ。そんな私たちに、ある友だちのお母さんが言ったのが先ほどの台詞だ。

「そういうお友だちもいて、良い経験になるわね」

母は絶句していた。幼い私でも、その言葉がひどく偏見に満ちた、心ない内容だとわかった。会話の手段が音声ではなく手話という違いがあるだけで、彼は他の子と何も変わらない。「経験値を上げるため」に交流をもったわけではない。私はとても悲しくなった。

ただ、この発言だけでそのお母さんを非難することはできないと、今の私なら考えられる。私が通った幼稚園は軽度の障害を持つ子も一緒に過ごす環境であり、私にとっては「聞こえない」という障害も「個性のひとつ」くらいの意識だった。色々な「個性」がある人が周りにいて当たり前、そう思っていた。しかし、自分で言うのもおかしいかもしれないが、このような考え方に至るのは、障害のある方とあまり接したことがなければ難しいのではないかと、今ではわかる。

これらの経験から、障害に対する偏見をなくし共生社会を目指すには、お互いのことを知るための出会う機会と学びの場が必要だと私は考える。国際連合が定めた「持続可能な開発目標」の第四目標にあるように、教育の平等は世界の課題である。世界には貧困や男女・民族・宗教・障害による差別などの理由で、教育を受けられない子どもが今も多いのだ。しかし、日本の就学率はほぼ100%とはいえ、いわゆる健常児と障害児は別の学校に通い、交流もない。私が通った公立小学校には支援級もなく、近所のろう学校の存在すら知る同級生はいなかった。このような状況で「多様性を認める」「共生社会を目指す」といったことの実現に向かっていっているとは思えない。

私が目の当たりにして一番ショックだった偏見が、冒頭で述べたものだ。しかしこれは、平和ボケとされる日本で生きる私だから、この程度で衝撃を受けたとも思っている。世界に偏見も格差も残っていることは、残念ながら疑いようのない事実だ。それらが原因となって不平等な教育が生まれる。教育の不平等は次の世代の貧困や差別に繋がり、負の再生産が続いてしまうのではないだろうか。

ネルソン・マンデラが「教育とは、世界を変えるために用いることができる最も強力な武器である」と言ったように、人生の初期に教育の場で得た知識や経験は大きな財産となり、人生を切り拓くための道具となると私は信じている。

友だちに対する偏見に直面した私が、ただぬくぬくと普通の学校生活を送るだけでいいのだろうか？いや、そんなはずはない。私はまず、この体験を誰かに伝えるべきだと思い、この文章にした。そして私は、自分や将来出会う誰かのために道を切り拓く、その道具としての経験をj得るために、今の私ができる最大限の努力と様々なチャレンジをしようと決意した。

まず身近なところでいえば、私が通う国立大学附属中学校には、同じ附属校として聴覚障害・知的障害・肢体不自由などの生徒が通う支援学校があり、附属校合同の合宿やスポーツ交流が行われている。しかし、これらの行事に参加してわかったのだが、「オリ・パラ」と頻りに言われているわりには参加者が少なく、「共生社会」という概念も浸透している印象はない。自分が参加するだけでなく、友だちを誘うなど理解の輪を広げる役割も意識していかなければならないと感じた。

また、言語はあくまでコミュニケーションのツールであり、それは手で会話をする手話も変わらない。遊びの中で覚えたものに留まらず、手話も改めて学び、多言語と手話を活かしたボランティアをするなど、様々な立場の人の橋渡しになる活動をするために努力を続けたい。

将来、私がどんな仕事をするかはまだわからないが、人種・性別・宗教・障害の有無に関係なく、この世界のどこかで必要としている誰かのために、自分が得た知識と経験を惜しみなく使える人間に、私はなりたい。

この主張をどんな人に届けたいですか？

この文章でも述べたように、私には耳の聞こえない友達がいる。私は彼に出会ったことで、社会への視線が変わり、人生で大事にしたい指針を意識することができた。私はそんな彼とその家族の皆さんに、感謝をこめて私の文章を送りたい。また、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、そしてその先の未来に向けて、共生社会という概念の普及と、それに対する具体的な行動が不可欠である。私の文章を読んでもくださった方の心に、少しでも響いたものがあればうれしく思う。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞



どんな思いで声をかけようか

神奈川県 川崎市立宮崎中学校 3年

山津 亜祐

「頑張れ」という言葉を皆さんはいつ、誰に、どのような時にかけたことがありますか。そして、その時に皆さんはどのような態度で、どのような気持ちをもって声をかけましたか。

私は女子ソフトテニス部に所属していて、友だちが試合をしているときに本気で声をかけています。体育祭でも競技中の友だちや先輩方や後輩のみんなに精一杯の声を振り絞っています。しかし、よく考えてみれば、試合中の友だちも競技中の人たちも、一生懸命頑張っています。それなのに、さらに『頑張れ』と声をかけることは、はたして正しいことなのでしょうか。頑張っている人に『頑張れ』と声をかけることは、『無理をしろ』と言っているのと同じなのではないでしょうか。皆さんはどう思いますか。

私は、応援には人と人をつなぐ架け橋のような働きがあると思っています。そこで改めて「頑張っている人」に声をかける応援のあり方と応援することの大切さについて考えてみたいと思います。

私は、サッカー観戦が好きです。リアルタイムでよく観戦します。サッカーの試合直後のインタビューを聞くと、「皆さんの応援のおかげで勝つことができました。応援ありがとうございました。これからも頑張ります。」という言葉をよく耳にします。サッカー選手たちは毎日たくさんの厳しい練習を積み重ねて頑張ってきたに違いありません。それなのに、『もっとがんばれ』と言われて嫌な思いはしないのでしょうか。何故、「応援ありがとうございました。」と感謝し、更なる応援が選手たちの力になったのでしょうか。それは『応援する側の態度や気持ち』ととても深い関係があるのではないかと最近思うようになりました。

先日行ったテニスの大会でのことです。相手チームの応援歌に違和感を感じたのです。歌詞の中に「イイネ、イイネ」という言葉がありました。言葉自体はかわいい感じがして、それこそ「いいな」と思ったのですが、応援している人たちが「本当にイイネと思っているのかな」と疑問を抱いてしまうような応援の仕方だったのです。心から励まそうというのではなく、やらされているという感じなのです。もし、私がその応援で試合をしているとしたら、嫌な気持ちになったに違いありません。その時私は、応援には『応援する側の態度や気持ち』が重要なのではないかと考えたのです。

では、よい『応援する側の態度や気持ち』とはどんなものなのでしょうか。みなさんは、よい応援と聞かれたとき、どんな応援を思い浮かべるでしょうか。私は、迷わずワールドカップの各国の応援を思い浮かべます。国一丸となって選手たちを応援する態度や気持ちはまさに素晴らしいものだと思います。応援は人を励ますこと。頑張っている選手に心をこめて声をかける、そんな思いをみんなで共有することが大切なのです。だからこそ、選手たちの力となり、選手たちは「応援ありがとうございました。」とお礼を言うのだと思います。

皆さんにもさまざまな応援の経験があることでしょう。そんな今までの応援を振り返ってみてどうですか。「頑張れ」と声をかけたい人の力になるような応援ができていましたか。

私はこれからの応援で、相手の隠れた努力を感じ取り、それを敬う態度と感動を与えてくれることへの感謝の気持ちをしっかりと持って、心から応援しようと思います。

『応援する時に必要なこと』それは、心のありようなのです。『敬い、感謝する』気持ちとは、相手を思いやる優しい心といってもよいでしょう。このことを一人ひとりが意識したとき、私たちは世界中の人々と一丸となってお互いを応援しあうことができるのだと思います。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

私は小学校5年生の頃から中学3年生まで毎年応援団になっています。応援団になる度に、先生方から「応援の態度がなっていない」「本気で応援しろ」などの言葉をよく言われました。その時私は、応援する時に大切なものは何か、頑張っている人に対して適切な態度や気持ちでなければ応援する資格はないのか、と様々なことを考えました。皆さんにも応援の機会がたくさんあるはずですが、この私の主張を少しでも多くの人に伝えたいと思い、書きました。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞



言葉の先にあるもの

新潟県 長岡市立東北中学校 3年

齋藤 こはる

「あなたは英語がしゃべれますか」こう質問されたときに堂々と「はい」と答えられる中学生は少ないと思います。普段使わない言葉をしゃべることは、確かに少し、ハードルが高いです。しかし、英語で会話をするとなると、そのハードルはかなり低くなるのではないのでしょうか。

「しゃべる」と「会話をする」は違うことだと私は考えています。辞書で調べれば似たような意味が書かれているでしょうが、本質的なところに違いがある気がします。

そう考える最大の理由は、中心となっているものが違うからです。例えば、この二つの言葉に「英語」を加えてみましょう。「英語をしゃべる」

「英語で会話をする」

前者は「英語」が文の中心に、後者は「会話をする」という人間の動作が文の中心になっていることがわかります。英語をしゃべる、というとき、目的は英語をしゃべることであり、正しく英語を使うことが大切になります。必然的に単語や文法などに関する多くの知識が必要になり、なかなか上手くしゃべることができません。しかし、英語で会話をするとなると話は変わってきます。なぜならこの場合、英語は会話にするための一つ的手段に過ぎないからです。

私がこんなふうを考えるようになったきっかけは、昨年行ったアメリカでの経験です。長岡市の姉妹都市であるフォートワースへの訪問事業に参加してのアメリカ行きだったので、もちろん家族はいません。ホームステイで一週間ほどを過ごすのですが、実は私は、自分の英語は現地の人には通じないだろうと思っていたのです。そのため、私はホストファミリーとあまり積極的に関わることができずにいました。何か言いたいことがあっても事前に調べておいた表現や辞書に載っている言葉を使い、何とか正しい文を作ろうとしていました。でも、そうして作った正しい文章をしゃべっても、それはどこか自分の言葉ではないような気がして、あまり楽しくありませんでした。

ある日のこと。私はホストファミリーと食事をしていました。すると、ホストシスターが、私に話しかけました。「What do you think?」(ねえ、この料理どう?)

私はとっさに、

「Yummy! It is the best. I ate it for the first time.」(すごくおいしい!特にこれがいいね。初めて食べたよ。)

と答えました。急に聞かれて少し焦っていたので、きっと文法はめちゃくちゃだったと思います。しかし、その言葉は、辞書で調べた正しい文よりも私の心から出たものだと思えました。そのとき私は、会話の楽しさに気づいたのです。

それからは、自分の言葉で会話することを心がけるようになりました。相手の言いたいことが理解できなかったり、自分の言いたいことが伝わらなかったりということもありました。それでも自分の頭で精一杯考えて言うことが何よりも楽しかったし、互に通じ合えていると思えました。

英語で会話をするときに最も大切なのは、相手に自分の考えを伝えようとする気持ちです。うまく言葉にできなくても、そこで諦めず、自分の言葉で思いを届けようとするのがコミュニケーションの新たな扉を開いてくれることを、私は身をもって学びました。そしてこれは、他のどんな言語にも当てはまります。日本語であっても例外ではありません。

私は、言葉の先にある心を大事にしたいと思います。それを意識したやりとり一言一語に心を込め、また言葉から心を感じ、それをくみ取ることこそが、真のコミュニケーションであり、これからの自分の人生において必要不可欠なものであると感じるからです。

「言葉」という手段に磨きをかけながら、言葉の先にあるものを大切に、多くの人とつながっていける自分でありたいと思っています。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、自分自身を含めたコミュニケーションを苦手としている人達にこの主張を届けたいです。コミュニケーションによって、相手と心が通じた時の楽しさを多くの人に感じてもらいたいからです。自分からというのは、なかなか難しいかもしれません。しかし、勇気を出して一歩前に踏み出すことが人と人のつながりを更に広げていってくれると思います。この主張がその小さなきっかけになれば、うれしいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

心はそこにありますか

山梨県 山梨市立山梨南中学校 3年

窪川 葵

「せをはやみ いわにせかるる たきがわの われてもすえに あわむとぞおもふ」私は今、百人一首競技かるたの世界に没頭しています。うたの一つひとつに慣れ親しむにつれ、三十一文字にうたわれている情景や思いに引き込まれています。この和歌たちがうたわれた時代は人々が気軽に会い、会話することが許されず、和歌は重要なコミュニケーションツールとして存在していました。だからこそ、限られた文字の中に相手を思い、心を込め、時間をかけて詠み、相手に伝えたものでした。その強い思いゆえに、私はこの三十一文字の和歌を目にし口ずさむたびに、壮大な絵巻物を見ているような気持ちがしてなりません。

転じて、平安時代から約五〇〇年以上を経た今を生きる私達のコミュニケーションはどうでしょうか。文化が発展し、社会が豊かになった分、より豊かなものになっているのでしょうか。

昨日、こんなことがありました。塾が同じだけれど、他校へ通う友人と連絡をとった時のことです。その日、友人は体調が悪く塾を早退しました。自分の携帯電話を持たない私は母のものを借り「顔色が悪かったけど大丈夫？課題のプリントは二枚だよ。なければ届けようか。」と、使い慣れない携帯電話で四苦八苦しながらメールを送りました。その返事は「オケ。よろ。」それだけでした。私は文字を目にしただけでは何のことか分からず、結局後日会った時に、友人の気持ちを聞き直す羽目になってしまいました。「あれは、それでいいよ。よろしくねってことだよ。もう面倒臭いな。」そう言う友人の顔は笑っていて、私ののんびりさを楽しんでいるようだったので、私もつられて笑い、その場は終わりました。

しかし、このやり取りは私の胸にチクリと刺さったまま、ずっとくすぶり続けていました。「オケ。よろ。」なんて心のない冷たい文章なのでしょう。文字を打つだけで即時的に相手とコミュニケーションがとれる携帯電話の世界では言葉はどんどん短く簡略化されていきます。忙しい中で時間を作る手段としての便利さと引きかえに、心が置き去りにされていく淋しさやむなしさを私は感じずにはいられません。日々、大量にゆきかう言葉たち。そこに本当の心のつながりや優しさはあるのでしょうか。コミュニケーションを密にとっているようで、本当はつながり合っていない。反対に心に孤独を生み出すような冷たいコミュニケーションを重ねているだけではないのでしょうか。

私たちは、言葉を使うこの地球唯一の生命体です。日本には古来より受け継いできた豊かな言葉文化と、相手を思う思いやりの精神があります。

真のコミュニケーションは速さ、便利さではなく、相手を思い自分の心を伝え、それを受けた人間の感情を呼び起こし、心をつないでいくものなのではないのでしょうか。言葉に心をこめる。誰もが、毎日使うものだからこそ、丁寧に使うべきだと思います。そう思いながら、人とつながっていけば社会はより豊かな、温かいものになっていくのではないかと思います。

今日も、私は競技かるたで畳の上に並べられたたくさんの和歌たちと向き合います。はるか昔の人々の心や、言葉の息吹を感じ取りながら。「瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ」たとえ一度は別れても将来再び会おう。と情熱的にうたった和歌のように、コミュニケーションの便利さと豊かさが融合し、さらなる新しい文化を作り出す未来への道を、私は歩んできています。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

趣味で百人一首競技かるたをしていてその時触れ合う和歌に含まれる細やかな心情、情景、言葉の奥深さを感じた。転じて、今の私達の重要なコミュニケーションツールとしての携帯電話内のやり取りは、どんどん簡略化され心がおいてきぼりになる孤独なコミュニケーションのように感じる。言葉に心を込めてやり取りする事で便利さと心のつながりの心のつながりの両方を得ることが出来るのではないか。一つの和歌を引用し、その思いを伝えたいと思った。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

よりよく生きること

富山県 滑川市立滑川中学校 3年

水島 詢子

私は15年間の人生の中で、大切な人の「死」に直面した。死ぬことの悲しさや恐ろしさは、頭では分かっているが、実際に目の前にすると、「悲しい」とか「寂しい」とか「嫌だ」という言葉では表現できない特別な感情になったことを覚えている。

私の祖父は、自分に厳しい人であった。常に新しいことを学び続け、それについて自分の考えをもっていた。そして、それを文章にして書き留めていた。家業の製薬会社を引き継ぎ、その後、電気部品の会社も経営していた。戦争という恐ろしい時代を生き抜き、懸命に生き抜いた祖父を、私は心から尊敬している。

そんな祖父が今年3月に他界した。心筋梗塞だった。祖父はこれまでに癌を一度、心筋梗塞を二度、大動脈解離などといった大病と何度も闘ってきた。長い闘病生活を経験して、自分の体がもう長くはないことに気付いていたのだろう。祖父は、人生の終わりを迎えるための活動、「終活」を計画的に進めていった。会社を長男に引き継ぎ、働いている人たちの生活を守ろうとした。また、車の運転を止め、免許を自主的に返納した。自分の死後のたくさんの事務処理についても文書に記していた。そして、亡くなる前日まで普通に働き、食事をとり、周囲に心配をかけまいと痛みに耐えていたらしい。そして、祖父は亡くなった。私は、祖父に人を思いやる温かな心というものを学んだ。

私たちは今、便利な道具に囲まれ、豊かな生活を送っている。一人一人が自由に自分のしたいことをし、生きたいように生きることができる。そうした、現代だからこそ、どのように生きるかということが大切なのではないか。

生物は本来、大自然の中で生きてきた。そこにたまたま、知能をもつ人間が現れた。人間は自らが住みやすく安全に生きるために、自らの力を活用し、科学技術を発展させた。その結果、人の命を救う薬、不妊治療、臓器移植、延命治療、遺伝子操作等、今では自分たちの命をコントロールできるようになってきている。

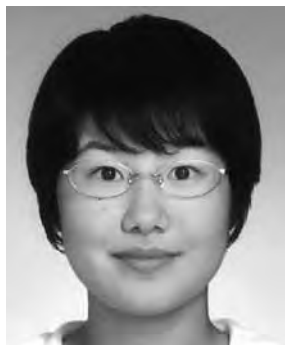
人間にとって「死」は逃れたいものであり、それは生物として避けられないものだ。しかし、生きるものは、必ず死を迎えなければならない。そして、そのために生き抜く使命があるのだ。

祖父の、真剣に死と向き合い、最後まで祖父らしく生き抜いた姿を見て、私は、「人は人として、よりよく生きるべきだ」と考えるようになった。中学生の私が今できることは、たとえば、誰かのために尽くすということを惜しまないことであったり、自分の理想とする生き方を明確にして努力することであったり、一日一日を大切に生きていくことであったりなどである。

誰しにも、自分の人生に素直に向き合って生きる権利がある。人の一生は一日が積み重なって存在している。私は、自分の人生に素直に向き合って生きていきたい。そして、私は「私」という命をいただいた以上、懸命に生き、よりよく生きようとした祖父のようになりたい。

この主張をどんな人に届けたいですか？

人は誰でも、迷い苦しむときがあります。でも、そんなときこそ、「よりよく生きよう」「自分らしくいよう」と考えを転換することで、大きく救われると私は考えています。私はこの作品を通して、日頃は後回しになってしまいがちな「生きる」ということについて考え、訴えました。だからこそ、今現在迷っている方、また、とても幸せな方にも、私の主張が届き、「生きる」ということを見つめ直すきっかけを贈ることができればうれしいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

命の訴え

福井県 敦賀市立気比中学校 2年

中村 穂里

「あれっ。」「あの子、どうしたのかな。」ぼつんと一人下を向いている子がいました。ここは、クラスの学級目標を決める話し合いの場です。あちらからもこちらからもいろいろな意見が聞こえてきます。学級目標は、全員の意見を取り入れて作るものです。しかし、一人でも意見を言えていないのならば、それはクラス全体の目標ではなくなってしまいます。意見を言いたくても言えない子は、きっと自分の思いに蓋をしてじっと耐えているのでしょう。このように、どのクラスにも、どうしても意見を言えない子もいるのです。

このような弱い立場の子どもがいるのはクラスの中だけではありません。例えば、難民として生まれた子ども。奴隷になっている子ども。さらには、戦争に行っている子ども。自分の思いを発信できない……。これはとてもつらいことです。このような状況の中で生きる子どもがもし私だったら……。私はふと自分に置き換えて考えてみました。

今、ここは戦場。見渡す限りの焼け野原です。こんなに何も無い場所……。もしも、私がいたなら、何を考えるのでしょうか。私は、過酷な状況で戦っている子どもたちに聞きたいです。「あなたに希望はありますか。」と。彼らの心の中には、湧き上がっていることでしょう。「絶望」という文字が……。戦争に駆り出されようとする子どもたちが、今、まさにこの瞬間も何千、何万人と存在している……。想像をふくらませるにつれ、私は胸が痛みました。

命。この一文字の中には無数の力が込められています。命は、時には、人を喜ばせ、時には人を悲しませます。命というものはなんと素晴らしく、またなんと残酷なのでしょう。子どもたちの命を、子どもたちの希望を、「戦争」といった手段で簡単になくしてはいけません。

子どもたちの未来が楽しいものになるように、戦争などで子どもたちが苦しむ世の中はなくなってほしいです。すべての子どもたちには、自由に生きていける未来が待っているはずです。もしかすると、子どもたちの発言によって、戦争を解決する方法が見つかるかもしれません。弱い立場にある子どもたちの生活が、少しでも平和なものに近づくかもしれません。大人たちには、どうか子どもたちの声なき声に心を寄せ、実践してほしいのです。ほんの少しのことで構いません。子どもたちの願いを聞き入れてもらうことができたなら、世界はがらりと変わり、希望が見えてくると信じています。私たちにとって、その「希望」こそが追い求めているものであり、すがっていたいものなのです。

私たち子どもからの願い——。それはただ単純なこと。私たち子どもや世界中の弱者の声に耳を傾けてほしいのです。私たち、子どもに「希望」の光をどうかください。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を世界中の人々に届けたいです。大人はもちろんのこと、子どもたちにも伝えたいと思います。思っていることを素直に言葉にすることが難しい人たちや、戦争等で自分の思いを自由に発信できない人たちに届けることができると嬉しいです。そして、私の主張を通してみなさんに「命」について少しでも興味を持ってもらえれば、何かを感じてもらえれば、この主張をする意味があると思います。あわよくば、私の主張によって誰かが救われたと感じてくれたなら、私はとても幸せです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

明るい未来をめざして

三重県 津市立橋北中学校 3年

西井 萌々花

皆さんは、政治に興味関心がありますか？「政治は難しくよくわからない」「政治家の仕事で自分には関係ない」と、思っていますか？

二〇一五年、若者の政治意識を高め、若者の声を政治に反映させようと、選挙権年齢が十八歳に引き下げられました。そして、翌年の参院選は、初の十八歳選挙ということで、大きな話題となりましたが、十八歳・十九歳の投票率は五割にも満たず、二十代では三割という低さでした。昨年の衆院選では、さらに下がってしまったそうです。それは、なぜでしょうか？

「まだ選挙権もない中学生には、政治なんて関係ない」と、思っていた私ですが、昨年の後期、生徒会長となり、生徒会活動を体験してみて、政治について少し考えるようになりました。

生徒会活動は、本来、全校生徒による全校生徒の為の活動です。しかし、ほとんどの生徒が、生徒会執行部に任せっきりで無関心のように思えました。そこで私は、何とか皆に興味を持ってもらい、活動に参加してもらいたいという思いから、「アンパンマン BOX」の設置を公約にあげ、実行しました。

「アンパンマン BOX」とは、意見・要望・悩み等、だれでも自由に投書してもらい、それに、愛と勇気を持ってお答えするといった目安箱のようなものです。皆に親しみのあるキャラクターを用いることで、生徒会活動を身近に感じてもらおうという思いがありました。すると、予想外に反響が大きく、たくさんの投書がありました。中には、ふざけたものや、実現できない投書もありましたが、私は、全ての投書に誠心誠意をもって答えるようにしました。たとえ実現出来ない要望であっても、理由をきちんと説明し、時にはユーモアを含め、全ての投書への返答を掲示しました。その結果、どのような意見にも返事が返ってくるのが好評で、投書用紙が足りなくなるほどたくさんの投書が集まりました。そして、いくつかの要望を実現する事が出来ました。中でも、三年生を送る会にて、サプライズで生徒と先生方が一丸となり、フラッシュモブを成功させたことは、最も印象に残っています。このように、多くの生徒の意見を取り上げ、よりよい学校づくりのために反映させたことで、生徒会活動を、より身近に感じてもらえるようになったのではないかと思います。これらの生徒会活動で、私が経験したことは、政治にもあてはまるのではないのでしょうか？

テレビや新聞で見聞きする政治家の言葉は、私たち若者には、難しく堅苦しいです。また、政治家のスキャンダルや失言、暴言が政治の場で取り上げられ、大事な議論が進まなくなるのは、悲しい気持ちになります。これでは、政治を身近に感じることは、とてもできないでしょう。

最近では、インターネットや SNS を用いた選挙活動が、多くの候補者によって行われています。しかし、これらも大人向けの難しい言葉や政策ばかりが並んでいて、私たち若者の生活からは、縁遠く感じられます。これでは、インターネットや SNS に親しみのある若者であっても、距離を置いてしまいそうです。もっと、若者に向けて分かりやすい情報を発信し、若者が意見や要望を気軽に伝え反映する事ができるようになってほしいです。そうすることで、若者が、政治を身近に感じる事が出来、興味関心を持てるようになるはずですよ。また、インターネット投票が利用出来るようになれば、投票に行くのが面倒くさいという若者でも投票するようになるのではないかと思います。

まだまだ、政治が、私たち若者に身近なものであるという実感はありません。しかし、政治に関心を持つことは、私たちの未来を考えることでもあります。難しい、面倒くさいと目をそらさず、受け身の姿勢ではなく、自分で情報を集め、自分の考えを持つことが大切です。そして、私たちが選挙権を持った時、与えられたチャンスを逃さずに、自分の意見を政治に反映させることで、私たちの明るい未来を築いて行きましょう！

この作品を書いたきっかけはなんですか？

生徒会長となり、全校生徒による全校生徒の為の活動にしようと、「アンパンマン BOX」を設置し、意見・要望・悩みを自由に投書してもらい、その全てに対する答えを掲示した。すると、用紙が足りなくなる程たくさんの投書が集まり、全校生徒と先生たちで、一致団結した活動を成功させることができました。この経験を通じ、政治に興味関心が持てない若者と、若者の方を向いていない今の政治について、また、自分たちの未来について考えてみた。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

「特別に」ではなく「誰にでも」

岐阜県 高山市立丹生川中学校 3年

平川 茶海衣

「あ、僕日本語話せますよ。」それまで戸惑っていたコンビニの店員さんに、安堵の表情が浮かぶ。僕は少しだけ感じる寂しい思いを隠しながら、店員さんに愛想笑いをし、レジを済ませる。

みなさん、お手元のプログラムに書いてある僕の名前、読めましたか？きっと読めなかったと思います。僕の名前は「平川さみい」。そう、僕はいわゆるハーフです。

「日本人なの？」と聞かれたり、珍しいものを見る視線を感じたりすることは、しょっちゅうあります。僕は、少々寂しい思いはしているものの、差別を受けているとまでは感じてはいません。しかし、今回こうした経験を生かし考えることで、差別問題の解決の糸口になるのではと思い、見つめ直しました。

外国人差別問題を考えるうえで、僕が気になっていたことの1つにヘイトスピーチがあります。調べると、何々人は強制送還しろ、殺せ、などショックな言葉が並んでいました。そうした差別に対しては、対策法が施行され、差別をする人には、厳正な対処をするなど、人権が守られるようになりました。過激な差別はこうして解消されていく方向にあります。

では、差別的な発言をしなければ差別はなくなるのでしょうか。僕は、それだけでは本当の意味での解決にはならないと考えています。法律で定められているから差別をしないという考えだけでは、明るい未来にはならないと思うのです。

今、日本国内には数多くの差別問題があります。男女差別や障がい者への差別、住んでいる地域や宗教に対する差別など数多く存在しています。そこで僕が主張したいことがあります。

それは、差別問題を根本的に解決していくには、差別を受けている人に特別に優しく接しようとするという考え方を持つのではなく、どんな人に対しても、困っている人には自然と手を差し伸べることができる社会を作っていくことこそが解決策であるということです。

ケガをしている人、重いものを運んでいる人、赤ちゃんを身ごもっている人、大切な人を亡くした人。世の中には差別を受けていなくても、手を差し伸べることによって助けられる人は数多くいます。そうした人たちに手を差し伸べられる思いやりを持つことによって、誰しもを大切に思うようになり、差別はなくなり、明るい未来が拓けると思うのです。

今、僕の通う丹生川中学校では、僕がハーフだからといって、からかうような人は、一人もいません。でもそれは僕を特別扱いしてできた雰囲気ではなく、僕を特別扱いしなかったからこそできた雰囲気だと思っています。全員が全員と挨拶を交わし、誰もが誰をも思いやれる。そんな空気だからこそ、安心して生活ができています。この会場もきっとそうです。席を譲り合ったり、足を動かして隣の方が移動しやすしたり、挨拶や会釈を交わしたりするなど、温かさや笑顔に包まれているはず。あなたの隣の方はきっと柔らかい表情のはずです。この雰囲気では差別が起きるはずはありません。笑顔が第1歩なのです。

僕には夢があります。それは、学校の教師になることです。人に対する思いやりや、心の痛みを教えられる教師になりたいと感じています。いじめをなくすことよりも、いじめがまず起こらない雰囲気を作る。そんな教室、そんな学校を作ることを目指して夢に向かっていきたいと思っています。

僕は、ハーフです。ハーフは「半分」という意味です。でも、僕は半分ではなく、2つの心が入った2倍だと信じています。人の悲しみや人の優しさを2倍感じられる人になりたいと思っています。茶海衣という名前は両親がつけてくれた大切な名前です。僕は、この名前に誇りを持ち、いつの日か「人の心の温かさによって、差別の2文字が消える社会」を目指し、その架け橋となれるよう笑顔で努力していきます。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

現在起きている世界の差別問題をより深く知り、その解消への取り組みや活動を学んでいきます。また、全ての差別の解消に向けて、「誰もが誰にでも行える、温かい心で手を差し伸べる活動の重要性」をあらゆる場面で訴えていきたいと考えています。私自身が行うはもちろん、これから出会う仲間と共に活動し、私たちの笑顔が他の方の笑顔を生み、またその笑顔がつながっていくような世界を創る人生を作り上げていきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

私があなたに伝えたいこと

滋賀県 大津市立瀬田北中学校 2年

佐藤 瑠乃

「死にたい。」この非常に重い意味を持つ言葉を、私達はあまりにも軽々しく口にします。物事がうまくいかない時、何の違和感もなく私も簡単につぶやいていました。けれど、ある出来事が、私を変えました。

幼馴染のお兄さんが亡くなったのです。とても優しい方で、笑顔の素敵な人でした。身近な人、私と年齢の変わらない若い人。その死は私を打ちのめしました。幼馴染の気持ちを考えると、「死にたい。」という言葉を手軽に使っていた自分を責めました。自分の愚かな行為を、心の底から恥じました。私にとって死は非常に遠い所にあり、未熟な私は本やテレビの中の出来事で、死を理解できていると思込んでいたのです。しかし、現実の死は可哀想や悲しいという分かりやすい感情ではなく、もっと胸苦しい異様な、体中が押し潰される程の重いものでした。死の圧倒的な大きさの前には、恐ろしさにただ震えるだけでした。けれど私は初めて、本当の意味で死を考え、生きるということを考え、今の等身大の自分で向き合おうと決心したのです。

中学生である私が死について考える際に、真っ先に思い浮かぶのはいじめです。いじめは心の殺人とも言われます。実際に自殺というあまりにも悲しい結末を招いています。日本は世界の中でも自殺が多く、しかも若年層による自殺が年々増加傾向にある現実を知り驚きました。このことを知り、私の心にある何かが湧き上がりました。

私は副生徒会長に立候補しました。以前の私にはありえないことでしたが、自分の殻を打ち破るため、勇気を振り絞り挑戦しました。その結果、生徒会に所属し、希望通り『いじめ防止プロジェクト』という活動ができました。この活動では、生徒会が脚本を書き、出演し、いじめについての映像を制作します。そして教室を回りながら、中学生である私達が、同じ中学生に授業を行い、いじめ撲滅の啓発活動に取り組むのです。全て生徒自身が活動します。大人から与えられるのを待つのではなく、中学生の私達自ら考え行動するのです。生徒会の仲間と取組んだこの活動は、私を大きく成長させ、勇気を持って踏み出す一歩の大切さを教えてくれました。いじめは駄目だと一方的に押しつけるのではなく、一緒に悩み、生命の大切さを考えることが、この生きる事の根源を揺さぶるいじめという大きな問題の、解決の糸口になると私は信じています。

私はもう二度と「死にたい。」という言葉は使いません。そして誰にも言ってほしくありません。けれど世界のどこかでは、今日も誰かがこの言葉をつぶやいているかもしれない。いじめ、パワハラ、孤独死、災害、戦争。私たちの周りは、たくさんの絶望で溢れ返っています。その絶対的な真つ暗闇の絶望の中では、どんなに強い人も無力かもしれない。希望という光が、一時的に見えなくなることも仕方ないかも知れない。この世界から自分という存在を消すことが、最良の選択だという誤った考えに至るかも知れない。しかし、それは絶対に違います。本当に死にたい人なんて、この世界に一人もいません。みんな本当は家族や友達や大好きな人と笑いながら、一緒に生きていたいと思っています。誰もが自分なりの人生を最後まで全うし、生き抜いてみたいはずです。

私は声をあげて言いたい。絶望の淵に今立とうとしている人に伝えたい。あなたに生きていてほしい。自分が生きていたいと思う強さと、同じくらい強い強さであなたに生きていてほしい。生きることに背を向けようとしている人に、傍にいるよと呼びかけたい。あなたは一人ではないと叫びたい。

私と同じ気持ちを持つ人が、この世の中から一人でも増えてほしいと、心から願い続けます。

この主張をどんな人に届けたいですか？

「あなたに生きていてほしい。」これはこの世界に生きる人、すべてに向けての言葉です。残念なことに絶望は私達のすぐ隣にあります。どんな人でも、いつ生きることに希望が見出せなくなってもおかしくはありません。私は作文を通して、この言葉を多くの人に伝えたいと思いました。命の尊さについて考えに考え抜いた未、心の奥底から絞り出して生まれた言葉です。そこには理由も理屈もありません。あなたは一人ではない。あなたは掛け替えのない大切な存在である。そう伝えたかったのです。「死なないで。」という言葉は、限界までがんばった人に、更にもっと頑張れと要求する言葉のように感じました。だから私は、私の気持ちをただ純粋にこの言葉に込めました。世界中の人々がこの思いを共有することができれば、人はこの世の苦しみや悲しみから救われることができると思います。私はいつまでも、この言葉を伝えたいと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

頑張っている

京都府 京都府立南陽高等学校附属中学校 1年

植月 理心

私は「障がい者」がどれだけ頑張っているのかをもっと知ってもらいたいです。

障がい者で頑張っている人の代表と言ったら、パラリンピックの選手や過去の人物だとヘレン・ケラーなどが思い浮かぶと思います。その人達の伝記や話を聞いた人々はすごいなと思うのではないのでしょうか？でも、その事が出来るようになるためには普通の人の何十倍の血のにじむような努力をしているのです。

私には小学4年生の障がい者の妹がいます。妹は赤ちゃんの頃病気になる、脳の半分を失ってしまいました。その時、お医者さんから「もう一生歩けないし、しゃべれない、車椅子生活になるだろう」と言われました。でも、驚くことに現在の妹は普通にしゃべれるし、歩くことも走ることで出来た。その上、字を書いたり、足し算・引き算もすることが出来ます。私はこの時初めて、当たり前の方が出来るということが、どれだけ素晴らしく嬉しいことなのかを知ることが出来ました。しかし、それらが出来るようになったのは、妹、そして母の努力があったからです。

母は妹の将来が普通の子とはあまりに異なってしまうと知った時、とても悲しかったそうです。しかし、周りの人々の支えもあり、妹を育てていこうと父と決心したそうです。

妹はしゃべり始めたり歩き始めたりするのは普通の子と同じくらい少し遅いくらいで、保育園ではみんなと仲良く遊ぶことが出来ました。しかし、小学校に入ってからが大変でした。支援級で勉強を習いはじめると普通の子達との差が目立ち始めたのです。保育園の頃は何とか出来ていたことも小学校に入り、やるのが難しくなったからだと思います。例えばひらがなを習うとき、普通なら1日に5文字ぐらいポンポンと覚えて行くことが出来ます。でも、妹の場合一つ一つの字を10ページに何回書いても、次の日には忘れてしまうということの繰り返しでした。でも、母は諦めずに妹に字を教え続けました。そのおかげもあり、妹は1年生でひらがなを覚え、2年生ではカタカナ、3年生では簡単な漢字を覚え始めることが出来たのです。私と母は妹が何か一つ出来るようになるまで心から一緒になって喜びました。そして、妹が出来ることが増えていったのにはもう一つ理由があります。それはプライドです。私には妹の他にも弟がいるのですが、これがよく出来た弟でひらがなやカタカナや漢字、足し算や引き算が4歳の頃にはほとんど出来ていたのです。妹は、弟に負けたくないという思いで一生懸命勉強したのかなと思います。

ところが、そんなある日、妹は「何で何回も教えているのにわかってくれないの？」と学校で友達から言われたそうです。確かに普通の人なら一度言ったら覚えていられることでも、妹は何十回言ってもわかってくれないことがよくあります。でも何回も言い続けていたら絶対にわかってくれます。きっとその友達は途中で言い続けることを諦め、イライラしてそんな風に言ってしまったのだと思います。妹は私に「何で私は出来ないの？」と聞いてきたので、正直ドキッとしました。「それは、病気のせいだよ」と言いたいのを我慢して、「一緒に出来るようになるまで練習しよっか！」と言い、練習に付き合っていました。結局、出来るようになるまで2週間かかりましたが、妹は最後まで諦めませんでした。そして、出来るようになったことを友達に伝えると喜んでくれたそうで、妹もとても嬉しそうでした。もちろん、私も嬉しかったです。

妹は出来ないことがたくさんあるのではなく、出来るようになるまでに時間がかかるだけです。そして、出来るようになるために長い時間努力し続けています。普通だったら諦めて投げ出してしまうようなことをやり続けるのです。これがどれだけすごいことか、私には分かります。それは、一番近くでその姿を見てきたからです。だから、皆さんにも、もし町で障がいのある人を見かけたら、あの人も頑張っているんだろうなと思ってもらいたいです。そして、障がいがあってもこんなに頑張っている人がいるのだから、私も負けずに頑張ろうと思ってもらいたいです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私には、小学4年生の障がい者の妹がいます。妹は障がいがあるために時間がかかることが数多くありますが、何事も諦めず常に最後までやり通す努力をしています。

私は、そんな妹の事が大好きで、とても尊敬しています。でも、すぐに結果の出ない妹は、どうしても冷たい目で見られてしまうこともあります。障がいがあっても前向きに人一倍の努力をして頑張っている人がいるんだということをたくさんの人に知ってもらいたくてこの作品を書きました。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞



タイムマシンなんていない

大阪府 泉大津市立東陽中学校 3年

島末 結加

「一度だけタイムマシンを使えるよ」と言われたら、どうしますか？過去か、未来へ行きますか？それとも、使いませんか？

過去に行きたいと思う人は、何か後悔していることをなくしたいと思っているのではないのでしょうか。「あのときに、こうしていれば」と。

例えば、学校のテストで「ささいなミスで十点落とした」とします。また、「友だちと誤解が生じて気まずい」ことがあったとします。「あのときに戻りたい、やり直したい」と私なら思います。タイムマシンがあれば、「戻りたい」と思う気持ちが大きくなるかもしれません。

過去に戻れば、あの織田信長に会うことができるかもしれません。そして「本能寺で明智光秀に裏切られるよ」と伝えることができるとします。すると織田信長は長生きして、全国を統一していたかもしれないし、「本能寺の変」ではなく「本能寺からの脱出」などと教科書に太字で掲載されたかもしれません。

このように、過去へ行くと人生が変わり、歴史が変わります。しかし、本当に歴史を変えてもよいのでしょうか。過去を変えて、簡単に歴史が変わったら困ります。それに、新たな世界が本当に幸せかどうか、わかりません。私は今の生活がとても幸せなので、それが失われるのは困ります。

でも、タイムマシンによって過去の過ちを正せるとしたら？五月、修学旅行で広島市の平和記念公園を訪ねました。美しく整備された緑豊かな都会の中に静寂がありました。この静寂が望むものは「平和」の二文字しかありません。たとえ歴史が変わっても、平和のために一回のタイムマシンを使うことは、大きな意味があるかもしれないと感じた瞬間でした。

次に、未来に行きたい理由について考えました。一番の理由は自分の将来の姿を見たいからではないのでしょうか。自分は、将来どんな仕事をしているのか、どんな人と結婚しているのか、幸せなのかなど、たくさんの不安を少しでも減らしたいからだと思います。

しかし私は、自分の未来を知りたくはありません。人生がおもしろくなるからです。当たると知っていてくじを引くより、当たってほしいと思ってくじを引く方が楽しいのと同じです。また、サプライズでプレゼントをもらうほうが、リクエストしたプレゼントをもらうより心が躍ります。結果を知らないほうが何事も楽しいし、「おもしろい」がたくさんあると思います。

私は、未来は変えられると考えています。栄養バランスのとれた食事をすれば健康につながります。逆に暴飲暴食をすれば病気になるリスクが高まります。自分の意志で、良い方向にも悪い方向にも変えられるのです。

最近、科学の進歩が著しく、将来タイムマシンが開発されるかもしれません。あるいは、未来では、もう完成しているかもしれません。では、なぜ、今の世界に未来の人がやって来ないのでしょうか？

それは、過去を変えるより未来を変えるほうがよいと気づいたからではないのでしょうか。過去の十点にこだわるより未来の一点に期待したいです。友だちとの誤解はわかり合えるまで話し合えばよいのです。後悔したときは、悩むのではなく、次に活かすことができるチャンスだと、気持ちを切り替えることが大切だと思います。後悔し、反省し、次に活かすことで、よりよい人生を送ることができるのではないのでしょうか。だから、タイムマシンがあっても私は使いません。過去を変えることはできませんが、未来は自分で変えることができるからです。

もう一度考えてみてください。「あなたは、タイムマシンを使いますか？」

この主張をどんな人に届けたいですか？

何か失敗をして後悔している人に届けたいです。私は、この主張を書いてから、失敗をしたときに後悔する時間が、以前より減りました。そして、「次に活かすぞ」と思えるようになり、気持ちが楽になりました。だから、後悔している人も楽になってほしいと思っています。

これは、自分の決意を示した主張でもあるので、自分が後悔したときにも思い出します。そして、一人でも多くの、後悔している人に前向きな気持ちになってほしいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

私達にできること

兵庫県 明石市立江井島中学校 3年

山本 千晴

私は先日沖縄へ修学旅行に行ってきました。1日目は平和学習ということで沖縄戦について学習しました。

旅行前、学校の授業で事前学習があったけれど、そこで語られることの全てに実感が持てませんでした。この戦いで何万人の方が亡くなった、とか重要な建物が失われた、とか言われても「すごく大変だったんだな」としか思いませんでした。

そして旅行当日。私はおそろしいものを目にしました。

まずは、「ガマ。」そこはとてももうす暗く足元が悪い、狭い空間でした。やっとの思いで進んでいくと中はある程度広く、40名程の人間が十分立てる広場のようになっていました。そこでガイドさんが語られたできごとを耳にして大きな衝撃を受けました。

負傷兵がガマにかつぎこまれると、手術は麻酔なしで行われていたそうです。死体にはうじ虫がわいています。もう助からないと判断された人は空気口も灯もない空間に閉じこめられます。ある部屋の天井はアメリカ軍の攻撃を受け黒くこげていました。ガマの中では私と同じくらいの年齢の子が手術中痛みに泣き叫ぶ人を必死に押さえつけ、死体の処理をし、「お国のために」と死ぬのです。それがほんの70年ちょっと前のできごとなのです。

今でこそこんな平和な国になっていますがほんの70年前はこんな残酷なことがこの日本にもあったのです。それを考えると、とても怖くなったし、悲しくなりました。

次に「平和の礎。」それを目にした時あまりの数の多さに驚いてしまいました。それでもまだ名前は毎年つけたされていくそうです。そこで私は失われた何万人もの命の重みを実感しました。

またそこには日本人だけでなく、アメリカ人をはじめ外国の方の名前もありました。

今まで私は「日本人にこんなむごいことをするなんて、当時のアメリカはなんて酷いんだ」と思っていました。しかし、そうではないことに気づきました。

辛い思いをしたのは日本人だけではないのです。全然知らない土地で、知らない人に殺されるのです。命乞いをする人を殺さなければならなかったのです。夢、希望を捨て、愛する人を残して死ぬのです。

とり残された愛する家族や恋人はどうなるのでしょうか。

戦争というのは本当に怖いものです。失うばかりで残るものは人を亡くした悲しみや何もしてやれなかった悔しさ、みじめさです。

それでは、今を生きる私達にできることとは何でしょうか。

私は、愛する者のために最前線で戦った人の思いの全てを分かち合うことができません。ただ亡くなった人達が望む未来を叶えることはできます。

今、私達がくりかえす日常の中で周りを傷つけ悲しい思いをさせていることはないでしょうか。戦争も同じです。自分中心の考えが日常生活だけでなく世界の平和をも壊していることに気づかなければいけません。

平和は願うだけでは実現しません。私達が後世に戦争のおそろしさを語り継ぎ、平和にむけて強い意志を持つのです。

今も世界のどこかで、少年少女が武器を手に戦い、血を流しています。戦争は今も起こっています。私達は戦争を過去のものとしてとらえるのではなく、今現在起こっていること、としてとらえる必要があります。

そして私達は世界中の人達が心の底から笑顔になれる、そんな世の中を作らなければならない。これが今を生きる私達にできることです。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

戦争を知らない若い人に届けたい。戦争によってたくさんの大切なものを失った。しかし、それを知らない私達は大切なものを失った時の悲しみが分からない。

今、戦争のない国で安心して暮らせるのが当たり前だと思っている。でも私たちの知らないどこかではまだ戦争に苦しんでいる人がいる。必死に生きている。その事実をみんなに知ってもらい、改めて戦争のことについて考えてもらいたい。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

今、社会に必要なもの

和歌山県 湯浅町立湯浅中学校 2年

宮本 崇行

やっと気付いた。それは今まで、知っているようでずっと知らなかったものだった。気付かせてくれたのは、中学校で出会った、ある先生だった――。

すべてのはじまりは、中学校に入学して初めての「国語」の授業だった。先生が入って来たかと思うと、いきなり面白いことを言って緊張感をやわらげてくれた。自己紹介も盛り上がり、授業も後半にさしかかった頃、先生がこう切り出した。

「みんなは、何で国語の勉強をするか知ってる？」

知っている人は手を挙げるよう、先生が促したが、僕の記憶では、自分を含めて誰も手を挙げなかったと思う。先生は答えを告げた。

「まず、生活の中で言葉を使う必要があるから。そして、もう一つ先生が大事だと思っていることは、『生きる意味』を見つけるため、ということや。」

一つ目は理解できた。でも、二つ目は、正直よく分からなかった。なぜ、国語の授業で生きる意味が分かるのか。卒業するまでに、頑張っ探し出そう。そう、心に誓った。

こうして、ワクワク感あふれる国語の授業が始まった。幸運にも、一年を通して、国語に関する経験を多く積むことができた。中でも、僕が参加した二つの大会では、「美しい言葉」に深くふれることができた。

一つ目の大会は、「少年の主張」の県大会だった。その前に行われた郡の大会と比べて、一つ大きな違いがあった。それは、「使っている言葉のレベル」だった。日本語は不思議なことに、言葉が一つ変わるだけで強弱が変わる。県大会の発表者が発する言葉は、力強く、説得力のあるものばかりだった。さらに、表現に関する工夫もみられた。それは、「比喩」とよばれるものだ。その時その時の状況を、ありとあらゆることに例え、聞き手に想像させていた。僕は圧倒された。もっと僕も、聞き手をひきつけられるようになりたい。そのために、国語をしっかり勉強しなくては。僕の心に、国語の火が点いた瞬間だった。

二つ目の大会は、ビブリオバトルとよばれる、ブックトークの全国大会だ。「全国」というレベルの高さもあり、僕は初戦で負けてしまった。しかし、ここでも一つ、気付きがあった。

僕はビブリオバトルで、たくさんの意見や考えを聞いた。人それぞれ、視点も違うし、考え方も違う。そういった価値観を認め合い、上手くコミュニケーションを取ることが大切である、ということを知った。もしかすると、先生が言っていた、国語で見つかる「生きる意味」が、まさにそれなのかも知れない。少しずつ、「生きる意味」に近づいているような気がした。

今、社会に必要なもの。それは「国語力」だと僕は思う。と言うのも、人とのコミュニケーションや、人前での発表などといった、日常生活の「基本」となっているからだ。それを、二つの大会をはじめ、一年間の様々な経験を通して知ることができた。この体験談を、一人でも多くの人に知ってもらいたいと思っている。

また、今を生きる僕達にとって、もう一つ忘れてはならないものがある。それは近年、新たなコミュニケーションの手段として普及している「SNS」だ。「SNS」は、いつでもどこでも、簡単に言葉を発することができ、便利である。その反面、とっさに思い浮かんだ言葉が無責任に送り、相手を傷つけたり、ひどくなると、いじめにつながったりする可能性も生まれる。近年、「社会問題」としても目を向けられている、「SNS」。

だからこそ、言葉一つ一つに重きを置き、質の高いコミュニケーションを取る必要がある。そのためにも、まずは「言葉」そして、「国語力」の重要性を知り、これからの「生き方」について、もう一度考えてみてはいかがだろうか。

この主張をどんな人に届けたいですか？

中高生にとって、「国語」は苦手になりがちな教科だと思います。そんな方には、この主張をきっかけに、言葉というものがいかに大切であるかを知って頂きたいです。さらに、最近は世代を問わず、SNSを利用する人が増えています。その中で、軽はずみな気持ちで送った言葉が相手を傷つけることもあります。SNS利用者には、言葉の「重み」を感じて頂きたいです。最後に、「言葉」について深く考えるきっかけをくれた国語の先生への「恩」の気持ちを、この主張を通して届けられればと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

部活動と私の成長

鳥取県 米子市立福米中学校 3年

川邊 幸

みなさんにとって部活動は、どんな場ですか。あるいは、どんな場でしたか。

私にとって部活動は、スポーツをする場であり、仲間と繋がる場であり、集団生活や社会のルールを勉強する場でした。

私は、中学一年生の頃、部活体験に行つてすごく楽しかったバレーボール部に入部しました。入部してすぐにアタックのステップでもなく、サーブの打ち方でもなくあいさつを教えられました。体育館に入る・出る時、コートに入る・出る時、先生の話が始まる・終わる時に毎回、「お願いします。」と「ありがとうございました。」を必ず言うように教わりました。使わせてもらう体育館やコート、教えて下さる先生方へ礼儀なんだと私はあとで分かりました。

私たちのチームは、代々バレーボール経験者は部員の中で本当にわずかしきありません。

当然、他のチームに比べれば弱かったし、勝った数より負けた数の方が多かったです。それでも、練習に次ぐ練習で私たちは少しずつ力をつけていきました。

先輩方の最後の試合では、プレーしている人も応援している人も必死で声をだしがんばりました。しかし、残念ながら、一回戦突破という目標を達成することはできませんでした。試合の後、全員が悔しさのあまり泣きました。一ヶ月前に入ってきた一年生でさえも泣いていて、私はこの時、「一年生も二年生も三年生も一体となって試合をしていたから、こんなに涙がでるんだ。」と思いました。私たちは弱かったけれど試合や一つの目標に向かってみんなで進んでいくことで確かに繋がることのできたのだと思います。

三年生が引退し、私は副キャプテンになり、一年生のリーダーやキャプテンと協力して、声を全員がださなかったらその日は部活をやめるなどの決まりをつくり、改革をしていきました。その改革の中で前の代と特に変わったことは、あいさつ日本一、県大会出場、全員バレー、この三つを明確な目標にしたことです。そうして実践していくうちに、福米中バレーボール部も私達自身も技術面や人間性の面で大きく変わっていきました。

新しいチームになってちょうど一年がたった六月、私たちにとって負ければ引退の試合がとうとうやってきました。一日目は、順調に勝ちぬくことができましたが、二日目の一回戦の相手が県大会優勝常連校だったこともあり、敗れてしまいました。その後の敗者復活戦でも敗れてしまい、涙を流す結果となりました。

しかし、私には、悔いはありません。なぜなら、この二年と四ヶ月のバレーボール部での活動を通して、体の成長やバレーボール技術の成長以外に心の成長もできたからです。そして、心の成長にともなって生活態度が良い方向へと変わっていきました。具体的にいうと、学校ですれ違った人にあいさつをすることや何事にも感謝して取り組むことなどの当たり前前の事が当たり前になるようになりました。

部活動は、一人でするものではありません。人が集まれば、もちろん対立もうまれます。ですが、人と関わり、繋がることで、自分自身も変われ、他人に良い影響を与えることもできます。人と何かをすることは、とても面白い事だと私は思います。

最後に、私は福米中バレーボール部に入って本当に良かったと心からそう思います。そして中学生のみなさんに伝えたいです。運動部、文化部に関係なく、引退した後、心からこの部活動でこの仲間と良かった、成長した、仲間と繋がれたと思えるような部活動にしていって下さい。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は部活動を通して、人と関わり、つながることの喜びや、生きていくうえで絶対に必要になってくる相手に対する礼儀を学び、人間的にも大きく成長できました。そして、人はいくらでも成長できることを知りました。だから、ここから大きく成長し、躍進していけるような人生を作り上げて行きたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

水害から学んだこと

岡山県 岡山市立吉備中学校 3年

稲田 知陽

「今までに経験したことのない強い雨が降るおそれがあります。最大限の注意をしてください。」

二〇一八年七月六日から降り始めた雨は、留まるところを知らず、日付が変わってますますその勢いを強くしました。「家のまわりが、海になっとる！」

七月七日の早朝、目を覚ました私は、変わり果てた光景を見て、現実のこととは思えませんでした。茶色の濁った水が、見慣れた景色を飲み込んでいたのです。

「あっ、ボート！」

私はびっくりしました。家の前の道路を横切り進んでいくのは……車ではなく、なんと川舟、そしてゴムボートです。その時初めて、今までテレビの向こう側でしかなかった「災害」のただ中に、自分がいることを実感しました。

実は、私はかねてから自分の住んでいる地域を流れる川について興味をもっていました。そこで昨年、「わが町川新聞」と名付けた新聞を作成しました。「笹ヶ瀬川の防災を考える」、これは私が小学校二年生の夏、台風被害で洪水に遭った体験を振り返り、防災意識を高めようと呼び掛けた記事です。「これからも水害を防ぐことができるよう、私達一人一人がいざというときの備えをしておくことが大切だ。」これがその記事の締めくくりです。まさか、わずか七か月後に、想像を絶する災害が現実になるとは。甘かった、もっと注意を呼び掛ければよかった、もっとできることがあったのでは、と悔やまれてなりません。

今回の災害から、私は二つのことを学びました。

一つ目は「助け合い」についてです。高齢者の方の避難を手伝うとき、冠水して車が立ち往生したとき、災害ごみの片付けをするとき、ごく自然に声を掛け合い、周囲の人と助け合うことができました。さらに、夏休みに入り、自分の家の片付けが一段落した後、私は真備町にボランティアに行きました。そこで、長野県松本市から参加された方とチームを組みました。使えなくなったソファやタンスを運び出したり、床の泥をきれいに拭いたり、一生懸命働く中、私は気づきました。互いを思いやり助け合う「ネットワーク」は、地域を越えて結べるのだということに。人々のつながりが希薄になったと言われる現代ですが、「わずらわしい」「めんどくさい」と思わず、まずは日頃から挨拶を交わしたり、困ったときに相談したりする習慣をつけていきましょう。この「助け合い」のネットワークを活用することが、今後の災害の予防につながっていくと思うのです。

二つ目は、「治水」についてです。例えばごみを用水路に捨てる、溝掃除をおろそかにする、そういった行動の積み重ねも洪水の引き金となるのです。町中に住む人も、人事だと思わないでください。水をよく吸収する水田と違い、アスファルトやコンクリートの上に降った雨は、そのまま流出してしまいます。水路の確保をしっかりとしておくことが、低い土地に住む人の生活を守ることにつながるかもしれないのです。

ボランティアに伺った川辺地区の方は、こうおっしゃっていました。

「まだまだ先は見えん。息の長い支援が必要じゃ。」

私も、今回の体験から学んだことを生かし、これからもふるさと再建のために努力していきたいと思います。

がんばろう、岡山！

この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を日本全国全ての人々に届けたいです。今年の状況を見ると、今や安全地帯に留まれる人は誰一人いないとさえ言えます。私達一人一人が当事者意識を持って暮らしていく必要があるのだということを強く訴えたいです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞



手話は言葉

広島県 東広島市立八本松中学校 3年

大森 葉和

「よろしくお願いします」
 これは私が初めて覚えた手話です。母は少し手話ができます。その母に教わったのです。常々母は「手話は言葉なのよ。」と言っていました。その意味を深く考えたことはありませんでした。中学1年の春休み、私は母に誘われて手話サークルに行きました。訳も分からず不安を感じながら参加したサークルの、その日の内容は料理でした。エプロンをつけていると、誰かが私の肩をたたきました。振り返ると、50代くらいの優しいような女性がにこにこして、「こんにちは。」と手話をしながら言われたので、私は、「あれ？」と思いました。手話サークルには耳の不自由な人ばかりいるのだと思っていたからです。誰でも自由に参加できるのです。「今日は一緒にがんばろうね。」と手話で言われ、「よろしくお願いします。」と手話で返しました。よく見ると、この女性の他にも多くのボランティアの方が携わっているのが分かりました。その後、料理を作りました。メニューは、レモンうどんとカボチャのケーキです。先ほどの女性と私と母と六十代くらいの男性と若い女性が同じ班でした。見た目には全然わからなかったのですが、60代くらいの男性と若い女性は耳が不自由でした。若い女性が私に手話をしてきました。「あなたは、中学生？」母が通訳してくれました。「何部に入っているの？」と女性が手話で尋ねました。私は筆で字を書く場面をイメージして、「書道部です。」と小さくジェスチャーしました。なんだかとても恥ずかしかったのです。しかしジェスチャーが小さく女性には伝わりませんでした。そこで口を大きく開けて「書道部」と言うと、その口の動きを見て理解してくれました。すると今度はその女性が『書道部』はこうやって伝えるんだよ。」と手話でお手本を見せてくれました。私はその手の動きに目を奪われました。力強くてなめらかでそれはまさしく言葉でした。そのとき私は、母の言った「手話は言葉なのよ」ということを理解したのです。私は「書道部」という手話をいろいろな人に伝えているうちに楽しくなってきました。手話で思いが伝わるのが楽しいのです。そこで私は同じ班のあの男性に冷蔵庫から取り出すものを「これでいいですか。」と身振り手振りで尋ねてみました。すると「それでいいよ。」と笑顔と手話で応えてくれました。この手の動きはとてもきりっとしていて、優しい笑顔がすてきでした。この男性の手話は、先ほどの女性の手話とはまた違う動きでした。私たちが話す言葉が人によって違うように、手話の動きにもその人独自の個性があるのだと分かりました。帰りの車で今日のことを母に話すと、母は「手話は、手と顔で伝える言葉なのよ。」と教えてくれました。母の言葉に納得するとともに、自分の世界が広がった気がしました。手話をするということは手話という言葉で会話することなのです。私はふと、母はなぜ手話をしているのかと思い尋ねました。すると母は、「身近に耳が不自由な人がいてね。手話ができたら便利だし、福祉の仕事にも役立つと思ったんよ。それに手話を知っていると、私たちの生活にも役立つんよ。」と答えました。実際私の家では、簡単な手話を使って会話をしたりします。「トイレに行こう。」「次はどうする？」などです。手話はうるさい場所でも会話できるからです。また、身振り手振りを使うので小さい子にも分かりやすく説明できます。手話について関心をもち、手話を体験できる機会がもっとあれば通じ合える楽しさが分かるのだと思います。私はもっと手話を覚えて、会話する喜びを味わいたいと思います。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

この作品は、母と手話サークルにさんかしたことがきっかけで生まれました。もしあの日母に誘われていなかったらこんなに素敵な体験はできなかったし、手話のすばらしさを教えてくださった方々にも出逢えなかっただろうと思います。私の主張を聞いてくださった皆さんが私の思いに共感し、手話に関心を持ってくださればうれしいです。そして手話をもっと広くいろいろな人に使われることを願っています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

私らしく、希望を持って

徳島県 吉野川市立山川中学校 2年

山内 悠希

「悠希へ、二〇〇四年九月三十日、三四〇四グラムで、あなたはこの世に生を受けました。ママにとっては初めての赤ちゃんでした。元気に生まれてきたあなたを見て、嬉しくて涙が止まりませんでした。お父さんと二人で、『悠希』と名付けました。遠く長くはらかな希望という意味です。あなたは家族にとって大きな希望でした。」

これは、「いのち」について学習した時に、母からもらった手紙の冒頭です。思いがけない手紙をもらい、読み始めたときに、胸が熱くなって涙があふれてきました。思えば、母はいつも私のそばにいてくれました。苦い思い出ですが、少し前の私は、上手く付き合えない友だちにいらだち、不満を持っていました。そして、よく考えずに間違ったSNSの使い方をして、その友だちを傷つけてしまったのです。母は、私が同じ間違いを繰り返さないように寄りそい、励まし、支えてくれました。私は深く反省して、人と温かいつながりをつくれるように成長していこうと強く心に誓いました。

今、私の毎日はとても充実しています。勉強や部活動のほか、どんなことにも前向きに取り組む姿勢を心がけています。そして、憧れの人もいます。それは母です。母は中国で生まれ育ちました。普段は、何かと口うるさくて厳しいけれど、誰よりも私を心配し、愛情深く見守ってくれています。また、何事にも積極的で、中国語と日本語の他にも英語を話すことができます。自らの意志で、勉強して習得したそうです。そんな前向きな母は、私の自慢です。私も、今年の、文化祭で英語スピーチに挑戦することにしました。将来は中国語にも挑戦したいです。

母からもらった「いのちの手紙」の結びにはこう書かれていました。

「今ではすっかり大きくなって自分で様々なことが判断できる年齢になってきました。それは悠希が一步步大人に近づいている証です。大人になるということは、責任も必要です。だから、あなたに厳しく叱ることもあります。それはあなたを誰よりも思っているからです。悠希は一人ではありません。落ち込むとき、悩むときもあります。そんな時はいつでも相談しなさい。そして、自分を大切にあなたの人生を生き抜いてください。それが、お父さんとお母さんの一番望むことだから。あなたの母より」

この手紙は私の一生の宝物です。私は感謝の気持ちを込めて、手紙を書きました。

「お母さんへ、手紙ありがとう。手紙を読みながら、ずっと泣いていました。私は本当に不器用で、勉強も運動も思うようにできません。すぐにぐずるところなど、いつも迷惑ばかりかけています。お母さんにたくさん叱られて、私が言いすぎることもありました。自分の不器用さに悩み、落ち込み、涙を流す日もありました。言葉に出したことはないけど、お母さんには、本当に感謝しています。お母さんが頑張っている姿を、私はずっと見続けています。こんなあなたよりない私ですが、これからも私のことを見守っててください。お母さんの思うような子にはなれないかもしれないけど、私らしく、希望をもって努力し、頑張ります。

産んでくれてありがとう。『悠希』という名前をつけてくれてありがとう。大切に育ててくれてありがとう。全てのことありがとうございます。大好きです。悠希より」

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

この作品のタイトルの通り私らしい希望を持った人生を作り上げたいです。そしてそれは両親が私に授けてくれた名前にごめられた思いです。希望を持つということは、何事もやってみる、そして最後までやり抜くことだと考えています。やり抜けば結果がでます。それはときには私にとって悪い結果かもしれませんが、決してマイナスにはならないと信じているからです。常に前向きにとらえ、悔いのない人生を送り、家族の笑顔があふれる毎日を築きたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

対話から生まれること

香川県 三豊市立高瀬中学校 3年

林 さくら

「さくら、お母さん、ボランティアを始めようと思う。」

ある日の朝、突然、母が言いました。それも目を輝かせながら。

今思えば、あのときの母の言葉には、私には想像もできないくらいの、強い決意が込められていたのです。

「お母さん、『ブリッチの会』を立ち上げようと思ってるんよ。」

休日を利用して、熱心に勉強している母の姿を見ていた私は、「もっと話を聞きたい」そう思いました。

「さくらもこないだ、職場体験でデイサービスのお手伝いしたやろ。たくさんのお年寄りと接してみて、どんなかった？楽しかった？」

と母は続けました。

本当のことを言うと、仕事はとても大変でした。おじいちゃん、おばあちゃんのお世話は、少しの時間も気を抜くことができません。圧倒されることの連続で、私は「楽しい」と思うことができませんでした。母はそんな私に気づいたのか、こんなことを話し出しました。

「私はね、お年寄りの話し相手になってあげたいんよ。ただ話をするだけでいいんよ。それだけのことで救われる人たちがたくさんいると思うんよ。一人暮らしで、一日中誰とも話をしないお年寄りが増えていってニュース、見たことない？やっぱり『対話』が大事なんよ。人間は一人では生きていけないの。誰かを助けたり、誰かに助けられたりして、生きていくんよ。さくらもそうやろ？学校でも友達に助けてもらうこと、たくさんあるやろ。そこには必ず、たくさんの会話、つまり、対話が生まれているんやで。」

(確かにそうだ。) 私は心から納得できました。

思い返せば、私もたくさんの友達に助けられてきました。2年前、高松の学校から、高瀬中学校へ転校してきました。何も知らない、分からない場所での生活に、不安と、恐怖と心細さを感じていました。知らない場所、知らない人たちの中で、どうやって過ごしていこう、と何度も思い、学校へ行くのが憂うつで、心が苦しくなりました。そんな私を救ってくれたのは、友達やクラスメイトからの、何気ない声かけでした。

「好きな教科は何？」

「向こうはどんな学校だった？」

そんな他愛もない会話に、私は救われました。心の中にあった不安な気持ちが、どんどん小さくなっていったことを思い出しました。そして、人を笑顔にするためには、誰かとの対話が大切なのだと改めて気づきました。

私は、暗い表情をしている友だちに、必ず声をかけるようにしています。以前から、あたり前にやっていたことですが、母との対話をきっかけに、さらに意識して声をかけるようになりました。

世の中には、話をするだけで、救われる命があるかもしれません。私の声かけには、誰かを笑顔にする力があるのです。勇気を出して話をする、誰かに声をかけてみることで、誰かの心にそっと触れたり、不安をなくしたりできるかもしれません。

「ブリッチ」それは、人と人との心をつなぐ架け橋です。『対話』で誰かを支えたい。そんな思いを胸に、母は現在、友人4名とボランティア活動を行っています。私もいつか、母と一緒に、一人でも多くの人たちを支え、助けていきたいです。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

社会に取り残され寂しい思いをいっている全ての人達に届けたいです。それは、私たち若者だけではありません。母の活動風景にもありますように、核家族化が進み、家族からも置き去りにされた高齢者の方々がたくさんいるのが現状です。そういった方たちの手を握り、共に歩いていきたい。また、何気ない対話から笑顔が生まれ、それぞれが架け橋となって、社会に広まってほしい。全ての方に明るい未来が訪れますように。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

あの日を忘れない

愛媛県 今治市立西中学校 2年

福島 花菜

何年の月日が流れても、毎年必ず涙を流してしまう日があります。三月十一日十四時四十六分。私はこの日を、決して忘れることはありません。

私の祖母は、叔父一家とともに宮城県塩釜市に住んでいます。ここは、東日本大震災で大きな被害を受けた地域です。当時私は小学校一年生でしたが、あの日の両親の緊迫した表情を、今でもはっきり覚えています。

やっと連絡が取れて、祖父母達の無事が確認できた矢先、私たちはテレビから流れてくる映像に言葉を失いました。押し寄せてきた津波が、家や車を次々とのみこんでいくのです。今、この瞬間、たくさんの人の命がのまれている、そう思うと、画面から「助けて！」という悲鳴が聞こえてくるようで、私はあふれる涙を止めることができませんでした。

あの日、強い揺れを感じた祖母は、とても立ち上がることができなかったそうです。地震が起きると、物は「落ちる」のではなく、「飛んでくる」ということを、私は祖母の話で初めて知りました。ちょうどその時、叔父は仕事で配達に出ており、家には足腰の弱い曾祖母、癌と闘病中で寝たきりの祖父、そして祖母の三人しかいませんでした。地震の後には津波が来る。逃げなければ、と思いつつ、祖母はどうしていいかわからず途方に暮れていたそうです。そのとき、「大丈夫ですか？」と駆け込んできたのは、近所の人たちでした。歩けない祖父と曾祖母をおんぶし、祖母の手を引いて、近くの高台にある神社に連れて行ってくれたのです。私も夏休みに何度も遊びに行ったことのある神社は、いったい何段あるんだと思うほどの、きつい急な石段の先にあります。一人で登ってもすぐに息の切れるあの石段を、自分の荷物も捨てても、他人である祖父たちを背負って登ってくれた近所の人たちに、私はいくら感謝しても、し足りることはありません。

だれもが自分が逃げることで精いっぱいだったはずのあの日、困っている人のところに、真っ先に駆けつけてくれた近所の人たち。そのおかげで救われた祖父母の命。かけがえのない家族を守ってくれたのは、日頃から支え合い、助け合ってきた「地域の力」、「共助の力」だったこと。東北に住む祖母からの学びを、愛媛に暮らす私たちが生かしていく、それが「命をつなぐ」ということだと思のです。

七年前、突然断ち切られた命の無念を思い、胸がつぶれそうな痛みで涙を流すしかなかった小学生の私は、泣くだけではいけないんだ、自分の命を守り、人の命も助けられる人間になるんだ、と決意をした中学生になりました。大切な人たちを守る力を身に付けるために、私は、自分にできる小さな行動を積み重ねています。地域では、近所の人たちと笑顔で挨拶をしています。今治ロータリークラブという社会奉仕団体に所属し、異世代の人たちとともに地域清浄やボランティア活動に取り組んでいます。また、数年内に起きるといわれている南海トラフ大地震に備え、家族で話し合っ、避難場所の確認やシュミュレーションをしています。

今の穏やかで安全な生活は、決してあたりまえのことではありません。自然の猛威の前で、一人の人間はあまりに無力です。しかし、防災について真剣に学び、地域とつながり、助け合うことで、私たちは大きな力を得ることができます。「あの日を忘れない」という思いを、命をつなぐ判断力や行動力につなげるために、私はこれからも努力し続けていきます。

この主張をどんな人に届けたいですか？

東日本大震災—この災害によって私たちは大切なものを失うとともに大きな悲しみをあたえられました。けれど時間がたてばその悲しみさえ人はいつの間にか忘れていってしまいます。でもあの日を私たちは決して忘れてはいけないのです。東日本大震災で命をおとした人、被害にあった人。西日本豪雨や北海道地震で被害にあった人。そしてかけがえのない家族を助けてくれた近所の人、家族、そしてなにより祖母に私の思いを私の声で届けたいと思っています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

より良い未来へ

高知県 佐川町立佐川中学校 2年

郷田 聖奈

『障がい者』この言葉を聞いて、みなさんはどのような人を思い浮かべ、どのような気持ちになりますか。障がい者とは、体や精神に何らかのハンディキャップがある人のことを表し、「身体障がい」「知的障がい」「精神障がい」「発達障がい」に大別されています。障がい者にはハンディキャップがあり、そのため健常者には普通にできることが、障がい者にとっては難しく、困難なこともあります。しかし、それを必死に乗り越えようとしている姿を見ると、『えらいな』『大変だな』と思ったりします。けれど障がい者にとってそれは、普通のことなのではないでしょうか。そう考えると、私達は障がい者を少し下に見ているのかもしれない。自分より大変な人がいる、と。けれども、障がいがある人も、皆同じ人間であり、平等なのです。

障がい者の方も、一人の人間として勉強をしたり、楽しい話をしたり、働いたりすることのできる権利があります。日本国憲法第二十七条の条文では、

《すべて国民は、勤労の権利を有し、義務を負う》

という文があります。この一文には、国民は働ける権利があると同時に、その義務を受けると書いてあります。すべての国民ですから健常者も障がい者もありません。皆が、働く権利と同じく、義務を負っているのです。障がいがあることによってその義務を容易に果たせないのであれば、果たせる環境や仕組みを作ればいいのです。

みなさん、「虹色のチョーク」を知っていますか。虹色のチョークを作っている工場で働く社員八十三名のうち、およそ社員全体の七割にあたる六十三名もの従業員が知的障がい者であり、そのうちの半数近くは重度の障がいがある人だそうです。そこでは、一人一人の能力に合った仕事を作ることで、彼らが製造ラインの主戦力となり、彼らの作るチョークは業界シェア一位を誇っています。この事実を知った時、私は驚き、関心を持ちました。障がいがある人も、健常者も、それぞれ輝くことのできる環境がある、ということに。彼らは、障がいがあるからといって、できないことばかりではなく、健常者には持ち得ない能力も持っています。それは手先の器用さかもしれませんし、集中力かもしれません。

では、障がいとは一体何なのでしょう。この工場で働いている彼らの姿は、彼らが労働の重要な担い手であり、経営を支える存在であることを示しています。障がい者という区別は必要ないのではないか、と私には思えてきます。

けれど、今の世の中はどうでしょうか。障がい者に対する世間的な風あたりの強さがあつたり、差別や偏見などの人権問題があつたりする、というのが現実です。しかし、どんな人であれ、人として生まれてきた以上、分け隔てなく人権は存在します。この、一人一人に分け与えられている人権を誰かが奪うということは、決して許されることではないのです。

今の世の中、私達にできることは、障がい者のことを理解し、社会的な障がいという壁によって、継続的に日常生活や社会生活に相当な制限を受けている人に対し、妨げとなっている障壁を取り除いていくことです。私達一人一人が目や目を背けず、「何をすべきか・何ができるか」を当事者に寄り添って真剣に考え実行すること、それがより良い未来への一歩だと私は思います。

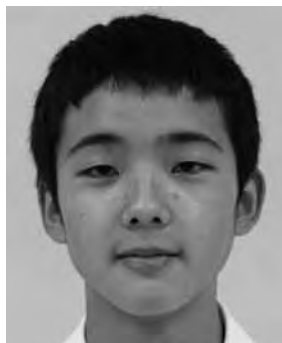
この機会に、みなさんもより良い未来にするため、真摯に向き合ってみてはいかがでしょうか。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

これから、私達が担う「未来」をより良くするために、今の私達に「何ができるのか？」と真剣に考えて実行していきたいと思います。

「誰に対しても平等に接していく」ことなど私達にできることはたくさんあるのですから。

この私達の小さな一歩が、より良い未来へとつながっていくはず。この私の弁論を通して、みなさんにも、これからの未来について考えてもらえるきっかけになってくださったら幸いです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

かけがえのない生命

福岡県 柳川市柳南中学校 3年

大村 朋生

「あなたがたのお腹の赤ちゃんには障害があるかもしれません。」そう告げられたとき、あなたならどうしますか。

「出生前診断」この出生前診断とは、ダウン症などの遺伝性疾患の有無や生まれつき体に生じる奇形などの有無を出生前にみつけるために行うものです。この検査によって、何らかの問題があると確定したとき、人工妊娠中絶を選んだ人の割合が、九割以上だそうです。この結果に、生まれてくるはずだった小さな命のことを考え、たいへん悲しい思いをもちました。なぜなら、私は、かけがえのない命の重さと喜びを知っているからです。

今年七歳になる私の妹は、この出生前診断で、ダウン症の疑いがあると診断されました。それを聞いた父と母は、最初、ダウン症の子どもを育てていく決心がつかなかったと言います。母は助産師なので、ダウン症に色々な合併症が伴うことをよく知っていました。実際、様々な合併症の子どもたちを見てきた母は、「自分のお腹の赤ちゃんもそうかもしれない。」と想像したそうです。そして、母が何より心配したのは、すでに八歳だった私と、二つ下の妹のことでした。「ダウン症の子どもが生まれたら、自分が仕事を辞めて、昼夜を問わず、子どもにつききりの生活になる。そうすると、兄姉にさびしい思いをさせてしまうかもしれない。」そんな考えが、母の頭をよぎったそうです。

しかし、母は、自分のお腹に宿っている小さな命、その命を奪うことはできない、と出産することを決めました。両親は、話し合いを重ね、「これからの子育てに何が起こるか分からない。それでも、お腹の赤ちゃん子どもたちを一生懸命育てていこう。」と、決心したのです。

そうして、その八か月後、妹は大きな産声を上げて生まれてきました。その後、詳しく検査した結果、心臓の壁に穴があいていることが分かりました。ダウン症による合併症です。この心臓の穴は六歳のとき九時間の大手術によってふさがれました。

それから妹は、ゆっくりながらも順調に成長しました。そして、今年、小学校に入学し、特別支援学級で勉強しています。妹は学校から帰ってくると、一日のできごとをうれしそうに話してくれます。妹は一生懸命話そうとしていますが、まだうまくしゃべることができないので、家族みんなでクイズのような言葉を解釈します。また、歌や音楽に合わせて踊ったりしてみせるので、みんなが笑顔になります。このように、妹は家族の人気者です。成長は遅いのですが、その分、何かが出来たときの喜びはとても大きく、二歳半で初めて歩いたときや、自分でスプーンを使って食べることができるようになったときなど、家族で拍手をして喜びました。

健常な子どもだとあたりまえにできるようなことでも、療育で訓練をして時間をかけてできるようになっていきます。その成長を家族で見守る喜びを感じています。だから、いろいろな不安を感じながらも、妹を産む決断をしてくれた両親にとっても感謝しています。妹がいない生活は考えられません。

たしかに、出産前診断の結果から、子どもの将来が不安になったり、障害を受け入れる自信がなかったり、経済的なことなど、その人の置かれている状況の違いを考えると、出産をあきらめる人がいるのもうなずけます。

しかし、私が妹と一緒に生活をする中で、命について考えること。それは、命はこの世にたった一つしかないものであり、健常な子どもも障害をもった子どもも、何ら変わりのない、かけがえのない命であるということです。私たち家族のもとに生まれてきてくれた妹の存在は、私たち家族に安らぎや幸せをもたらしてくれます。そのおかげで命のつながりや大切さを実感しています。

だから私はこれからも、妹と一緒に過ごせる幸せを感じながら、かけがえのない命のつながりを大切に、自分の人生を精一杯生きていきます。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

以前、出生前診断が話題になったことがありました。その時、インターネットで、妊娠中の検査で、赤ちゃんに何らかの問題があると確定したとき、人工妊娠中絶を選んだ人の割合が9割以上にのぼることを知りました。ダウン症の妹を持つ私はこのことを知り、とても悲しくなりました。そこで、障害について、命の大切さについて知ってもらい、出生前診断による人工妊娠中絶で失われる命を少しでも減らしたいと思い、この作品を書きました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

私、変わるから

佐賀県 唐津市立海青中学校 3年

中村 夢芽

あなたには、いくつの顔がありますか。私には二つの顔があります。学校での私と家庭での私。この二つの顔は正反対と言ってもいい程かけ離れたものです。

「学校行きたくないな」私の一日は、ほとんどがこの気持ちで始まります。学校での私は自己主張やみんなとワイワイ騒ぐことが苦手で口べたな、いわゆる「ノリが悪いやつ」です。自信を持って友達だと言える人も他の人達より少ないと思います。毎日、周りの人達の顔色を窺ってその場の空気に合わせることはできない私にとって、学校はとても息苦しい場所です。そんな臆病な学校での私と比べ、家庭での私は家族の中で一番うるさくわがままで自己中心的です。そのため、家族をたくさん傷つけています。そんな自分を変えたくて、ここで私の正直な気持ちを主張します。

私は学校で同じ学年の人と上手く話すことができません。家庭では「うるさい」と言われる程たくさん話します。でも、なぜか学校で話す時は声が小さくなり、はっきりと自分の気持ちを相手に伝えることができません。「どうしてこんなに違うのだろう」「どうして普段通りにいかないのだろう」と思います。私は、学校で自己主張が苦手で口べたな自分が嫌いです。いつも周りに合わせ、自分の気持ちを押し殺す自分自身が嫌いです。

しかし、好きなところもあります。それは誰も傷つけないところです。私は、相手に嫌われないよう穏やかに接することで人を傷つけることはありません。なかには、苦手な人もいますが、それを表に出さないようにも気をつけています。私はそんな相手の気持ちを優先できる学校での自分が好きです。

自己主張が苦手な学校での私と自己中心的な家庭での私。この二つが組み合わさると、私は家族を傷つけてしまいます。それが私の一番の悩みです。学校には周りのことを考えず、好き勝手にする人達があります。注意する先生に反抗する人達もいます。「どうして先生の指示に従わないのだろう」「どうして周りが迷惑していることに気づかないのだろう」と不思議に思います。でも、それを言葉にする勇気も注意する勇気も私にはありません。そう思うと自分自身に腹がたちます。そして、徐々に怒りが蓄積し、自分でその感情を抑えきれなくなった時、私は母や妹に当たってしまうのです。自分でイライラする原因をつくっておきながら人にそれをぶつけるなんて最低だということはわかっています。母や妹に当たってしまった後、自分がしたことを後悔し「もう絶対にしてはいけない、絶対にしない」と自分の心に誓います。でも、何度も何度も繰り返してしまう自分。そんな家庭での私が大嫌いです。

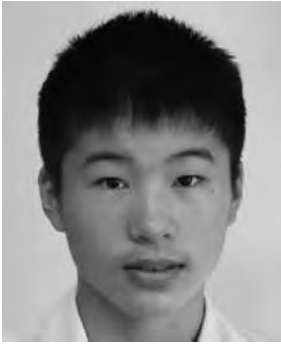
でも、家族のみんなは、そんなありのままの私を受けとめてくれます。家庭では唯一、自然体でいられるし、心から笑うことができます。きちんと叱ってくれて、支えてくれて、いつでも味方でいてくれます。そんな家族を傷つけたくありません。むしろ、もっともっと大切にしたい。そのためには、私には二つの顔なんていません。学校でも、周りの目を気にせずもっと自信を持って過ごしたい。

今回、ここで自分の思いを主張したのは、「自分を変えたい」という気持ちをゆるぎないものにするためです。自分を変えるのは時間がかかるし、難しいことだと思います。だからまずは「家族を傷つけない」ということから始めてみようと思います。そのためにはイライラする原因を自分でつくらないことが大事で、少し勇気を出して自分自身を変えてみると、心から「楽しい、幸せだ」と思える人生に近づけるはずです。

家族のみんな、今までたくさん傷つけてごめんなさい。私、変わるから。だからこれからも見守っていてね。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

自分自身を本当に変えたいと思ったからです。以前からずっと悩んでいたことで、多くの人前で主張することによって自分を変えるチャンスだと思いました。また、今まで迷惑をかけた家族に反省の気持ちや感謝の気持ちを伝えたいと思い、この作品を書きました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

つながる

長崎県 佐世保市立小佐々中学校 3年

久保田 康介

地域の力とは、生き方を学び合うものだと考えます。僕の住む小佐々町は、学校行事や地域の行事で、子どもから大人まで様々な世代の人たちがつながりを持ちます。小佐々町で材木店を営んでおられる、藤永さんが、僕に人生を語ってくださったことで、そう考えるようになったのです。

藤永さんは、小さな材木店が大型量販店に負けない企業努力をしてきたことや三十五歳で建築士の資格をとったことを教えてくださいました。その時に、先輩や他県の方からのアドバイスが努力を支えたそうです。自分の悩みにアドバイスをもらえるつながりは、積極的に自分から人と出会う場に出向いたことでできたとも言われました。

藤永さんのモットーは、人に喜んでもらえる仕事をする事です。そのために、人の話は真剣に聞くこと、うそをつかないことを大切にしています。今の自分をつくったのは、若いときの経験があったからだと教えてくださいました。

「十九歳の時、わずかなお金を持って、日本各地を旅行したんだ。訪れた町の人々がお金を持たない若者に親切してくれた。人のつながりの温かさを学んだよ。だから、今の中学生には、どんどん外に出てほしいんだ。ゲームとかメディアとかで家に閉じこもらずに人とつながることを大切にしてほしい。外で人とつながる経験は、いろんな興味を生み出す。楽しく過ごせる時期にどう過ごすかが、どう生きるのかに関わるんだよ。」

お話を聞く中で、たとえつらい時期があったとしても、負けずに前を向くという藤永さんの人物像が見えてきました。

どの地域にも、さまざまな考えや生き方を持った方がいます。その方々とつながることによって、その人の経験や生き方を学ぶことができます。ひいては、自分の生き方の参考にしたり、取り入れたりすることもできます。これこそが、成長させてくれるものだと感じました。

僕自身は、まだ世界は狭く、進んで外に出て行くほど、力はありません。そんな僕にも忘れられないことばをかけてくださった方がいます。島瀬美術館で行われていたさつき展に足を運んだときの事です。中学生が訪れたのが珍しかったからでしょうか。主催者の山口さんと言われる方が話しかけてくださいました。山口さんは「葉をさわるだけで水をやるタイミングがわかる」と言うのです。どきっとしました。すごいと思うのはもちろんですが、このことは人とのつながりの中にも必要なことだと思ったからです。

植物に思いを込めて水をやる。その適切なタイミングを感じ取る。人とのつながりの中にも、このような深さがあったなら、ことばの暴力やいじめといったようなものはなくなるのにも思いました。

人とつながる。つながる力は、地域の中で育ちます。両親と面と向かってはなかなかできない話を、藤永さんは真剣に中学生の僕に語ってくださいました。このようなつながりを持つことができたのは、僕の住む町のたくさんの大人が僕たちに関わり、成長を見守ってくれる地域の力があったからです。

僕は、今の自分の狭い世界から、藤永さんの言う外の世界に出て、たくさんの人とつながりを持つ人になりたいと考えています。そのためには、まず、自分の考えや思いをしっかりと持って、人に伝えることができるようになります。藤永さんと出会って、僕は人生が楽しみになりました。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

この作品「つながる」を書く前は、どちらかと言えば内気な性格で、自分から人に話しかける勇気もありませんでした。しかし、この作品で紹介した二人の大人の方に出会って、改めて人と「つながる」ことの大切さを考えさせられるようになりました。今では、人とのつながりを求めて、積極的に人に話しかけるよう心がけています。自分にとって大きな存在となる強いつながりを築いて、豊かで楽しい人生にしていきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

ポジティブに生きて

宮崎県 宮崎学園中学校 3年

小川 磨美

「大変だったね。どんな感じだったの?」「辛かったね。」私がある体験を友達に伝えると、皆がこう言って心配してくれます。確かに私はその出来事が起きて、被害も受けたし、学校にも少しの間行けなくなりました。しかし、思うのです。「私は、命があっただけでも幸せだ。」と。私が体験した出来事は、東日本大震災です。

ここ宮崎もいずれ起こるであろう南海トラフ巨大地震によって大きな被害を受けると言われています。地震が起こった時、もしあなたが生き残れたとしたら、「大きな被害を受けて大変だった。」と思いますか?それとも、「亡くなった方々もいるのだから、生きていられて幸せだ。」と思いますか?私なら、後者を選びます。それは、自分自身が東日本大震災で生き残れた側の気持ちを経験したからです。大震災で亡くなられた方々は、私が当時住んでいた福島県だけでも1614人もいらっしゃる。その中にはまだ小さく私と同学年の子もいたでしょう。まだ生きたいと思いつつ息絶えた方もいたでしょう。私はその人達の方まで頑張りたいのです。だから、私は、「私の震災」をポジティブに考えたいのです。

もちろん、初めからそう思えたわけではありません。きっかけとなった体験が2つあります。1つ目は剣道です。当時私は小学1年生で、大震災の前日に剣道スポーツ少年団の見学に行きました。剣道に挑戦したいと思って入団を決意した時、大震災が発生しました。剣道場は壊れて使えなくなり、1か月も待機状態になりました。しかし先生方が手を尽くし、剣道を再開できる場所を探してくださいました。そこは家から30分も離れた体育館でしたが、私はそこで剣道を始めることができました。また、その間にも先生方の元へは日本中から剣道の防具が送られてきていたと聞きました。私は人と人とのつながりの大切さ、そして助け合うことの素晴らしさをこの時、実感したのです。

2つ目は、たご焼きキャンプとの出会いです。これは、東日本大震災に伴う原発事故により、野外活動を大きく制限された子ども達のための避難キャンプです。兵庫県で行われるこのキャンプは、外で自由に遊ぶ機会を無くしてしまった福島の子供達を県全体で受け入れてくださいました。主催であるマスターを中心に、福島の子供達を助けたいという学生ボランティアやスタッフの方々が協力してくださいました。約2週間、私達はスタッフの方々と寝泊まりをしながら野外活動や海水浴など、福島ではできなかった活動を思いきり楽しみました。スタッフの方々とは今も交流があり、2年前には私がボランティアとして4年ぶりにキャンプに参加しました。参加していた子ども達は小学4年生以下の子ばかりで元気一杯だったのですが、帰宅を前に皆が泣き出してしまいました。私は自分がキャンプに参加した当時の気持ちを思い出しました。子ども達の涙の裏には、1人で全く知らないキャンプに参加する不安、そしてその思いを丸ごと受け止めてくださったスタッフやボランティアの方々の熱い思い。沢山の活動の中でそんな大きな優しさに触れ、絆が生まれた12日間。そのキャンプが終わろうとしている寂しさと帰りたくないという複雑な思いが隠れているのです。そんな思いが生まれるほど、素晴らしいたご焼きキャンプとの出会いが私の考えを変えたのです。

東日本大震災から7年。今、この瞬間にも記憶が、思いがだんだんと風化し始めています。私が今住んでいる宮崎でも、大震災のことを詳しく知っている人は身近にほとんどいません。しかし風化させてはならないのです。福島を忘れず、復興のために今も全国で努力する方々のこと、そして私のように、大震災をポジティブに考えようとしている人がいることを、忘れないでください。

この主張をどんな人に届けたいですか?

私はこの主張を、全世界の人に届けたいです。東日本大震災に関わった、関わらなかったは関係ないです。東日本大震災で被害を受けた方々や、支援して下さった方々にはこの主張を通して感謝や応援の気持ちを伝えたいです。

また、東日本大震災をよく知らない方々にもこの主張を聞いてもらい、被災地のことを考えてほしいです。そして最後には、この主張によって人々の地震や津波に対する意識を変えたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

兄の遺したもの

鹿児島県 霧島市立横川中学校 3年

篠原 真夏

悪性神経鞘腫。幼少期に発症するのは何千人に一人という極めてまれな病気です。ですから、この病名を聞いたことがないという人がほとんどでしょう。私の二番目の兄は、今から17年前、この病魔に侵され、わずか7歳という若さでこの世を去りました。当時、私はまだ生まれておらず、兄のことを直接は知りません。ですが、我が家は、今も、兄と一緒に生きているのです。家族とは何かを問われる現代において、私は声を大にして皆さんに伝えたい。家族とは何かということ…

膝が痛いと言きじゃくる兄を連れ、母は、何軒もの病院を訪れました。「甘えているだけじゃないですか。」最初はこの病院でもそう言われました。しかし、看護師でもある母は、これはただごとではないと直感が働き、鹿屋の県立病院に向かいました。

「背中に腫瘍があります。今すぐ入院を。」

担当の医師からそう告げられ、その日から母と兄の病魔との戦いが始まったのです。

検査の間、できることと言えば、傍らで本を読んであげることしかありませんでした。自分は一日でも長く一緒に居られたらいい。そう思いながらも、小さな体に管を入れられるわが子の姿を見て、本当にこれでいいのだろうかと何度も自問したそうです。そして、1年10ヶ月の闘病むなしに「最善はつくしましたが、今日が最期です。」そう医師から宣告された早朝、

「よく頑張ったね。もう頑張らなくてもいいんだよ。」

と母はささやきました。

私の家には、兄の姿を映すビデオが今でも大切に保管されています。そこには仲よく映る二人の兄の姿があります。気持ちよさそうにすやすやと眠っています。その映像を初めて目にしたとき、私はあふれる涙を止めることができませんでした。母が私に教えてくれたのです。これは、病院から帰る日に撮影されたものだ。そうです。霊柩車に乗せられなかった母は、わが子をしっかりと胸に抱きしめ、我が家に帰りました。兄弟なのになかなか会話をすることもなかった二人の最期のひととき。兄は、声を発することのない弟に何と声をかけているのだろう。母は、安らかな眠りにつくわが子をどんな思いでビデオに収めたのだろう。「お母さん、辛かったですよ。」心の声となって、涙が私の頬を伝ってゆきます。

「お兄ちゃんがいたから。そして、あなたが生まれて来てくれたから……。」

母はそう答えました。

「血は水よりも濃し」と言いますが、残念ながら、世の中には、家族同士でいがみ合い、殺人まで起きてしまうニュースが後を絶ちません。そんなニュースを耳にするたび、私は胸が苦しくなります。愛の宣教師と言われたマザーテレサは「愛は家族から始まり、平和は家族から始まる。愛があるところに安らぎや喜びがある。」と述べています。家族とは何か。私は思います。家族とは、愛が生まれるところなのです。たとえそれが小さな愛だったとしても、それはいずれ世界を動かすでしょう。そして、人類を平和にし、みんなに幸せをもたらしてくれると思うのです。最後まで必死に生きぬいた私の小さな兄と、最期まで必死に守ろうと戦いぬいた母が教えてくれました。

私は、今、とっても幸せ。そう。いつも支えてくれる母がいて、口数は少ないけど頼れる兄がいて、いつも見守ってくれる天使のような笑顔の兄がいるから。複雑な現代社会に生きる今だからこそ、私たちは、家族の在りようを今一度考え、一人一人が家族とは何かの答えを探す必要があるのではないのでしょうか。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私の家族は「仲が良いね。」とよく言われますが、それは、これまで様々な苦難を乗り越えてきたからです。複雑な現代社会に生きる私たちだからこそ、もう一度家族の在り方を見つめ直す必要があります。家族のこと、生きるということ、いろんな悩みを抱えた人にわたしの弁論を届けたいと思います。家族から生まれる「愛」それは、慈悲深く、無償の愛です。その愛に包まれた私たち家族の物語をお聞きいただければ嬉しいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

違いを乗り越えて

沖縄県 石垣市立石垣第二中学校 3年

知念 粹加

皆さんは、もし、周りにいる人と自分が違っていても、それを素直に受け入れることができますか。

私には、他の人と違うところがあります。それは、左の耳が聞こえないということです。三歳の頃、おたふく風邪にかかり、それが原因で左耳の聴力を失いました。だから今は、右の耳だけを頼りに、日々、生活しています。幼い頃は、あまり耳のことを気にしていませんでした。しかし、年を重ねていくにつれ、左耳が不自由なことに、少しずつ辛さと怒りを感じるようになりました。日常生活の中で、高い音を聞いた時に耳鳴りがしたり、友人が私を何度も呼んでいるのに気づかず、相手から無視しているように見られたり、反応が遅くなっただけで悪口を言われるようになりました。その時から、仲間との距離が離れているような気がして、「これからずっと、この耳と付き合っていかなければならない」と思うと、今にでも耳をひきちぎりたくなるような思いでした。

そんな時、私を支えてくれたのは母でした。母は、耳のことで悩む私を心配し、気にかけてくれました。ある時、母は、私を励まそうとして、

「看護師さんがね、今、医療技術は発展しているから、残っている細胞で、いつかは耳も聞こえるようになるんだって。」と、話してくれました。しかし、その時の私は、目の前のことしか考えられず、先のことを考える余裕がありませんでした。母は私の諦めた顔を見て、

「粹加だけに辛い思いをさせて、ごめんね。この苦しさ、変わってあげたいのに、何もできなくて、ごめんね。」と、弱気な言葉をもらしました。私はそんな母の言葉に悲しくなり、涙が出てきました。

母は、泣いている私の姿を見て、こう言いました。

「粹加は今、本当に辛い時期かもしれない。だけど、この人生を歩むのは一人だけ。この辛い経験が、絶対に自分自身を強くするはず。だから、これから先、もっと自分以上に人の苦しみや悲しみを分かちあられる人になってほしい。」

この言葉に私は、こんなに理解してくれて背中を押してくれたことが、とても嬉しく感じました。そして、母の言葉を胸に、耳の不自由さを受け入れて、ありのままの自分で生きていこうと強く思いました。

今、私は、体が不自由な方やお年寄りの方をサポートする活動に参加しています。また、部活動の活動で老人ホームで、踊りや三味線の演奏をしたりしています。この一つ一つの行動が、誰かの支えになり、笑顔が生まれるということを信じて、これからも継続していきます。

私には、介護士になるという夢があります。母が私の背中を押してくれたように、私も誰かの支えになり、たくさんの人の笑顔を引き出せる人になりたいと考えています。

世の中には、普通のことや普通でできなかつたり、当たり前でできなかつたり、ハンデを抱えている人が多くいます。その中には、周りからの偏見におびえ苦しんでいる人もいます。そんな人達に、偏見を持たず、理解し、支え合う気持ちを持つことで、ハンデを抱えている人は楽になると思います。

今、私の周りには、障がいを受け入れて支えてくれる人がいます。あなたの周りにも、あなたを理解してくれる人が、いると思います。一人でもわかってくれる人がいてくれるだけで、自分自身の支えになるということ、どこか普通とは違っていても誰かの支えがあれば、きっと乗り越えられると私は思います。

みなさんも、人との違いを乗り越えて、一步踏み出してみませんか。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は、左耳が聞こえない障がいを強く憎みました。聞こえないことで辛い悲しいそして苦しい経験があったからです。でも私は恵まれていたのかもしれない。なぜなら、障がいを理解してくれた仲間がいて、背中を押してくれた家族がいたからです。だから次は私が、障がいを持つ事で差別や偏見で一步を踏み出せない人に寄り添い、ハンデを抱えている方々の支えになりたいです。また、障がいを偏見の目で見てしまう健常者の方に、私自身が経験したことを伝え、多くの方がハンデを抱えている人達の支えになって、共に生きる社会をめざしていきたいです。

実施概要

第40回少年の主張全国大会 ～わたしの主張 2018～ について

全国大会開催要綱

1. 趣 旨

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらおう力などを身に付けることが大切です。

少年の主張全国大会は、子どもたちにとって、これらの契機となることを願い実施するものです。

2. 対 象

日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。

※国籍は問わないが、日本語で発表できること。なお、作品は未発表、自作のものに限ります。

3. 発表内容

ア．社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。

イ．家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。

ウ．テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークに、飾り気の無い言葉でまとめたもの。また、商業的な固有名詞の使用は極力避けるようにする。

（悪い例：○○県にある○○旅館 良い例：○○県にある旅館 など。）

4. 主 催

国立青少年教育振興機構

5. 協 力

都道府県、青少年育成都道府県民会議、全日本中学校長会、日本私立中学高等学校連合会、公益社団法人日本 PTA 全国協議会

6. 後 援

内閣府、文部科学省、東京都教育委員会、日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会、社会福祉法人全国社会福祉協議会

7. 開催日時

平成 30 年 11 月 11 日（日）13 時～16 時

8. 開催場所

国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟大ホール

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号

少年の主張都道府県代表者の推薦（作品の募集）について

1. 都道府県大会の開催

青少年育成都道府県民会議等主催により開催し、青少年育成市町村民会議、市町村教育委員会、中学校等の協力を得て、広く作品の募集及び市町村大会、地区大会等を開催し、その選考を経た各代表者の中から都道府県大会において最も優秀な者を選考した。

2. 都道府県大会実施概要 71 ページ参照

全国大会出場者選考及び当日審査について

青少年育成都道府県民会議等より全国大会推薦要領に基づき都道府県代表 47 名が推薦され、全国大会審査委員会で、都道府県代表者作品を、全国 5 ブロックに分け審査を行い、各ブロック代表として選ばれた計 12 名が全国大会で主張発表を行った。

1. 全国大会審査委員会の設置

作品を審査するため、青少年団体、行政、学識経験者や教育関係団体、マスコミ等、複数の分野から審査委員を選任した。

審査委員長 松本 零士 日本宇宙少年団 理事長

審査委員長代理 西川 龍一 日本放送協会 解説委員

審 査 委 員 五十嵐智浩 日本 PTA 全国協議会 副会長

内海 房子 国立女性教育会館 理事長

北風 幸一 内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付 参事官（青少年企画担当）

田中壮一郎 国立青少年教育振興機構 顧問

中野 理美 文部科学省 総合教育政策局 地域学習推進課長

平下 文康 国立青少年教育振興機構 理事

笛木 啓介 全日本中学校長会 生徒指導部長

古沢由紀子 読売新聞東京本社 編集委員

宮崎 緑 千葉商科大学 教授・国際教養学部長

山本 由菜 第 36 回少年の主張全国大会 内閣総理大臣賞受賞者

2 審査方法及び審査基準

①事前審査（全国大会出場者選考の為の審査）

事前審査（作文審査・出場者選考審査）は、全国を 5 ブロックに分けて行い、各ブロック代表を選出。

各ブロック代表者合計 12 名を全国大会発表者として選考。

<作文審査> (在宅審査)

[日 時] 平成 30 年 9 月 28 日 (金) ~ 10 月 16 日 (火)

[内 容] 47 都道府県代表作文を読み、主に論旨について審査を行う

[基 準] 以下の基準について、相対的評価を行う

- ①鋭い感性で、新鮮な主張であるか (中学生らしさ)
- ②新しい情報や視点があるか
- ③個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか
- ④提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか
- ⑤論旨が一貫し、構成がしっかりしているか

[方 法] ①ブロックごとに審査を行う

②評価

全国大会出場者としてふさわしいと思われる作文をブロックごとに 5 つ選考し、上位から順番に 5 点、4 点、3 点、2 点、1 点を付与する

少年の主張大会ブロック割り及び全国大会出場定数 (5 ブロック計 12 名)

ブロック	都 道 府 県	定数
北海道・東北	北海道・青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県	2
関東・甲信越静	茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・新潟県・山梨県・長野県・静岡県	3
中部・近畿	富山県・石川県・福井県・愛知県・三重県・岐阜県・滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県	3
中国・四国	鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県	2
九州	福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県	2

定数 (ブロック代表数) …ブロック内で全国大会に出場する者の数

<全国大会出場者選考最終審査>

[時 期] 平成 30 年 10 月 22 日 (月) 10:00 ~ 12:00

[場 所] 国立オリンピック記念青少年総合センター 大会議室

[内 容] 代表者をブロック定数選出し、全国大会出場者 12 名を決定する

[基 準] 以下の基準について、相対的評価を行う

- ①作文内容が優れており、共感と感銘を与えているか
- ②説得力のある話し方であるか
- ③話しぶりに熱意と迫力があるか

[方 法] ①ブロックごとに協議を行う

②作文審査集計をもとにした協議により、ブロック代表候補者を絞り込む

③必要に応じ、ブロック代表候補者の都道府県民大会録音を聴き論調の審査を行う

②全国大会審査

[日 時] 平成 30 年 11 月 11 日 (日) 13:00 ~ 16:00

[場 所] 国立オリンピック記念青少年総合センターカルチャー棟 大ホール

[内 容] ブロック代表 12 名の発表を聴き、総合的な審査を行い、協議により、内閣総理大臣賞、文部科学大臣賞、国立青少年教育振興機構理事長賞の三賞を決定する

[基 準] ①共感と感銘を与えていたか

②説得力のある話だったか

③熱意と迫力があつたか

④落ち着いて話していたか

⑤聴衆に感動を与えていたか

③設置された賞

全 国 大 会 出 場 者	(三賞)	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞	全国大会出場者のうち、優秀な 3 作品に授与した。
		審査委員会委員長賞	全国大会出場者のうち三賞のほか、審査委員長の評価が高い 2 作品に授与した。
		国立青少年教育振興機構奨励賞	都道府県代表として、全国大会出場者選考審査においてブロック代表に選出され、全国大会に出場したことを賞し、全国大会出場者全 12 名に授与した。
		国立青少年教育振興機構努力賞	都道府県代表として、全国大会出場者選考審査 (ブロック代表選考審査) に推薦されたことを賞し、35 都道府県代表者に授与した。

少年の主張大会応募者総数等

応募者数	522,229 名
参加学校数	4,298 校
都道府県大会来場者数	14,948 名
全国大会来場者数	445 名

都道府県代表者学年性別人数

学年/性別	男子	女子	計
中 3	9	28	37
中 2	1	7	8
中 1	0	2	2
計	10	37	47

審査委員の感想



夢は時間を裏切らない。時間も夢を裏切ってはならない。

第40回少年の主張全国大会審査委員会 委員長
松本 零士

今年も審査委員長を務めさせていただきました。まずは、全国から約52万人の中学生に応募いただきましたこと、厚くお礼申し上げます。

今年の審査は例年以上に難しく、全国大会発表者12名の選考、そして全国大会当日の各賞の決定には非常に時間がかかりました。努力賞を受賞された皆さんの作品も素晴らしいものばかりでした。惜しくも全国大会で発表することはできませんでしたが、ぜひ胸を張って欲しいと思います。

また、本大会には佳子内親王殿下にご臨席いただきました。発表者の主張を真剣にお聞きになる姿に、私も大変感動いたしました。

今回の皆さんの主張には、本当に胸を打たれました。皆さんの「志」がしっかりと伝わってきましたし、「若さ」とは何にも勝る素晴らしい宝物であると実感しました。私も今年で80歳になりますが、私自身、皆さんのことが心から羨ましくなり、タイムマシンがあるのなら、もう一度少年の日に戻りたいとさえ思いました。

青春時代こそが、人生の中で最も素晴らしい時期のひとつです。私も小さい頃は山で遊び、川で遊び、やがて海外に出て様々な経験を積んできました。それらの体験が今の自分に繋がっています。若い世代の皆さんは、これから様々な体験をし、人生を豊かなものにしていってください。

皆さんの未来は明るい。その未来を守り抜くためにも、この青春時代に、皆さんの志を貫き通し、頑張っていくことが、とても大切なのです。

——夢は時間を裏切らない。時間も夢を裏切ってはならない。

その二つが出会ったときに、培ってきた志と夢は必ず叶うと信じて、これからも頑張ってください。

最後になりますが、全国大会に推薦され各賞を受賞した皆さん、そして本大会に応募いただいた皆さん全員の健闘を称えたいと思います。また、本大会の運営にご尽力をいただきました関係者の皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



社会事象に敏感な主張に感心

日本放送協会 解説委員
西川 龍一

40回目を迎えた「少年の主張全国大会」。今年の主張からは、学校現場で進む国際化とそれに伴う異文化理解の難しさ、逆に違いを認め合うことの大切さを知った経験を通じた共生社会へのヒントなど、大人の我々に気づかせてくれる多くのことがあった。

審査を担当していつも感じるのは、我々が思っている以上に中学生が社会的な事象に敏感だということだ。マスコミに身を置く人間としては、こうした中学生の感性に触れられるのはうれしいことだ。中学生たちは、社会の一員として、立派に社会事象をとらえて咀嚼し、自分の中に置き換えて社会に発信する力を身に付けることができるのだ。

もう一つ、審査を通じて思うことが、プレゼンテーションの大切さだ。事前審査で作文として読む印象と全国大会本番で主張として発表されるものの中で大きく印象が異なるものがある。中学生の場合、自らの体験や思いを赤裸々につづり、それを大勢の前で口に出して発表するというのは生半可なことではないだろう。それだけに自然体で自分の言葉で行う主張には大きなパワーが宿っている。今年の内閣総理大臣賞は、自らが受けたいじめがテーマだ。死を考えるほど追い詰められながら、両親や友達などたくさんの人の助けで前に踏み出すことができた体験談だ。作文としての内容もさることながら、自らがいじめを受けた体験をもとに、いじめている人、いじめを傍観している人、いじめられている人に対する説得力ある助言と自分らしく人生を駆け抜けていくという決意表明に、審査委員全員が圧倒された。

自らの経験や思いを思考し、その中からどの部分をどのような形で主張として切り取っていくのかを判断し、自分なりの表現で文章としてだけでなく、周りの人たちに訴える形で表現する。少年の主張を新学習指導要領が求めるアクティブラーニングで培おうとしている力を身に付けることにつなげて欲しい。



心揺さぶられた素晴らしい主張の数々

日本 PTA 全国協議会 副会長

五十嵐 智浩

心に響いたものの余韻は簡単には消えないものだと実感しながら感想を書いております。

全国のブロックから選ばれた 12 名の発表者の主張は、どれも自分の想いを真正面から訴え、聴く者に共感、感動を与えてくれました。

審査の過程で以前に原稿は読んでおり、内容について大筋は頭に入っているにも関わらず、本人の思いの丈を直接聴くことで、こうも響いてくるものが違うのかと、驚きすら感じておりました。

訴える想いは様々で、どれもがこの短い持ち時間では語り尽せない、心の揺れ動きや葛藤、苦悩、感動、感謝…など多くのプロセスを経て、まとめられたと思います。その行間にあるものを想像しながら聴かすにはいられない、真剣で純粋で熱い発表でした。

私は PTA という立場で審査員の末席に加えて頂きましたが、この子どもたちの一途な思いを聴き、私たちの活動が、子どもの健やかな成長と幸せの実現を果たすため、ますます役立つものにしていかなくてはならないと強く自覚させられました。そして、今回の発表者たちのように素敵な心を持った子どもたちが、全国にはたくさんいるだろうという、嬉しい期待も感じました。私たち大人は、そうした子どもの心の琴線に触れ、より心が磨かれるような振る舞いや言動を心掛けたいものです。言葉という言葉があるように、心の籠った言葉の大きさに改めて気付きました。

今回の発表を聴いていて何度か感じたのですが、上手な話し方であることが、時には素直な感動を妨げることもありました。きっとしっかり練習をし、強弱を考え、リズムよく話せるまで何度も努力してきたのだと思います。

しかし完成度が高い故なのか、演劇ようになってしまい、その人の心の言葉ではなく聴こえてしまうことがありました。これは私だけなのかも知りませんが、最後に感想の一つとして載せておきます。



中学生の鋭い感性に触れて

国立女性教育会館 理事長

内海 房子

今年も青く澄み渡った秋空の下、平成 30 年度「少年の主張全国大会」が開催されました。

内閣総理大臣賞に輝いたのは、山形県代表の岩淵礼姫さんの作文「人生を駆け抜ける」です。いじめにあった岩淵さんの心情をさらけ出す作文の内容はもちろんですが、その心の内を叫ぶように訴える発表は聴衆の心をぐっととらえ、深い海の中に沈み込んだかのような静けさに包まれました。悲惨ないじめに遭った経験より、周りのたくさんの人に助けられて這い上がってこれたこと、そして、いじめの経験が自分を成長させた、大切なことを学ぶことができたことと綴っています。強くて柔らかい中学生の精神を目の当たりにした思いでした。昨年の内閣総理大臣賞を受賞した作品も、いじめをテーマにしたものでした。今の中学生の生活の中に、なかなか取り去ることのできない「いじめ」問題が黒々と横たわっていることをひしひしと感じます。

3 賞の受賞には及びませんでした。埼玉県代表の本間柊平さんの作文「それぞれが尊重される社会へ」に、私は大変感銘を受けました。全国大会の発表の場には、酸素ボンベを装着し車いすで登場しました。障がい者が、本人の意思とは関係なしに、感動の対象としてテレビのドキュメンタリー番組などに取り上げられる演出が、僕は嫌いだと訴えています。淡々と静かな口調で訴えるその言葉の一つ一つには、中学生の鋭利な刃物のような研ぎ澄まされた感性を感じ、鳥肌が立つ思いがしました。健常者は障がいを持つ人たちのこのような気持ちを本当に理解しているのだろうか、と疑問に思います。

本間柊平さんは最後に、障がい者も健常者も一人の人間、みな社会の一員として認め、本当の優しさにあふれた社会をつくりたいと述べています。本当の優しさにあふれた社会、本当の優しさとは何だろうか、大人の私たちに突きつけられた問題のように感じるのは私だけでしょうか。



審査委員だからこその実感

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付 参事官（青少年企画担当）
北風 幸一

少年の主張全国大会において審査委員としての役割を果たすのは今回で2回目となりますが、今年の作文審査は昨年以上に難しいと感じました。一応の審査基準はあるのですが、実際に作文を評価しようとすると、どの基準にも当てはまるような気がして優劣が付けられないのです。どの作文も各都道府県において最も優れているとして選考されただけのことはあります。

作文審査の難しさは審査結果の集計表からも窺われました。ほとんど全ての作文がいずれかの審査委員から高い評価をつけられていたからです。自分では高く評価できると考えた作文であっても、同じような評価をつけている審査委員は他にいなかったり、その逆もあつたりしました。

全国大会への出場者を決める審査委員会においても、甲乙つけがたい作文の中からの選考となったことを思い出します。作文の中には審査委員によって主張内容の解釈や評価に大きな違いがあるものもありました。

こうした審査を経て全国大会で最も高い評価を得た発表が「人生を駆け抜ける」です。この発表では、特にいじめの加害者への厳しい問いかけが心に刺さりました。受け止め方は人それぞれ違うと思いますが、私の場合はいじめの加害者への対応が一番の課題ではないかと気づかされ、大変優れた発表といえるのではないかと考えました。

この受賞作品を含め、言葉・国の違いを超えた思い、家族や友人とのかかわりなどに関する様々なテーマの主張内容は、いずれも審査委員や聴衆の共感を誘うものであったと思います。

一貫して困難な審査ではありましたが、評価することが求められる審査委員の立場であったからこそ、それぞれの発表の主張内容をより深く理解することができ、その内容の素晴らしさを実感できたような気がします。



審査委員となつて

国立青少年教育振興機構 顧問
田中 壮一郎

これまで9年間、国立青少年教育振興機構の理事長として、毎年「少年の主張全国大会」で中学生の発表を聞かせていただくことを楽しみにしていました。

全国の代表の中から更に選ばれた12人の中学生が、まわりの人から受けた愛情やおもいやりへの感謝や、地域の人々や文化への思い、「いじめをなくそう」「世界平和に貢献しよう」などとした呼びかけ、更には将来への夢や希望など、一人一人自らの体験を踏まえた発表に、それぞれどの内容にも驚きや感銘を受けていました。

そして、これらの中から総理大臣賞や文部科学大臣賞を選ぶのは大変だろうと、他人事として感じていました。

本年、初めて審査委員に加えていただき、何より、審査委員の仕事も大変だなあと実感しました。

まず全都道府県において選ばれた47の作品から12作品を選抜しなければなりません。一つ一つの作品に感心したり共鳴していると、どれが優れているかという観点に立てず、なかなか全国大会での発表作品を選ぶことができませんでした。更に、全国大会での発表に順位をつけることは至難の技としか思えませんでした。

その中で総理大臣賞等に選ばれた皆さん、本当にお目出とうございます。また、賞には選ばれなかった作品もどれも素晴らしいものでした。今後、それぞれの思いをしっかりと持ち続け、それぞれ立派な大人に成長していただきたいと思います。

最後に、これは毎年のことですが、男子の作品が少ないのが気懸りです。しかし、本年も全国大会で4人の男子がそれぞれ日常生活での体験に基づくしっかりとした発表をしてくれました。来年度以降、全国の男子中学生の本大会への積極的な応募を心より期待しています。



感動をありがとう！

文部科学省 総合教育政策局 地域学習推進課長
中野 理美

2018年11月11日、第40回少年の主張全国大会。全国52万人の応募者から選ばれた12名の中学生の主張を直にお聴きするという、素晴らしい経験をさせていただきました。

まず、12名の皆さんの堂々とした主張に驚嘆しました。13歳から15歳という年齢での全国大会という大舞台、テレビカメラも入っています。自分が中学生の頃を思うと、緊張はいかばかりかと思いますが、本当に皆さん、落ち着いて、身振り手振りも含めた立派な発表で、我々審査員を含む聴衆の心をつかみました。何度も何度も練習して自信をつけたのかな、自分の主張が選ばれたという誇りと伝えたいという思いを力に変えたのかな、先生方やご家族の支えもあったのかな、と勝手に想像して心が温かくなりました。

そして、主張の内容も、どれも本当に素晴らしいものでした。テーマはそれぞれでしたが、皆さんが、様々な経験から感じたこと、時に悩み考え抜いたことを、自分の言葉で、説得力を持って表現されました。その言葉は聴衆に感動を与え、大人の私たちも考えさせられることが多くありました。共通していたのは、様々な経験と自問自答の中で、中学生たちが成長している感じが感じとられたことです。加えて、思いを文章にする過程でも、そして発表の過程でも、彼らは大きく成長したことと思います。教育行政に携わる者の一人として、子どもたちの成長を目の当たりにすることは、素晴らしく嬉しいことです。松本審査委員長が、表彰後の挨拶の際に、若い皆さんが羨ましい！という言葉が連発されていましたが、本当に眩いばかりの若い皆さん、これからも成長し続けて行ってほしいと思います。

審査委員としては、全員に特別の賞をお贈りしたい思いでしたが、それはかなわないので、かわりにこの場をかりて、「ありがとう」の言葉を一人一人にお贈りしたいと思います。



中学生による力強い主張

国立青少年教育振興機構 理事
平下 文康

審査委員を務めるのは、今回が2回目です。とは言っても慣れていくものではありません。今回も大いに悩み、考え込んでしまいました。

発表した中学生たちは、厳しい、時に残酷な現実と直面してきました。親にも言えずに悩んできたこともあったでしょう。押しつぶされてしまうような気持ちであったでしょう。自分が何か悪いことをしたわけでもないのに、友達から何故そのような言葉を浴びせられなければならないのか、不条理を感じたことでしょう。

この現状をなんとか変えようと、勇気を振り絞って、声に出し、行動に移していったことは、どんなに称賛してもし尽くせません。

もう思い出したくもない経験を、文章にし、さらにそれを大勢の前で声に出して披露していました。なんという精神力の強さでしょう。おそらく、自分自身を守ろうということよりも、この思いを多くの人に伝えたい、伝えないわけにはいかない、といった強い感情があったのでしょう。

中学生だからこそ、力強いメッセージを届けることができるのかもしれません。年齢を重ねると、いろいろ考えてしまっただけでストレートなものでなくなってしまいます。

審査員としては、そうした中学生の心の叫びを受け止めなければなりません。それぞれの中学生が持っている深い思いにとっても優劣はつけられません。ただ、どれだけそうした思いを相手に伝えられたかということで判断するしかありませんでした。私の場合は。

内閣総理大臣賞を受賞した、山形県天童市立第三中学校の岩淵礼姫さんの「人生を駆け抜ける」は、とても力強くまっすぐに気持ちが伝わってきました。これから先、何らかの困難にぶつかっても、どうぞ果敢に立ち向かっていってほしいと切に願います。



今年も中学生の主張に感動！

全日本中学校長会 生徒指導部長

笛木 啓介

小春日和の穏やかな日に、第40回少年の主張全国大会が開催されました。昨年に引き続き審査員という大役を仰せつかりました。大会に出場した12名の中学生による主張は、どれも素晴らしく、力強く、感動の連続でした。

誰かの役に立つことで感じる喜びが人として生きる幸せだと気づいたこと、誰もが安心して暮らせる日本であってほしいと願っていること、他人の評価に惑わされず目の前の笑顔を大切にできる人間になろうと決意したこと、自分を信じよりよい人生を目指そうと願っていること、一人一人の性格や個性が尊重される社会の実現を目指していること、誰からでも学ぶ姿勢を持とうと決意したこと、今の自分にできることを探し行動しようと思いついたこと等についての主張がありました。中学生ならではの鋭い感性と純粋で素直な心から発せられる思いやメッセージに大きく心を動かされました。

今年の大会には全国の52万人以上の中学生が応募しました。まず、各都道府県における地区大会を経て代表47名が決まります。さらに、全国大会出場の12名を決めるために、書類審査を行います。この審査がとても悩ましいのです。どの作品も力強く感動的で、大人である私に生き方を示唆してくれるものばかりなのです。「なぜ、12名に絞らねばならないのか？」昨年同様、今年も悩んでしまいました。

52万人以上の中学生が自らの生き方や社会の在り方、将来への希望などを真剣に考え文章にしてくれたことを思うと、日本の中学生の力強さを感じずにはいられません。彼らが大人になって活躍する頃には、情報化、国際化などが想像できないスピードで進み、世の中全体が大きく変わっているはずですが、しかし、今の力を礎に学び続けることができれば、どのような世の中になったとしても大きく活躍できるはずですが。少年の主張の審査員をさせていただいたおかげで、力強い中学生を育てていきたいという意欲が今まで以上に私の中から湧き出てきました。

結びに、この大会に関わった中学生一人一人に心から敬意を表します。そして、主催者である国立青少年教育振興機構をはじめ、各学校で指導にあられた先生方、関係の皆様感謝申し上げます。



「少年の主張」が映し出す現代社会

読売新聞東京本社 編集委員

古沢 由紀子

変化の早い今の社会の実情を、様々な角度から鋭く切り取っている。しかも、多くの生徒たちが当事者であり、試行錯誤しながら懸命に課題を解決しようとしている・・・。

第40回「少年の主張」を聞き、そんな印象を受けた。全国各地から集まった生徒たちの様々な主張は「現場」の生の声でもあり、これまで気づけなかった視点を与えてくれた。

審査委員会委員長賞を受けた愛知県の富田真亜玖君は、フィリピン出身の母親との「言葉の壁」にいらだっていた日々を振り返った。母からの手紙をきっかけに信頼関係を取り戻し、「違う文化をもつ人を支える活動や仕事ができるよう、少しでも語学力をつけたい」と考えるようになったという。

韓国人の父を持つ島根県の高梨はなさんも、「日本と韓国、それぞれの国の良さを胸を張って伝えたい」と意欲を語り、文部科学大臣賞を受けた。

各地の学校で多国籍化が進むなか、海外にルーツを持つ生徒自身が、地域社会でどのような役割を担っていくべきか、真剣に考えている。その様子はとても心強く、胸を打つ。同時に、大人の側にも、早急な対応や意識改革が必要な現状を浮かび上がらせたように思えた。

埼玉県の本間柊平君の「障害者に対して決めつけた印象を持たないでほしい」という問題提起には、深い洞察力を感じた。大分県の佐藤吟次さんは転居をきっかけに、新たな環境で「楽な方に流されて悪さをしていた自分」が変わっていった成長の過程を率直に語り、好感がもてた。

いじめに関する訴えが少なくないことも、学校や社会の実態を反映している。その中で、内閣総理大臣賞を受けた山形県の岩淵礼姫さんの主張は迫力があつた。

卑劣ないじめを受けて「死にたい」と思った経験をたどり、いじめを受けている人に「死んで何になる。あなたが死んでしまったら、どれだけたくさんの人が悲しむか考えてほしい」と渾身のメッセージを送った。

今回の出場者は、全国約52万人の応募者から選ばれた。自らの体験と向き合い、社会に向かって伝えたいことは何か、じっくり考えて表現するプロセスはとても大切だ。さらに、同世代の多様な「主張」に耳を傾ける機会を、もっと多くの若者が共有できれば、と願っている。



無垢な正義感

千葉商科大学 教授・国際教養学部長

宮崎 緑

こんなにも心を揺さぶられる。こんなにも深く胸を打たれる。少年少女たちから発せられる言葉は生き物となって私たちの内奥に入り、そこに住みついてキラキラと光を発しているが如く感じられる。

この感動の正体を見極めようとして、今回もじっと耳を傾けた。

見出したのは・・・正義感。そう、少年少女たちの主張の根底にしっかりと土台を作っているひとつの要素は、紛れもなく正義感なのである。いじめを許さず、差別を許さず、暴力を許さず、そして自分の弱さも許せない。切ないほどの正義感。大人の社会がすっかり失いつつある、この感覚なのだ。

付度がはびこり、アメリカを筆頭に〇〇ファーストの名の下、自分だけが良ければいいという風潮が罷り通り、長いものに巻かれてしまっている大人の世界を睥睨するように、中学生たちの正義感が炸裂する。純粋な、善を追及する穢れなき姿勢が、思春期の葛藤と相俟って真正面から伝わってくるのである。感動せざるを得ないではないか。

本年も、一人ひとりの抱えるテーマが胸に沁みた。いじめを克服して率直な思いを語れるようになるまで、どんなに苦しい試練を経たことだろう。日韓両国にルーツがある身で竹島問題を学習するのはどんなに複雑な思いだったであろう。異文化の背景を持つ親子間で親を乗り越える思春期のプロセスには大いにエネルギーが必要だったであろう。正当な才能なのに目立つと悪口を言われることには大いに世の不条理を覚えたであろう。自分の身体を丸ごと受け入れ愛していくには大きな勇気が必要だったであろう。

一つ一つの主張に込められたその人ならではの思いに、一つ一つ共感する。どの主張にも、二つとない個性がある。発見された問題も解決の仕方も十人十色、その人ならではの世界観に裏付けられている。正義感にも個性が反映されているのだ。

無限の可能性と自由を秘めた一人ひとりの正義が実現できる世の中を用意することこそ「大人」の使命だと、改めて思う。少年少女たちがこの無垢な正義感を抱いたまま真っすぐに成長していつてくれることを、祈るものである。



様々な考え

第36回少年の主張全国大会 内閣総理大臣賞受賞者

山本 由菜

少年の主張全国大会の審査委員を務めさせていただきました。審査委員を務めてさせていただいたこと、今回の大会でたくさんのお会いがあったことを嬉しく光栄に思います。

47都道府県の代表者の作文を読ませていただきました。どの作文も中学生らしい純粋な想いや大人になっていくにつれ、想像できなくなるような考えなどが書かれており、驚きと感銘を受けました。読みながら考えさせられることが多々あり、何故12人に絞らなければならないのか、もっと多くの人に伝わらいいのにとつくづく思いながら選考していました。

全国大会のステージでは、12人全員が多くの人に伝えるための工夫をされていました。全国大会に出場した12人と同じ思いの中学生の分も伝わったと思います。

様々なテーマの主張がありましたが、主張した中学生が共通して必要だと伝えたいものは、コミュニケーションと思いやりと行動力なのではないかと考えました。コミュニケーションや思いやりにも様々な考え方や形があるため読み取ることや受け入れることは難しいですが、勇気を持って行動すれば、誰かに伝わり、少しでも良い方向に行くのではないかと思います。

自分自身も中学生の時に少年の主張に出会い、色々なことに興味を持ったり、色々な考え方をするようになりました。しかし、大学生になった今、今回の中学生の主張を聞き、気づいたことや新しく挑戦してみたいことが見つかりました。

私もまだまだ未熟者なので、少年の主張に応募、参加した中学生のみなさん、全国の中学生のみなさんと自分の考えや思いを大切に一緒に頑張っていきたいです。また、そう思わせてくれた中学生のみなさんに感謝します。

このような貴重な経験をいただいたこと、携わってくださったすべての方々に感謝申し上げます。

中学生

- いじめる人、いじめられる人にアドバイスをしているところが良かった。
- とても感動する内容であった。時間を2時間くらいにしてほしい。
- 聞こえやすかった。
- 1人1人が生き生きと話していて、聞いていて楽しかった。体に不自由のある人も希望を持って生きている姿に感動した。
- 同じ中学生なのに苦労している人がいることに気づいた。これからはこのことを意識していきたい。
- 心に残る内容が多く、ためになった。
- 少し席が狭かった。多くの人が集まるので、温度調整をして欲しい。
- 自分の考えを聞いて欲しいという意志が感じられた。自信を持って発表していた。
- いじめはいけないことだと改めて分かった。
- それぞれの体験や考えを通して、それぞれの主張が知れた。
- ひとりひとりの想いが伝わった。
- 自分を好きになったり新しいことにチャレンジしたりすることの大切さを学んだ。
- 岩渕さんの「人生を駆け抜ける」が印象に残った。いじめられる事がどれほどつらいか分かった。
- ジェスチャーや感情を込めて発表している姿が印象に残った。
- 自分の母も障害を持っているので、この主張に共感できた。
- いじめをこの世から無くして欲しいと思う。
- 発表を聞いて、自分の考え方が偏っていることが分かった。今年も多くのことを学べた。
- いじめや障害などの話が印象に残った。
- ひとつひとつの発表がとても印象に残った。
- 生活で思ったことを発表することは良いと思った。
- 自分と同じ中学生がこんなにも苦労して生きているということが分かった。今後このようなことを意識して生活したい。
- 説得力のある表現で分かり易かった。
- 生きて行くという強い言葉に勇気が湧いた。
- 自分のコンプレックスな部分を人前で発表するのがすごいと思った。

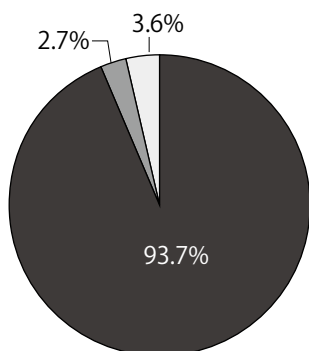
教職員

- 自分自身に起きた出来事とてもリアルに話していた。
- 「障害者」と「健常者」についてや、落語の良さがわかった。
- 未来を担う子ども達の前向きな主張を聞き、とても良い時間であった。
- いじめや差別、全国至る所の中学にも避けて通れない問題があると考えさせられた。
- 時間が掛かるが、47名全員が自分の考えを発表するような形式に出来ないものか？
- 大人でも辛い状況や体験を中学生が前向きにとらえ、そこから成長に繋げていることに心を打たれた。将来に向かってまっすぐに生きて欲しいと思う。
- とても分かり易い主張が多く、聞きやすかった。

社会人

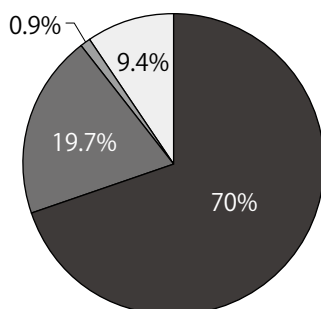
- 日常のささやかな事に 10 代の若者は深く思いを巡らせていると感じた。
- 実体験から自分の言葉で伝える表現力が素晴らしかった。
- 国際問題や障害に対する対応、いじめ問題など幅広いジャンルの主張が素晴らしかった。
- 中学生の素直な主張が今後も発揮されるよう祈りたい。
- 中学生の時にしか感じられないこと、またそれぞれの思いが詰まった発表だった。
- もっと多くの中学生を招待すべき。
- 自分の体験を素直にまとめ表現しているところが素晴らしかった。
- 中学生が感じている事、思っていることが伝わった。大人はもっと子ども達の想いや気持ちに寄り添って行くべき。
- 堂々と発表していたのが素晴らしい。
- 大人も考えさせられる大変いいお話しであった。とても良い機会であった。
- すべての発表者の真剣な思いが伝わって素晴らしい。
- 小学生の発表も聴けると良かった。発表内容はどれも素晴らしかった。
- 国が主体となり本気で子どもの未来、教育に向かい合って欲しい。
- 県大会でも拝聴した発表者がこの会場で飛躍した発表ができ、感心した。
- 発表に周囲の感覚が入りすぎた発表者もあったが、中学生としての意識を感じた。
- 60 歳を過ぎてても学び直そうと思わせる発表ばかりであった。
- 発表者の感性は素晴らしいと思った。このような機会をもっと増やして欲しい。
- 子ども達の芽をつまないような社会にする大人の責任を感じた。日本は経済社会であるがゆえ、豊かさに隠れる子どもへの悪影響（ネット社会等）を国がもっと考えるべき。
- 幅広く子ども達にこの場でこの感動を感じさせたい。
- 各人が個性を認め協調し合う社会になることを望む。
- 中学生の考えに気づかされる事がたくさんあった。島根県出身の発表者の主張はとても心に響いた。
- 自分の実体験から学んだ事を述べているので強く心に迫るものがあった。
- 大変感動した。将来彼らが活躍することを願わずにはられない。

今回の少年の主張全国大会は全体を通して満足できましたか。



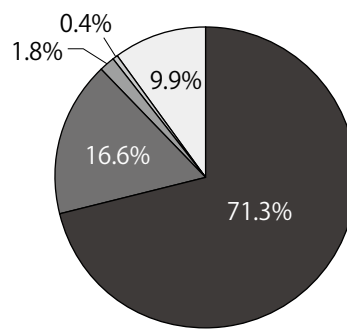
■ はい
■ いいえ
■ 未回答

現在の中学生の問題意識が高いことがわかった。



■ よくわかった
■ 少しわかった
■ あまりわからない
■ わからない
■ 未回答

少年の主張は中学生の健全育成に役立つと思った。



■ よく思う
■ 少し思う
■ あまり思わない
■ 思わない
■ 未回答

少年の主張全国大会を振り返って

<参考資料>

「少年の主張全国大会」応募者数の推移

開催年度	開催回数	参加学校数	応募者総数 (人)	中学校在学者数 (人)	在学者数に対する 応募者の割合
1979 (昭和 54) 年	第 1 回	—	—	約 496 万 7 千	—
1980 (昭和 55) 年	第 2 回	—	—	約 509 万 4 千	—
1981 (昭和 56) 年	第 3 回	—	約 50,000	約 529 万 9 千	0.9%
1982 (昭和 57) 年	第 4 回	—	約 62,000	約 562 万 4 千	1.1%
1983 (昭和 58) 年	第 5 回	—	約 120,000	約 570 万 7 千	2.1%
1984 (昭和 59) 年	第 6 回	—	約 250,000	約 582 万 9 千	4.3%
1985 (昭和 60) 年	第 7 回	3,524	387,272	約 599 万 0 千	6.5%
1986 (昭和 61) 年	第 8 回	3,649	269,518	約 610 万 6 千	4.4%
1987 (昭和 62) 年	第 9 回	4,162	536,526	約 608 万 1 千	8.8%
1988 (昭和 63) 年	第 10 回	4,011	661,234	約 589 万 6 千	11.2%
1989 (平成 元) 年	第 11 回	4,359	774,035	約 561 万 9 千	13.8%
1990 (平成 2) 年	第 12 回	4,103	701,183	約 536 万 9 千	13.1%
1991 (平成 3) 年	第 13 回	4,176	735,862	約 518 万 8 千	14.1%
1992 (平成 4) 年	第 14 回	4,185	846,735	約 503 万 7 千	16.8%
1993 (平成 5) 年	第 15 回	4,166	812,370	約 485 万 0 千	16.7%
1994 (平成 6) 年	第 16 回	4,165	826,575	約 468 万 1 千	17.7%
1995 (平成 7) 年	第 17 回	4,021	757,791	約 457 万 0 千	16.6%
1996 (平成 8) 年	第 18 回	4,333	765,071	約 452 万 7 千	16.9%
1997 (平成 9) 年	第 19 回	4,245	836,467	約 448 万 1 千	18.7%
1998 (平成 10) 年	第 20 回	4,170	858,146	約 438 万 1 千	19.6%
1999 (平成 11) 年	第 21 回	4,213	868,574	約 424 万 4 千	20.5%
2000 (平成 12) 年	第 22 回	4,187	802,185	約 410 万 4 千	19.5%
2001 (平成 13) 年	第 23 回	4,185	790,383	約 399 万 2 千	19.8%
2002 (平成 14) 年	第 24 回	4,059	693,114	約 392 万 9 千	17.6%
2003 (平成 15) 年	第 25 回	3,841	534,730	約 374 万 8 千	14.3%
2004 (平成 16) 年	第 26 回	3,822	551,723	約 366 万 4 千	15.1%
2005 (平成 17) 年	第 27 回	3,944	542,032	約 362 万 6 千	14.9%
2006 (平成 18) 年	第 28 回	4,015	544,120	約 360 万 2 千	15.1%
2007 (平成 19) 年	第 29 回	4,044	510,763	約 361 万 5 千	14.1%
2008 (平成 20) 年	第 30 回	4,018	498,029	約 359 万 2 千	13.9%
2009 (平成 21) 年	第 31 回	4,126	511,519	約 360 万 0 千	14.2%
2010 (平成 22) 年	第 32 回	4,204	515,232	約 355 万 8 千	14.4%
2011 (平成 23) 年	第 33 回	4,142	524,061	約 357 万 3 千	14.6%
2012 (平成 24) 年	第 34 回	4,127	550,112	約 356 万 7 千	15.4%
2013 (平成 25) 年	第 35 回	4,257	565,500	約 353 万 6 千	16.0%
2014 (平成 26) 年	第 36 回	4,172	563,777	約 350 万 4 千	16.1%
2015 (平成 27) 年	第 37 回	4,253	547,977	約 346 万 5 千	15.8%
2016 (平成 28) 年	第 38 回	4,278	555,559	約 340 万 6 千	16.3%
2017 (平成 29) 年	第 39 回	4,188	542,236	約 333 万 3 千	16.3%
2018 (平成 30) 年	第 40 回	4,298	522,229	約 325 万 1 千	16.1%

※中学校在学者数は、文部科学省平成 30 年度学校基本調査（確定値）区分「中学校」を参考にしています。

「少年の主張全国大会」三賞等受賞者一覧

回数	年度	受賞名	都道府県名	学校名	学年	氏名	発表テーマ
第1回	昭和54年度	総理府総務長官賞 総理府総務長官賞 総理府総務長官賞 総理府総務長官賞 総理府総務長官賞	北海道	利尻町立沓形中学校	3年	池原広文	校門に思う
			栃木	塩谷町立大宮中学校	3年	小堀芳広	私の希望
			岐阜	美山町立美山北中学校	1年	尾関良子	私の家庭
			大阪	豊中市立第5中学校	1年	長岡信男	はばたけ未来に
			岡山	倉敷市立黒崎中学校	1年	中野恵美	私の訴えたいこと
佐賀	武雄市立川登中学校	3年	松尾直子	少年として訴えたいこと			
第2回	昭和55年度	内閣総理大臣賞 総理府総務長官賞 文部大臣賞	新潟	村上市立村上第1中学校	3年	江見寛子	今、私達にできること
			広島	福山市立城東中学校	3年	森 雅子	生きる
			香川	三野町立三野津中学校	3年	佐川圭三	「やべち」に学ぶ
第3回	昭和56年度	内閣総理大臣賞 総理府総務長官賞 文部大臣賞	愛媛	松山市立雄新中学校	3年	早川明美	心の種
			鹿児島	鹿児島市立西柴原中学校	2年	寺田美重	身障者として訴えたいこと
			大阪	堺市立庭台台中学校	3年	寺西洋子	受験・仲間・心
第4回	昭和57年度	内閣総理大臣賞 総理府総務長官賞 文部大臣賞	栃木	佐野市立城東中学校	3年	松本由紀子	私は教師になりたい
			兵庫	神戸市立御影中学校	1年	和田浩介	少年として訴えたいこと～エチオピアで見たことから～
			広島	呉市立両城中学校	2年	竹下 愛	私の決心
第5回	昭和58年度	内閣総理大臣賞 総理府総務長官賞 文部大臣賞	高知	伊野町立伊野中学校	1年	山勢憲一郎	心をこめて「ありがとう」
			栃木	宇都宮市立星が丘中学校	3年	福田寿美江	両親に学ぶ
			新潟	六日市町立六日町中学校	3年	関 昭典	今、学校で考えていること
第6回	昭和59年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞	長崎	有家町立有家中学校	2年	松島吉宏	鳴らないチャイム
			富山	小杉町立小杉中学校	1年	定司美恵子	私の希望
			新潟	巻町立巻西中学校	3年	小林三枝	乗り越えて今
第7回	昭和60年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 特別賞 文部大臣賞 特別賞	愛知	名古屋市立宮中学校	3年	大島幸子	今だから言える
			新潟	黒川村立黒川中学校	3年	中野克英	寺に生まれて
			長崎	西有家町立西有家中学校	3年	安達かよ	その時私は
埼玉	秩父市立大田中学校	2年	中田昌伸	僕の家「酪農家の跡継ぎとして」			
第8回	昭和61年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 特別賞 特別賞	香川	丸亀市立南中学校	1年	垂水希実枝	ありのままの姿で
			島根	出雲市立出雲第二中学校	3年	米原のぞみ	「のぞみて・・・」母の言葉に生きる
			鹿児島	末吉町立末吉中学校	2年	白鳥哲也	手話から学んだこと
			山形	長井市立北中学校	3年	佐藤真理	一通の手紙から
			沖縄	名護市立東江中学校	1年	大城洋子	目標に向かって
第9回	昭和62年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 特別賞 特別賞	長崎	県立野崎養護学校中学部	2年	野田綾子	心で握手
			岡山	倉敷市立新田中学校	1年	岡田良平	僕の弟
			福井	武生市立武生第一中学校	2年	谷口敏和	いじめられっ子を教え！
			新潟	津南町立津南中学校	3年	小野寺優子	恵福園のおばあちゃん
			愛媛	伊予市立港南中学校	3年	一色寿恵	創り出す喜びを胸に
第10回	昭和63年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 特別奨励賞 特別奨励賞 特別奨励賞	愛媛	松山市立勝山中学校	3年	瀧本則隆	心をみがく～ロシア人基地の清掃活動を通して～
			静岡	島田市立島田第一中学校	3年	大石寿宏	国際化を考える
			鳥取	東郷町立東郷中学校	3年	石賀正元	生きる幸せ
			山形	平田町立飛鳥中学校	3年	富樫美起	国際社会へ目の覚め
			東京	私立桐朋女子中学校	3年	正木 綾	勉強より大事な勉強
			京都	京北町立周山中学校	3年	山田義治	人間の生き方について思うこと
			佐賀	私立佐賀清和中学校	3年	山田義治	人間の生き方について思うこと
第11回	平成元年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 特別奨励賞 特別奨励賞 特別奨励賞	佐賀	私立佐賀清和中学校	3年	久富 薫	地球にやさしく
			福井	鯖江市立中央中学校	2年	吉田正樹	努力のすばらしさ
			山形	鶴岡市立鶴岡第四中学校	3年	阿部 幸	生きていくということ
			千葉	大宮町立大宮喜中学校	2年	張本敏美	私の名前は張本敏美
			新潟	枕崎市立松浜中学校	3年	石黒葉子	我が家の暎
和歌山	美里町立美里中学校	3年	今岡万純	祖父の看病を通して			
第12回	平成2年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 特別奨励賞 特別奨励賞 特別奨励賞	愛媛	今治市立南中学校	2年	馬越裕美	冗言に乾杯
			福島	福島市立福島第一中学校	3年	市原 亮	部活動から学んだもの
			茨城	水戸市立国田中学校	3年	宮田敦子	自然を大切に
			新潟	新井市立新井中学校	3年	伊藤よし子	この手にかける私の願い
			滋賀	栗東町立栗東西中学校	3年	勝西紀之	人のためになること・・・
			奈良	明日香村立聖徳中学校	3年	飛鳥朝子	母の言葉を聞いて
第13回	平成3年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	島根	三隅町立三隅中学校	3年	吉村幸雄	ぼくの夢
			新潟	弥彦町立弥彦中学校	3年	皆川辰男	長男の宿命から
			佐賀	私立佐賀清和中学校	2年	城島澄子	地球のみみだ
			山形	山形大学教育学部附属中学校	2年	佐藤郁子	今、私達が街をつくる
			東京	多摩市立貝取中学校	3年	末吉優子	ボランティア活動と本当の目
			神奈川	私立函嶺白百合学園中学校	1年	早川幸恵	帰りを待つ人々
第14回	平成4年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	愛媛	松山市立西中学校	2年	泉 正徳	苦しみも悲しみも肥料に
			富山	魚津市立西部中学校	2年	高谷朋花	七十点の両親が最高
			北海道	弟子屈町立弟子屈中学校	3年	横川 心	命、育て
			山形	山形大学教育学部附属中学校	3年	伊豆田あかり	心と外見
			神奈川	横浜市立洋光台第二中学校	3年	山谷明子	私の夢
			長崎	福江市立福江中学校	1年	平山長富	心の鐘
			宮崎	宮崎市立宮崎東中学校	3年	泉裕一郎	待っていた学校週五日制
第15回	平成5年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞 審査委員長激励賞	青森	十和田市立犬深内中学校	2年	大久保礼子	今を大切に
			沖縄	石垣市立石垣中学校	3年	金城紫穂	ぬくもり
			長野	更埴市立屋代中学校	3年	松沢かおる	ブルタブと私
			福島	本宮町立本宮第一中学校	3年	国分かおり	「生きる」ということ
			和歌山	下津町立下津第二中学校	1年	浜 英樹	僕の育った塩津で
			岡山	倉敷市立福田南中学校	1年	阪本真一	レイ = アイクマンそれは本当の友達
群馬	県立盲学校中学部	3年	長峰美枝	私の夢			
第16回	平成6年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞	沖縄	沖縄市立山内中学校	3年	稲嶺彩子	夢を持って
			栃木	私立作新学院中等部	3年	高内めぐみ	父が教えてくれたこと
			秋田	平鹿町立醍醐中学校	3年	菅原嘉治	りんご農家に生まれて
			茨城	協和町立協和中学校	3年	河田友里	力強く、わたしは生きたい
第17回	平成7年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	岡山	倉敷市立西中学校	1年	小野めぐみ	私の戦い
			茨城	協和町立協和中学校	2年	中里成喜	自分自身に克つために
			愛知	旭町立旭中学校	3年	安藤佳代子	旭の町に生きる
			東京	荒川区立日暮里中学校	1年	高 宗哲	僕たちができること
			福岡	勝山町立勝山中学校	2年	義経千晶	勇気を
第18回	平成8年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	東京	台東区立下谷中学校	3年	岡村朋子	蜘蛛の巣
			熊本	山鹿市立鶴城中学校	3年	神崎真由	私の試験
			島根	西郷町立西郷南中学校	1年	常角和代	広い目で
			静岡	沼津市立第五中学校	3年	露木義章	A先輩から学んだこと
			三重	私立皇學館中学校	2年	宮本真衣	海の命を守ろう～おばあさんに教えられたこと～
第19回	平成9年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	山梨	韭崎市立韭崎東中学校	3年	高保かおり	在宅介護から考えたこと
			島根	西郷町立西郷南中学校	3年	吉田 修	きゅうり
			鹿児島	有明町立宇都中学校	3年	坂口潤成	僕の町 - 僕の夢
			神奈川	山北町立清水中学校	1年	武尾一興	中学生になって
			奈良	生駒市立緑ヶ丘中学校	1年	中地まりあ	自然の魂

回数	年度	受賞名	都道府県名	学校名	学年	氏名	発表テーマ
第20回	平成10年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞	山形 山口 茨城 愛媛	長井市立長井南中学校	3年	鈴木智恵	ピナアダム、私の道しるべとして
				徳山市立岐陽中学校	3年	川崎祐樹	同じ人間だから
				阿見町立阿見中学校	3年	湯原瑞紀	みんなで学校を創ろう
				肱川町立肱川中学校	3年	竹本咲子	うちは五人家族
第21回	平成11年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞	栃木 東京 滋賀 岡山	西那須野町立西那須野中学校	3年	松林朝子	家族と支えあう中で
				港区立青山中学校	3年	秋田絵麻	本当の幸せとは・・・
				石部町立石部中学校	3年	中川智香子	さわやかな学校をめぐらして～トイレからの発信～
				倉敷市立西中学校	3年	花田春香	あなたは、我が日本愛してますか？
第22回	平成12年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣奨励賞 審査委員会特別賞	鹿児島 新潟 奈良 富山	喜界町立第二中学校	3年	前泊佑香	鳥うたの心を伝えたい
				六日町立六日町中学校	1年	天海琢磨	ぼくは僕
				私立智辯学園中学校	1年	北側真由佳	私のバリアフリーの第一歩
				高岡市立南星中学校	3年	炭谷英信	言葉の思い出から学んだもの
第23回	平成13年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	東京 大阪 鹿児島 静岡 和歌山	足立区立第十四中学校	1年	荒谷真理子	努力が教えてくれた事
				大阪明星学園明星中学校	3年	植田倫啓	「ケータイ」と「僕」
				志布志町立志布志中学校	2年	西国領君嘉	日本の心を舞う
				下田市立稲生沢中学校	3年	河井千佳	私の個性
第24回	平成14年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞	長崎 秋田 沖縄 長野	島原市立第三中学校	3年	西 誠	これから頑張るんだ
				神岡町立平和中学校	2年	杉澤綾香	ホームステイとホストファミリー体験記
				浦添市立港川中学校	3年	濃次オースティン誠	ダブルの人生を過ごしたい
				大町市立第一中学校	3年	柴原理志	揺るがない想い
第25回	平成15年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	山形 宮崎 岐阜 福島 富山	山形市立蔵王第一中学校	2年	澤田充史	僕の見たヒロシマ
				山ノ口町立山ノ口中学校	1年	徳留彩乃	私になりたい
				七宗町立神測中学校	2年	上野由貴	世界が一つになるために
				霊山町立霊山中学校	3年	佐藤寛和	ハンデなんか怖くない - 僕の挑戦 -
第26回	平成16年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	山口 岩手 富山 栃木 徳島	長門市立深川中学校	2年	中嶋詩織	ともに生きる
				北上市立南中学校	3年	菅原周平	嘘の言葉と言葉の話
				水見市立南部中学校	2年	沈道 静	茶道の香りが教えてくれたこと
				真岡市立真岡中学校	3年	菱沼優希	受け継がれる命 - その重さを・・・
第27回	平成17年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞	宮崎 岩手 東京 山形	三股町立三股中学校	3年	福田聖伍	命をつなぐアサガオ
				盛岡市立上田中学校	3年	坂本潤奈	私は地球人
				墨田区立立花中学校	3年	渡辺隆介	今に生かそう「江戸草鞋」を
				南陽市立宮内中学校	3年	平 暁祐	「とんと音」を未来へ
第28回	平成18年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞	鹿児島 熊本 愛知	始良町立山田中学校	1年	新園祐花	今を生きる私
				南阿蘇村立白水中学校	3年	後藤奈々	私と生きる
				豊田市立崇館中学校	3年	蔭ぶんてい	なぜ公、そして謝々
				豊田市立美里中学校	3年	武田聡美	「命」を生きる人との出会い
第29回	平成19年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞	愛知 埼玉 愛媛	加須市立昭和中学校	2年	町田卓哉	何だっていいんだあ
				内子町立大瀬中学校	1年	東影喜子	猪の涙
				産山村立産山中学校	3年	中村那津三	なぜ母牛「あやか」は死んだのか
				石垣市立大濱中学校	3年	新城利絵	島の心をメロディにのせて
第30回	平成20年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞	熊本 沖縄 富山	高岡市立志貴野中学校	3年	小久保緑	田んぼと私
				竹田市立竹田中学校	3年	廣瀬岳	メッセージ ～ 特攻基地・知覧～
				気仙沼市立気仙沼中学校	3年	志田晶	私も「小さな波」となって
				牧之原市立相良中学校	3年	瀧谷美紀	支えられた私
第31回	平成21年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	大分 宮城 静岡 新潟 奈良 島根	村上市立平林中学校	3年	小池尚輝	音のない世界、声のない会話
				智辯学園奈良カレッジ中学部	3年	小川歌穂	スマイルと真心はタダ
				安来市立広瀬中学校	3年	田邊光	故郷を思っ
				沼津市立第三中学校	3年	内村繪笑	命
第32回	平成22年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	静岡 愛知 愛媛 長崎	豊田市立足助中学校	3年	藤井成一	父の言葉の意味を知って
				新居浜市立西中学校	3年	飯尾まい	命のチキンカレー
				佐世保市立黒島中学校	3年	松本朋之	黒島だからこそ
				いわき市立勿来第二中学校	3年	瓜生健悟	震災を乗り越えて
第33回	平成23年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	福島 新潟 東京 岩手	柏崎市立第一中学校	3年	西澤望美	過去と今と未来を生きる
				葛飾区立常盤中学校	2年	齊藤藤香	家族の本当の意味
				陸前高田市立気仙中学校	3年	小笠原和恵	高らかに 響け
				千葉県立千葉中学校	3年	山本恭輔	リアルに人とながるといふこと
第34回	平成24年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	千葉 福井 熊本 福島	福井県立盲学校	3年	山本穰梨	私の夢 私の生き方
				宇土市立網田中学校	3年	加来萌	父と私がふるさと網田を愛する理由
				いわき市立中央台北中学校	3年	山野邊のどか	助け合いのバトン
				飯塚市立飯塚第一中学校	3年	山本由梨	子には宝～自分の命より大切なもの
第35回	平成25年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	宮城 大分 兵庫 愛知	酒田市立第六中学校	3年	菅原すみれ	唄い継ぐ想い
				中土佐町立久礼中学校	2年	林萌桃	いのちの花・咲いて
				吉賀町立柿木中学校	3年	河野鉄太	鬼退治
				豊田市立石野中学校	3年	安藤明日香	伝統を受け継ぐ
第36回	平成26年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	福岡 山形 高知 島根 沖縄	飯塚市立飯塚第一中学校	3年	山本由梨	子には宝～自分の命より大切なもの
				酒田市立第六中学校	3年	菅原すみれ	唄い継ぐ想い
				中土佐町立久礼中学校	2年	林萌桃	いのちの花・咲いて
				吉賀町立柿木中学校	3年	河野鉄太	鬼退治
第37回	平成27年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	広島 東京 大阪 群馬 沖縄	広島市立国泰寺中学校	2年	藤井志穂	語る思いと聞く思い
				板橋区立中台中学校	3年	張哲語	中国と日本の狭間にて
				堺市立登美丘中学校	3年	伊勢川翠	素晴らしい奇跡の集集体
				明照学園樹徳中学校	3年	藤沼花音	10万分の1.5の奇跡
第38回	平成28年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	岐阜 広島 三重 新潟	関市立旭ヶ丘中学校	3年	大見夏鈴	障がいには個性
				広島市立二葉中学校	2年	牟田悠一郎	戦争を知ること
				四日市市立羽津中学校	3年	中前純奈	伝えたいこと
				富山県立五泉北中学校	1年	高橋心太郎	みんなが幸福な社会を
第39回	平成29年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	新潟 島根 群馬 愛知 鹿児島	新潟県立燕中等教育学校	2年	平澤芽芽	仲間を守る一言
				海士町立海士中学校	3年	井手上漠	カラフル
				太田市立南中学校	3年	森田愛美	私は、私の足で生きていく。
				蒲郡市立蒲郡中学校	3年	荒島彩乃	たった一言が言えなくて
第40回	平成30年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	山形 島根 熊本 静岡 愛知	天童市立第三中学校	3年	岩淵礼姫	人生を駆け抜ける
				隠岐の島町立西郷中学校	1年	高梨はな	ダブル
				御船町立御船中学校	3年	坂本優	響け！幸せのメロディー
				浜松市立佐久間中学校	3年	内山ほの葉	自分を好きになる
豊田市立井郷中学校	3年	富田真亜玖	思いやりは言葉を超える				

平成 30 年度都道府県大会実施概要

都道府県名	主催者		大会名	
	開催期日		会場	
	発表者数	応募者数	参加学校数	視聴者数
	実施内容			

北海道・東北ブロック (1道6県 応募者数 90,810名)

北海道	1	公益財団法人北海道青少年育成協会、北海道 平成 30 年 9 月 7 日 (金)	北海道 150 年記念北海道青少年育成大会 「少年の主張」全道大会 道民活動センター かでる 2.7	
	16 名	36,420 名	325 校	※北海道胆振東部地震の為、書面審査を実施。
	各総合振興局・振興局地区大会から推薦された最優秀者及び札幌市の代表者 2 名による北海道大会を開催。 最優秀賞 1 名、優秀賞 (北海道教育委員会教育長賞・北海道 PTA 連合会会長賞・(公財)北海道青少年育成協会会長賞各 1 名)、 北海道 150 年記念特別賞 (審査員特別賞) 1 名、北海道コンソード札幌特別賞 5 名を選考。審査員 5 名			
青森県	2	青少年育成青森県民会議 平成 30 年 9 月 10 日 (月)	第 40 回青森県少年の主張大会 六戸町文化センター	
	8 名	2,896 名	11 校	350 名
県内の中学生から募集し、原稿審査で選考された 8 名による青森県大会を開催。 最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、優良賞 5 名を選考。審査員 5 名				
岩手県	3	わたしの主張岩手県大会実行委員会【岩手県、岩手県教育委員会、岩手県警察本部、(公社)岩手県青少年育成県民会議、(公社)岩手県防犯協会連合会、(株)岩手日報社、岩手県中学校文化連盟】 平成 30 年 9 月 14 日 (金)	第 20 回わたしの主張岩手県大会 田園ホール (矢巾町文化会館)	
	18 名	3,987 名	159 校	565 名
	地区大会より推薦された 17 名及び県大会会場市町村から推薦された 1 名の計 18 名による岩手県大会を開催。 最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、優良賞 3 名を選考。審査委員 7 名			
宮城県	4	青少年のための宮城県民会議、河北新報社 平成 30 年 9 月 26 日 (水)	平成 30 年度少年の主張宮城県大会 白石市立白石中学校	
	14 名	19,856 名	182 校	470 名
	12 地区で地区大会を実施し、県大会に出場する代表者 1～2 名 (仙台市は各区 1 名、仙台地区は 2 名、他地区は 1 名、開催地区からはプラス 1 名) による宮城県大会を開催。 宮城県知事賞 1 名、青少年のための宮城県民会議会長賞 2 名、優良賞 (県大会出場者全員) を選考。審査員 6 名			
秋田県	5	公益社団法人青少年育成秋田県民会議、秋田県 平成 30 年 9 月 14 日 (金)	わたしの主張 2018 ～第 40 回少年の主張秋田県大会～ 秋田市立秋田東中学校	
	13 名	4,760 名	30 校	570 名
	県北・県中央・県南地区で予選大会を開催。各地区大会優秀者 12 名及び、県大会開催学校推薦者 1 名の計 13 名による秋田県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 4 名、優良賞 8 名を選考。審査委員 6 名			
山形県	6	公益社団法人山形県防犯協会連合会、山形県青少年育成県民会議、株式会社山形新聞社、山形放送株式会社 平成 30 年 9 月 24 日 (月・振替休日)	第 57 回山形県少年の主張大会 ～いま伝えたい 私のメッセージ～ 山形国際交流プラザ 山形ビッグウイング 大会議室	
	15 名	9,067 名	96 校	200 名
	各ブロック大会において選考された代表者 15 名による山形県大会を開催。 最優秀 1 名、優秀 2 名、優良 2 名を選考。審査員 8 名			
福島県	7	福島県青少年育成県民会議 平成 30 年 9 月 20 日 (木)	第 40 回少年の主張福島県大会 白河文化交流館 コミネス	
	16 名	13,824 名	181 校	766 名
	各青少年育成市町村民会議から推薦された作品の中で、作文審査により選ばれた 15 名及び開催地の中学生 1 名による福島県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 5 名、優良賞 10 名を選考。審査委員 7 名			

関東・甲信越静ブロック (1都10県 応募者数 152,837名)

茨城県	8	公益社団法人茨城県青少年育成協会 平成 30 年 9 月 15 日 (土)	平成 30 年度少年の主張茨城県大会 龍ヶ崎市文化会館 大ホール	
	10 名	17,377 名	150 校	1,100 名
	各中学校 2 作品以内の推薦された作品を審査委員会において、優秀作品 10 作品を選出。選出された 10 作品による茨城県大会を開催。優秀賞 (県大会出場者 10 名)、茨城県知事賞、茨城県議会議長賞、茨城県教育委員会教育長賞、水戸西ライオンズクラブ会長賞 (茨城県知事賞受賞者)、鹿島アントラーズ賞 (茨城県知事賞受賞者、茨城県議会議長賞受賞者、茨城県教育委員会教育長賞受賞者) を選考。審査委員 8 名 (内 2 名は過去の大会発表者である高校生)			
栃木県	9	栃木県青少年育成県民会議 (公益財団法人とちぎ未来づくり財団)、栃木県、栃木県教育委員会、市町村、市町村教育委員会、各地区青少年育成連絡協議会 平成 30 年 9 月 22 日 (土)	第 41 回栃木県少年の主張発表県大会 栃木県総合文化センター サブホール	
	16 名	16,705 名	165 校	260 名
	県内 8 地区で各中学校の代表 1 名が参加する地区大会を開催し、各地区大会で選出された 16 名による栃木県大会を開催。 最優秀賞 (栃木県知事賞) 1 名、優秀賞 (栃木県教育委員会教育長賞) 3 名、奨励賞 (栃木県青少年育成県民会議理事長賞) 12 名を選考。審査委員 9 名			
群馬県	10	群馬県、群馬県教育委員会、群馬県青少年育成推進会議 平成 30 年 9 月 15 日 (土)	第 40 回少年の主張群馬県大会 群馬県公社総合ビル 多目的ホール	
	16 名	45,895 名	171 校	190 名
	市町村大会、教育事務所ブロック大会を経て選出された 16 名による群馬県大会を開催。 最優秀賞 1 名、優秀賞 4 名、努力賞 11 名を選考。審査委員 7 名			
埼玉県	11	埼玉県、埼玉県教育委員会、青少年育成埼玉県民会議 平成 30 年 8 月 25 日 (土)	平成 30 年度未来を担う私たちの主張 ～青少年の主張大会～ 埼玉県県民健康センター 大ホール	
	5 名	20,479 名	260 校	280 名
	作文審査により選出された 5 名 (中学生の部) による埼玉県大会を開催。 最優秀賞 (知事賞) 1 名、優秀賞 (教育長賞) 1 名、優良賞 (県民会議会長賞) 3 名、特別賞 6 名を選考。審査委員 12 名他			

12 千葉県	千葉県青少年総合対策本部（千葉県、千葉県教育委員会、千葉県警察本部）	第40回「私の思い」～中学生の主張～千葉県大会	
	平成30年9月22日（土）	千葉県教育会館 大ホール	
	12名	2,353名	35校 220名
	応募作文の中から学校長及び団体長推薦作文について、一次、二次の作文審査を行い、選出された12名による千葉県大会を開催。最優秀賞（県知事賞）1名、優秀賞2名、審査員特別賞1名、奨励賞8名を選考。審査員8名		
13 東京都	東京都	平成30年度 中学生の主張東京都大会	
	平成30年9月9日（日）	東京都庁第一本庁舎 大会議場	
	10名	6,878名	62校 106名
	東京都による作文審査を行い、東京都代表選考発表者10名及び努力賞受賞者10名を選出。東京都代表選考者10名による東京都大会を開催。知事賞1名、東京都教育委員会賞2名、優良賞7名を選考。審査委員6名		
14 神奈川県	神奈川県	平成30年度 中学生の主張 in かながわ発表大会	
	平成30年9月30日（日）	神奈川県立青少年センター（多目的プラザ）	
	7名	1,513名	53校 58名
	原稿審査による事前審査会を実施し、発表大会出場者7名、奨励賞受賞者10名を選出。発表大会出場者7名による神奈川県大会を開催。最優秀賞（神奈川県知事賞）1名、優秀賞6名（神奈川県教育長賞・神奈川県福祉子どもみらい局長賞・神奈川新聞社賞・NHK横浜放送局賞・テレビ神奈川賞・神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞各1名）を選考。審査委員5名		
15 新潟県	新潟県、新潟県教育委員会、新潟県青少年健全育成県民会議	平成30年度新潟県少年の主張大会～わたしの主張～	
	平成30年9月22日（土）	白根学習館ラスベックホール	
	14名	24,956名	188校 400名
	県内を13地区に分け、地区ごとに発表者を選出、各地区大会において選出された14名による新潟県大会を開催。最優秀賞（県知事賞）1名、優秀賞（県教育長賞）2名、奨励賞（県民会議会長賞）11名、奨励賞の中から審査員特別賞1名を選考。審査委員9名		
16 山梨県	公益財団法人山梨県青少年協会、青少年育成山梨県民会議事業実行委員会	第40回少年の主張山梨県大会	
	平成30年8月19日（日）	山梨県立青少年センター	
	12名	677名	22校 126名
	中学校において校内審査後、校長推薦のうえ、県大会に応募。事前審査において発表者を選出。選出された12名による山梨県大会を開催。最優秀（山梨県教育長賞）1名、優秀賞（山梨日日新聞社賞・山梨放送賞・テレビ山梨社長賞・NHK甲府放送局長賞各1名）（青少年育成山梨県民会議会長賞7名程度）を選考。審査委員8名		
17 長野県	長野県、長野県教育委員会、長野警察本部、長野県将来世代応援県民会議	第40回少年の主張長野県大会	
	平成30年9月14日（金）	木曾町立木曾町中学校	
	11名	1,284名	22校 272名
	各地域事務局長から推薦された11名（各事務局から1名、但し開催中学校がある市町村を所轄する事務局は、開催中学校推薦を含む2名）による長野県大会を開催。県知事賞1名、優秀賞2名、優良賞8名を選考。審査委員6名		
18 静岡県	静岡県教育委員会、静岡県青少年育成会議	「わたしの主張2018」静岡県大会	
	平成30年8月17日（金）	静岡市清水文化会館マリナート	
	13名	14,720名	161校 420名
	静岡・静岡西教育事務所管内は作文審査会、静岡市、浜松市は各市で大会を実施。選出された13名による静岡県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞3名、優良賞9名、来場した中学生全員による共感賞1名を選考。審査委員7名		

中部・近畿ブロック（2府10県 応募者数 171,694名）

19 富山県	富山県、富山県教育委員会、青少年育成富山県民会議、魚津市、魚津市教育委員会、青少年育成魚津市市民会議	第40回少年の主張富山県大会	
	平成30年8月23日（木）	新川文化ホール	
	11名	2,002名	28校 250名
	各中学校から3点程度の推薦された作品を市町村教育委員会が10点程度選考・推薦し、審査委員会において作文審査により選出された11名による富山県大会を開催。最優秀賞1名、審査員特別賞1名、優秀賞9名を選考。審査委員8名		
20 石川県	石川県健民運動推進本部、石川県、石川県教育委員会	平成30年度少年の主張石川県大会	
	平成30年9月1日（土）	石川県青少年総合研修センター	
	16名	27,656名	72校 100名
	各地区大会から選出された16名（各地区4名ずつ）による石川県大会を開催。最優秀賞（石川県知事賞）1名、優秀賞（石川県教育委員会賞）2名、奨励賞（石川県健民運動推進部長賞）13名を選考。審査委員6名		
21 福井県	公益財団法人青少年育成福井県民会議、福井県青少年総合対策本部	平成30年度「少年の主張」コンクール福井県大会	
	平成30年8月20日（月）	坂井市みくに市民センター みくに未来ホール	
	8名	10,489名	45校 220名
	ブロック審査で選出された、8名による福井県大会を開催。福井県知事賞1名、（公財）青少年育成福井県民会議会長賞1名、国際ソロプチミスト福井会長賞1名、福井ライオンズクラブ賞1名、福井新聞社賞1名、NHK福井放送局賞1名、FBC賞1名、福井テレビ賞1名を選考。審査委員10名		
22 愛知県	愛知県、愛知県青少年育成県民会議、愛知県教育委員会、碧南市、碧南市教育委員会	少年の主張愛知県大会	
	平成30年8月29日（水）	碧南市芸術文化ホール	
	14名	50,572名	444校 430名
	各中学校から1名を選出、市町村教育委員会は学校数による規程通りブロックへ推薦。各ブロックより選出された計14名による愛知県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞4名、特別賞1名、共感賞1名、奨励賞14名を選考。審査委員7名		
23 三重県	公益財団法人三重こどもわかもの育成財団、津地区中学生のメッセージ実行委員会	中学生のメッセージ2018（第40回少年の主張三重県大会）	
	平成30年8月26日（日）	津リージョンプラザ お城ホール	
	14名	10,166名	71校 350名
	1次選考は提出された作品の中から40作品程度を、2次選考で「中学校のメッセージ」で発表する14名と地域優秀者26名程度を選考。選出された14名による三重県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞3名、優良賞10名を選考。審査委員8名		

24	岐阜県、公益社団法人岐阜県青少年育成県民会議	第40回少年の主張岐阜県大会～わたしの主張2018～		
	平成30年8月8日(水)	大垣市 スイトピアセンター 文化ホール		
岐阜県	17名	16,358名	182校	400名
	市町村単位で審査が行われ、各圏域より推薦された計17名による岐阜県大会を開催。 県知事賞1名、青少年育成県民会議会長賞1名、県教育委員会賞1名、岐阜新聞・岐阜放送賞1名、優秀賞13名を選考。審査委員7名			
25	滋賀県青少年育成県民会議、大津市、大津市青少年育成市民会議	滋賀県第21回中学生広場「私の思い2018」県広場		
	平成30年8月18日(土)	大津市和邇文化センター		
滋賀県	12名	27,164名	104校	400名
	市町民会議から提出のあった意見作文の中から県広場での発表者12名による滋賀県大会を開催。 最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞9名を選考。審査委員10名			
26	公益社団法人京都府青少年育成協会、京都府PTA協議会、京都市PTA連絡協議会	平成30年度第40回「少年の主張京都府大会」		
	平成30年9月23日(日・祝)	京都府立総合社会福祉会館(ハートピア京都)「大会議室」		
京都府	20名	2,874名	32校	200名
	応募された作文の中から、審査委員会により選出された大会発表者20名による京都府大会を開催。 京都府知事賞1名、京都府議会議長賞1名、京都府青少年育成協会会長賞1名、京都府教育委員会教育長賞1名、京都市教育長賞1名、京都市町村教育委員会連合会会長賞1名、京都府公立中学校長会会長賞1名、京都府PTA協議会会長賞1名、京都市PTA連絡協議会会長賞1名、京都新聞賞1名、KBS京都賞1名、京都府青少年育成協会会長奨励賞9名を選考。審査委員9名			
27	青少年育成大阪府民会議、大阪府	第40回中学生の主張～伝えよう！君のメッセージ～		
	平成30年9月2日(日)	クレオ大阪南(大阪市立男女共同参画センター南部館)ホール		
大阪府	9名	1,624名	13校	238名
	府内からの応募作品の中から選考委員による作文審査において10名以内による大阪府大会を開催。最優秀賞(大阪府知事賞)1名、優秀賞(大阪府教育委員会賞・NHK大阪放送局長賞・国際ソロプチミスト大阪賞)3名、優良賞(審査委員特別賞)1名、優良賞5名、努力賞10名以内を選考。審査委員6名			
28	公益財団法人兵庫県青少年本部	平成30年度少年の主張兵庫県大会～中学生のメッセージ2018～		
	平成30年9月22日(土)	兵庫県民会館 けんみんホール		
兵庫県	9名	8,411名	69校	212名
	県内10地区において原稿審査及び地方大会で選出された10名による兵庫県大会を開催。 知事賞1名、青少年本部理事長優秀賞2名、青少年本部理事長奨励賞7名、審査員7名			
29	奈良県、奈良県教育委員会、奈良県子ども・若者支援団体協議会	第40回「少年の主張」奈良県大会～わたしの主張2018～		
	平成30年9月9日(日)	生駒市コミュニティセンター文化ホール		
奈良県	10名	3,267名	21校	200名
	原稿審査により選出された10名による奈良県大会を開催。 最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞7名を選考。審査員8名			
30	公益社団法人和歌山県青少年育成協会	「少年メッセージ2018」和歌山県大会		
	平成30年7月28日(土)	和歌山市民会館		
和歌山県	18名	11,111名	116校	500名
	応募作文から、和歌山市及び各振興局単位で選出された優秀作品各2名(県大会開催地方は4名)合計18名による和歌山県大会を開催。金賞1名、銀賞2名、銅賞3名、特別賞若干名を選考。審査委員8名			

中国・四国ブロック(9県 応募者数 49,962名)

31	青少年育成鳥取県民会議	平成30年度「少年の主張鳥取県大会」		
	平成30年9月12日(水)	鳥取市文化ホール		
鳥取県	12名	1,029名	17校	450名
	応募作品の中から書類審査を行い、選出された12名による鳥取県大会を開催。 最優秀賞(鳥取県知事杯)1名、優秀賞(県教育長杯、県議会議長杯、県市長会長杯、NHK鳥取放送局長杯)5名、優良賞6名を選考。審査委員7名			
32	青少年育成島根県民会議、島根県中学校長会、安来市中学校長会	平成30年度 少年の主張島根県大会		
	平成30年9月27日(木)	安来市総合文化ホール アルテピア 大ホール		
島根県	17名	17,580名	98校	900名
	市郡中学校校長より推薦された17名による島根県大会を開催。 島根県知事賞1名、島根県教育委員会教育長賞1名、島根県警察本部長賞1名、青少年育成島根県民会議会長賞1名、審査員特別賞2名、優秀賞11名を選考。審査委員7名			
33	公益社団法人岡山県青少年育成県民会議	第40回「少年の主張」岡山県大会「いま、中学生が訴えたいこと」		
	平成30年8月17日(金)	岡山県天神山文化プラザ		
岡山県	15名	6,159名	20校	120名
	応募作品から審査の上、15名の入賞者による岡山県大会を開催。 最優秀賞1名、優秀賞4名、優良賞：最優秀賞・優秀賞受賞者以外を選考。審査員7名			
34	公益社団法人青少年育成広島県民会議、広島県中学校話し方連盟	「少年の主張」・中学生話し方大会2018		
	平成30年9月8日(土)	エソール広島		
広島県	22名	3,595名	42校	250名
	提出された原稿を主催者において審査し、選考された22名による広島県大会を開催。 広島県知事賞1名、青少年育成広島県民会議会長賞1名、広島県中学校話し方連盟会長賞1名、国際ソロプチミスト広島会長賞1名、広島清流ライオンズクラブ会長賞1名、優秀賞6名、優良賞を選考。審査員11名			
35	山口県青少年育成県民会議	青少年育成県民のつどい 少年の主張コンクール山口県大会		
	平成30年8月25日(土)	カリエンテ山口(山口県婦人教育文化会館)		
山口県	8名	1,125名	16校	150名
	一次審査(各市町教育委員会等)及び二次審査(青少年育成県民会議)において作文審査により選出された8名による山口県大会を開催。最優秀賞(知事賞)1名、優秀賞(教育長賞、県民会議会長賞)2名、優良賞5名を選考。審査員5名			

36 徳島県	青少年育成徳島県民会議、徳島県保護司会連合会、徳島県中学校長会	第 64 回青少年非行防止県下中学校生徒弁論大会並びに平成 30 年度少年の主張徳島県大会	
	平成 30 年 9 月 12 日 (水)	徳島県立 21 世紀館イベントホール	
	10 名	7,456 名	72 校
中学校生徒弁論大会において保護区単位ブロック別で選出された代表 10 名による徳島県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞第一席 1 名、優秀賞 8 名を選考。審査委員 10 名			
37 香川県	第 68 回 “社会を明るくする運動” 香川県推進委員会、青少年育成香川県民会議、香川県中学校長会、香川県保護司会連合会	第 69 回香川県中学校生徒弁論大会・第 40 回「少年の主張」香川県大会	
	平成 30 年 7 月 11 日 (水)	高松国分寺ホール	
	13 名	10,849 名	44 校
地区大会の最優秀賞受賞者 (高松地区は 5 名) 13 名による香川県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 3 名、優良賞 9 名を選考。審査委員 7 名			
38 愛媛県	愛媛県、愛媛県教育委員会、愛媛県青少年育成協議会	平成 30 年度愛媛の未来をひらく少年の主張大会	
	平成 30 年 9 月 1 日 (土)	愛媛県生涯学習センター 県民小劇場ホール	
	10 名	1,465 名	14 校
主催者において、原稿審査により大会発表者 10 名による愛媛県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、優良賞 7 名を選考。審査委員 5 名			
39 高知県	青少年育成高知県民会議	平成 30 年度 第 40 回 少年の主張高知県大会	
	平成 30 年 9 月 9 日 (日)	高知市立自由民権記念館	
	10 名	704 名	11 校
作文審査により選出された 10 名による高知県大会を開催。最優秀賞 1 名、会長賞 1 名、優秀賞 2 名、優良賞 6 名を選考。審査委員 5 名			

九州ブロック (8 県 応募者数 56,926 名)

40 福岡県	公益社団法人福岡県青少年育成県民会議、那珂川町、那珂川町教育委員会、那珂川町青少年育成町民会議	平成 30 年度少年の主張福岡県大会	
	平成 30 年 9 月 8 日 (土)	ミリカローデン那珂川	
	16 名	12,769 名	78 校
「少年の主張」関連行事において選出された作品及び地区大会推薦 3 作品について審査のうえ上位 15 名程度による福岡県大会を開催。福岡県知事賞 1 名、福岡県教育委員会賞 1 名、優秀賞第一席 1 名、審査委員会特別賞 1 名、優秀賞 11 名を選考。審査委員 10 名程度			
41 佐賀県	佐賀県、佐賀県教育委員会、佐賀県青少年育成県民会議	平成 30 年度「第 40 回少年の主張佐賀県大会」	
	平成 30 年 8 月 19 日 (日)	アバンセホール (佐賀県立男女共同参画センター・佐賀県立生涯学習センター)	
	10 名	945 名	17 校
各学校において応募者を募集し、推薦されたものを予選審査会により選出、選出者 10 名による佐賀県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、優良賞 7 名を選考。審査委員 6 名			
42 長崎県	長崎県青少年育成県民会議、諫早市、諫早市教育委員会、諫早市公聴会、諫早市 PTA 連合会、諫早市青少年育成連絡協議会	第 40 回少年の主張長崎県大会「わたしの主張 2018」	
	平成 30 年 8 月 22 日 (水)	諫早文化会館大ホール	
	12 名	12,260 名	127 校
第 1 次選考は、各市町の主管課、県立・国立・私立の学校について本県民会議が委託した機関で行い、第 2 次選考は県民会議が設置する選考委員会で行い、選出された 12 名による長崎県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 (長崎新聞社賞、NHK 賞、長崎県校長会賞、長崎県 PTA 連合会賞、ココロねっこ賞) 5 名、優良賞 6 名を選考。審査委員 6 名			
43 熊本県	熊本県、熊本県教育委員会、熊本県青少年育成県民会議、菊池市、菊池市教育委員会	第 40 回「少年の主張」熊本県大会	
	平成 30 年 9 月 8 日 (土)	菊池市文化会館	
	14 名	1,802 名	45 校
事前審査会での作文審査により選出された各地区等代表の 12 名、開催地推薦 2 名の計 14 名による熊本県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、奨励賞 3 名、入選 8 名を選考。審査委員 6 名			
44 大分県	大分県青少年育成県民会議	第 40 回少年の主張大分県大会	
	平成 30 年 8 月 22 日 (水)	佐伯市弥生文化会館	
	10 名	1,304 名	25 校
各学校等による第 1 次審査、審査員による 2 次審査を行い、県大会出場者 10 名及び佳作を決定する。県大会出場者 10 名による大分県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、優良賞 7 名、大分県教育長賞 1 名、共感賞 (中学生審査員選出) 1 名を選考。審査委員 5 名			
45 宮崎県	公益社団法人宮崎県青少年育成県民会議	平成 30 年度 青少年の主張宮崎県大会	
	平成 30 年 8 月 17 日 (金)	宮崎市民プラザ オールブライトホール	
	10 名	1,424 名	27 校
各学校から応募された作品の中から、事前審査により選出された 10 名による宮崎県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、優良賞 7 名を選考。審査委員 5 名			
46 鹿児島県	鹿児島県、鹿児島県青少年育成県民会議	平成 30 年度「第 40 回 少年の主張 鹿児島県大会」	
	平成 30 年 8 月 1 日 (水)	鹿児島市立甲東中学校	
	10 名	4,622 名	53 校
各学校から提出された作文を審査、審査委員会により選出された 10 名による鹿児島県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、優良賞 7 名を選考。審査委員 7 名			
47 沖縄県	公益社団法人沖縄県青少年育成県民会議	第 40 回沖縄県少年の主張大会	
	平成 30 年 9 月 26 日 (水)	宜野湾市民会館 大ホール	
	12 名	21,800 名	122 校
市町村大会を実施し、その代表で地区大会 (6 地区、9 ~ 16 名) を開催する。地区大会により選出された 12 名による沖縄県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、審査員特別賞 1 名、優良賞 8 名を選考。審査委員 5 名			

第 41 回少年の主張全国大会 開催のお知らせ

- 開催日時：未定（2019 年 11 月以降で調整中）
- 開催場所：国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟大ホール
（住所：〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号）
- 対象：日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。
※国籍は問わないが、日本語で発表できること。
なお、作品は未発表、自作のものに限ります。
- 主催：国立青少年教育振興機構
- 協力：都道府県、青少年育成都道府県民会議、全日本中学校長会、
（予定）日本私立中学高等学校連合会、公益社団法人日本 PTA 全国協議会
- 後援：内閣府、文部科学省、東京都教育委員会、日本放送協会、
（予定）一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会
社会福祉法人全国社会福祉協議会
- 主張発表者（出場者）・発表内容：
 - (1) 主張発表者
各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者 1 名、計 47 名の中からブロック代表として選ばれた 12 名が主張発表を行います。
 - (2) ブロック代表定数
全国を 5 ブロックに分け、ブロック毎に出場者数を定め、それぞれの数のブロック代表を選出します。
 - 北海道・東北ブロック・・・2 名
 - 関東・甲信越静ブロック・・・3 名
 - 中部・近畿ブロック・・・3 名
 - 中国・四国ブロック・・・2 名
 - 九州ブロック・・・2 名

※ 都道府県大会の詳細につきましては、各主催者にお問い合わせ願います。

第 40 回少年の主張全国大会報告書～わたしの主張 2018 ～
溢れる想い、紡ぐ言葉、伝える未来。

平成 31 年 3 月発行

編集 国立青少年教育振興機構

〒 151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号

<http://www.niye.go.jp>

担当 教育事業部事業課

電話 : 03-6407-7718 FAX : 03-6407-7699

※転載の際は上記へご連絡ください。



支えよう
輝くひとの夢みらい



平成30年11月

子供・若者 育成支援強調月間



【実施主体】

内閣府、警察庁、金融庁、消費者庁、復興庁、総務省、法務省、最高検察庁、外務省、財務省、国税庁、文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、国土交通省、環境省、防衛省、最高裁判所、都道府県、市区町村、全国青少年育成県民会議連合会、青少年育成道府県民会議、青少年育成市町村民会議、青少年関係諸団体



体験の風を
おこそう